ある晴れた日に

paiちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある晴れた日に

【Ｎコード】
Ｎ８９８６Ｖ

【作者名】
ｐａｉちゃん

【あらすじ】
少年がある日目覚めると、ベッドの上だった。性別までも変える改造手術を施され何時の間にか異世界に。なにやら理由があるみたいですが、冒険をするなかで少しづつ明らかになるはずです。
初めての作品なのでミス等ありましたら大目に見てくださいね。

ここはどこ？

・・・知らない天井だ！

気がついて目を開ければ一面の白い空間。なんか、やわらかいベッドに寝ているみたいだし。ひょっとして、もしかしてたら俺って死んじゃったのかも・・・。イヤイヤちょっと待て、こういう時はまず落ち着いてなぜこうなったのかを思い出すのがセオリーって誰かが言ってたような気がする。

たしか、何時も通りに、山に芝刈りに行ったはず。毎年冬には木小屋いっぱいの柴を集めて1年間の五右衛門風呂の炊き付けにするのが叔父の家に世話になっている俺の仕事だ。両親が早く他界した俺を引き取った叔父との暮らしは、まあ良く言えばエコロジー、早く言えば山村の田舎暮らし、高校生になっても部活動なんてのは縁が無く、田んぼと畑の世話に明け暮れている。おかげで格闘技でもやってるのって感じの体形が維持できている。

柴を刈って梯子に3段重ねて・・・山を降りたはずだが・・・あれ！家まで辿り着いてないぞ！

とりえず、起きてみようとしたが体が動かん。上を向いたままの状態でかろうじて目が動くだけだ。いや、耳も聞こえるか。さっきから何やらガシャガシャとなにかを運ぶ音が近づいてくるのがわかる。

バタン！という音がするとガチャンとワゴンがベッドの脇に止まったみたいだ。

「気がついたのね。待って、今改造したげるから。」

女の子の声がした。イヤ、ちょっと待て！そんなことより改造だと！

人権無視！人でなし！って感じの目線を送るが、まったく無視！されている。

ウィ・・ンってドリル？の音が聞ける。もう、ダメかも？

・・・

フーッ！っと女の子が手のひらで額の汗を拭く。
隣で成り行きを見ていた甲冑姿の男が器用にヘルメットの後ろに大きな汗をかく。
「良いんですか？体の改造はともかくＤＮＡまでいじっては後々問題になるような気がしますが？」
「良いの、良いの。ＤＮＡって言ってもこの体は窒素生命体じゃないから関係ないし。」
男のフェイスカバーがガタンと落ちる。
「一体、どんな改造をしたのですか？」
「私たちと同じ、意識領域を核にした金属生命体！」
そう言うと、少女はテキパキと大工道具を片付け始めた。
それでは、このスプラッタ状態での改造手術は何だったんだろうと首を傾げる。
「Ｕｕーーン！」
良く寝たって感じだ。変な夢をみてたみたいだが、とりあえず起きて・・・なんだコリャ！！
無いところが・・・有る！。有るところが・・・無い！ついでに意識も無いいぃぃーー。
「こやつ気絶しましたよ。」
次元の狭間に捕らえられていた少年を見つけたのは姫であった。
姫は異世界の戦士だとはしゃいでおったが、持ち物は棒の先で直角に曲がった刃物と腰につけた頑丈そうな短刀？であった。戦士としてはそこそこの筋肉であったが、あのような武器でどのように戦うかは姫の緊急手術のあとじっくりと話しを聞くつもりであったが、いささか精神修行がなっておらなかったように思う。
「ちょっといじりすぎたかも？でも、目的遂行に何の問題も無いわ。私の核を・・・切片だけど、これに入れといたから。」

グタっとした少年？の体にいそいそと着替えを施し、最初に持っていた武器改造版を持たせると、小さなバックを腰のベルトに取り付けました。

「待ってください。」

あわてて男が小さな懐中電灯みたいなものをバックに入れます。

「あの武器では・・・せめてこれぐらいは、持たせます。」

少女が頷きます。

「まだ、気絶してるみたいだけど・・・こんなもんでしょ。では、がんばって！」

少年？の寝ているベッドのしたに大きな穴が広がると、ベッドが穴に吸い込まれました。

少女が指を弾くと、壁の一部が透明になります。二人が窓を覗くと、緑の惑星に少年を乗せたベッドが流星のように光ながら吸い込まれていきます。

「災厄に対する、今までの間接対応策ではなく、直接的なアプローチ！・・・はたして・・・」

「たまには違った方法でね。それに切片持たせたからいろいろと助言できるし、なにやってるか良くわかるし・・・」

いつまでも、いつまでも二人は流星の後を見つめていた。

異世界

うぅ～～ん・・・ここは！

見上げれば底抜けに青い空。なんか長い夢を見ていたような気がするけど・・・。草むらに寝込むようではまだまだ修行が足りないのかな？って独り言を言いながら立ち上がりました。

え？？って感じです。左手に小さな森。正面と右側は草原がどこまでも広がっており。後ろには大きな岩山がそびえたっています。

「ここは、どこだ？」

「やっと気がついた！」

女の子の声です。キョロキョロ見渡しますがそれらしい姿はありません。

「どこを見てるの？ここよ、ここ。」

声と同時に左の薬指に鈍い痛みが走りました。何時の間にか指に銀色の指輪があります。気のせいか淡く光っているみたいです。

「そう！それが私。正確には私の核を切片とした量子電脳を装飾品にしたものよ。」

先ほどの夢がよみがえります。・・・たしか、改造とか？

「そして、あなたは私の作品！改造人間なのだ！！」

思わず両手で体をペタペタさわりながら確かめます。・・・・おんなだ！！がくっと膝を着きました。

「なにをがっかりしてるの？あなたの理想の体にしたんでしょう？」

理想？？俺って・・・俺って・・・自己嫌悪です。お父さん、お母さん先立つ不幸をお許し・・ってとっくに両親死んでんじゃん。

「今度はパニクってるし・・・。あなたの中の理想の子のイメージを形にしたのに。」

ちょっと待て！理想とな？・・・・ということは、クラスメートのあの子をモデルにしてると？

「それに、今のあなたには性別は関係ないわ。金属生命体。流体金属が核を基に形状を固定してるから、動力もメビウス型重力場エンジン原子炉3基分の出力で放射能も出ないわ。」
「え！でも、性別は・・・この際置いといて、体は変わりないと思うけど・・」
「それは、擬態よ。表面形状はあなたの原型を基にモデリングした筋肉組織にあわせて変化するけど、筋肉は無いのよ。体を作っている液体金属がその場その時に応じて変化するだけよ。」
こまった。こんな体では、どうしようも無いのか。途方にくれていると更なる神託が加わります。
「あなたは、次元の狭間に漂流してたの。次元の狭間自体は、古い銀河大戦の異物ってとこかな。地雷みたいにあっちこっち仕掛けたみたいだけど未だ機能してるのが偶にあるのよね。あなたの世界でも神隠しって言葉が多分それだと思うけど。あなたは凍結した状態で見つかったけど、私たちの文明でも死者を蘇らせることは出来ないの。でも、あなたの意識、思念体というべきものは取り出すことが出来たわ。それを予備の核に取り込んで、生きている金属というべき流体金属で体を再生したの。あなたの世界でのサイボーグに近い存在になったと思いなさい。」
どうやら、人助けをされたのかな？とりあえず生きてるし？われ思う。ゆえに我ありって言葉もあるし・・・
「ところで、何でこんなところに？」
「そうそう！目的よね。・・・これは、あなたには関係ないけど・・・私達の昔の罪滅ぼしかな。今までは間接的に世界に干渉してたんだけど、今回はあなたがいるから直接に！ってね。・・・手伝ってくれるかな？」
「いいとも！ってなに言わせるんだよ。しかし、どんな形にせよ助けてくれたみたいだし・・・手伝うよ！」
どうすればいいのかと言う質問に指輪はこの世界で生きていけば、必ず判るというだけで黙ってしまいました。

生きていけと言われてもどうすれば・・・とりあえず持ち物検査をして見ます。
体：女の子の体です。クラスメートのあの子の容姿ですが、良くわかりません。
服装：Gパン、Gシャツ、薄手のハイネック、足はスニーカーですね。下着は恐ろしくて確認できません。
持ち物：腰のベルトに鉈がケースに入ってます。後ろのポーチには、小さな水筒、見覚えの無い懐中電灯、タバコにマッチが入ってました。それと、傍らには愛用の鎌？ちょっと肉厚で柄が木製から樹脂性に変わってます。
これで、どうしろと？思わず考えこんでしまいます。

・　・　・

鳥の鳴く声で我に返りました。何時の間にか座り込んで考えてたみたいです。
とりあえず人里に行こうと思い、それらしきものを探します。
右側方面にはどこまでも続く大平原です。
後ろは山でしたから、なにかあるとすれば森を抜けた先と思い歩き出しました。性別の変化からか重心位置が変わったからなのか最初はちょっとふらつきましたけど、数分もしたら大分なれました。どうやら足が長くなっていたみたいです。ちょっと嬉しくなりました。
だんだんと足取りは軽くなります。森に入ると、木立や木に絡まる蔦が邪魔にはなりますが、何時もやってきたことですから問題はありません。何時しか森の奥深く入っていきました。
さらに歩くと、道らしきものを見つけました。

お約束ですよね

森の中で道を見つけた場合の重要な選択！それは、左に行くべきか、それとも右に進路を取るべきか？

誰でも迷いますね。こういう場合の解決策は一つしかありません。少女は少し考え込むと、持っていた鎌を道の真ん中に立てました。鎌は微妙に揺れると右側に倒れました。

「うん！神様の思し召しだ。右に行こう」歩き始めたその時に！

「きゃーーー！」

誰かの悲鳴です。思わず聞こえた方向を指先で確認すると走り出します。幸いにも道の左側だったことから木立に邪魔をされません。どんどんと駆けていきます。

「こっちこないでーー！！」

涙目に訴える先には、グルル～と唸りながら少女を取り囲む野犬？の群れがありました。じりじりと少女は後ずさりますが、やがて立ち木に後退を阻まれてしまいました。野犬？達は取り囲んだ輪を少しづつ小さくしていきます。

もはや、これまで。でも1体だけでも倒したら後で何が起こったか村の人が判るはず。と覚悟を決めました。少女は杖を縦に持つと野犬に向かって叫びます。

「火炎弾！も一つ、火炎弾！」

杖の上にはめ込まれた小さな宝石から小さな火の玉が野犬に向かって飛び出します。

ギャン！と火の玉を受けた野犬が叫ぶとその体は炎に包まれました。さらにもう1体同じように炎と化します。

しかし、怯むことなく野犬は少女に近づきます。そして、ついに一匹がガルルと唸りながら少女に飛び掛りました。思わず少女は目を瞑ります。

ドゴ！！「ギャンッ！！」

鈍い音と、野犬の叫びが聞こえました。
恐る恐る少女が目を開けると、見慣れない服装の少女が左手の武器を野犬にバシ！っと叩きつけています。手に持つ武器は・・・どこか見覚えがあると思ってみて見ると鎌です。それで、どうやったら野犬を倒せるのかと不思議な面持ちで不思議な少女を見ていると・・・終わったようです。野犬の群れは半数近く倒されたことで、自分たちよりも相手が強いことを知ったように少女達の囲みを解くと森の奥に消えました。
「もう、心配ないよ！」
笑顔で少女に挨拶します。内心では、笑顔が肝心！スマイルスマイルって繰り返してますけど・・・
「ありがとうございます。私は、この先の村に住むサンディと言います。失礼ですが・・・どちらさまでしょうか？」
助けてくれた少女の服装は見たこともありません。良く見ると、少女の容姿も少し違って見えます。黒い瞳は初めて目にするものです。村人でもなく、旅人としても変わっています。
「良く判らないんだ・・・気がついたらここに居たし・・・」
助けたのに何か謝ってるみたいだと思いながら、鎌を調べています。丈夫な鎌です。前より肉厚で、柄は長くなりましたが持ち重りはしません。
「あのー・・お名前は？」
「うん・・・あぁそうだね。美浜龍維、名前がリューイね。」
「苗字をお持ちでしたか。貴族の方とは思いませんでした。」
「貴族ではないよ。俺の住んでたとこは誰でも苗字は持ってるもの。」
「では、遠くからの旅人さんですね。とりあえず、日も暮れますから私の村に来てください。」
う～～ん。とは言うものの、どうしたものか？第一、無一文だ！村に行っても泊まれないし食べられない！
迷っているとサンディは、大丈夫ですよ。私んちで歓迎しますか

らと、騒動で投げ出した籠を手に持つとリューイのてをガシ！とつかんで歩き出しました。
しばらく歩いていくと森が途切れます。ほーっ！とリューイは感嘆します。そこには段々畑が広がっており、ちょっと前までのリューイの故郷に良く似た風景でしたから。
段々畑を下っていくと村が見えてきました。村は丸太の柵で囲まれており、柵の前には空堀が掘られています。少し回り込むように歩くと門が見えてきました。
「とまれ！」
門番の制止の声です。槍を構えてます。
「おじさん！なんでとめるのかな？」
「サンディはいいが、後ろの見かけんやつは何者だ？」
サンディは、野犬から助けてくれた旅人だと説明しました。
「・・・それは、済まんかった。森の野犬には近頃みんな迷惑してた。わしからも礼を言う。」
どうぞ通ってくれとのことで門をくぐり村に入ると、サンディはくるっと振るかえりリューイに微笑みました。
「ようこそ、ナナイ村へ！」

サンディとライム

サンディの声に奥からお帰りなさい！の声がします。誰かいるみたいですね。

低い２段の階段を踏んで中に入ると、１０畳ほどのリビング兼食堂があります。右手には台所があるようで、軽快なリズムで何かを刻んでいる音がします。左手には、２つのドアがありますけど、寝室のようですね。小さいながらも住みやすそうです。

ここに座っててね。と言われた席に座ると、椅子の脇に鎌を立て掛けました。刃物をそのままにしておくと危ないですから、腰のポーチにあった布？でしっかりと包んでいます。

サンディが向い側に座ったの期に、質問タイムが始まります。

「・・・いろいろと聞きたいことがあるんだが？」

リューイが切り出します。

「ここは、どこで、今はいつだ？」

「カルキス王国のミルトン村！。今年は建国１１５年、黄金の月３５日！」

即答です。

「今度はこっちからね。あなたはどこから来てどこへ行くの？」

「・・・両方とも判らない。気が付いたときには、草原で・・・その後、森に入り・・・君を見つけた。」

「ところで、この村の防備は何だ？まるで戦争でもしているように頑丈そうだが。」

「あぁ・・あれね。戦争って訳じゃないけど・・・盗賊や魔物に備えるためよ。盗賊はめったに来ないけど、畑の取り入れが終わるころに来ることがあるわ。魔物は、あなたも見たでしょ。あんなのよ。いろんな種類がいるけど、ここには大きな魔物は来ないわ。でも、群れで来れれると大変なの。」

「この村に銃はないのか？」

サンディは首を傾げています。？って感じです。
「火薬・・・薬剤を調合して粉末にし、鉄の筒に入れて、その後、金属製の小さな玉を入れる。敵に筒先を向けたら火薬に火を付けると、勢い良く玉が飛び出るんだ。結構な殺傷力があるんだけど。」
「聞いたこと無いわね。飛ばすんだったら魔法で十分でしょ。」
サンディには興味ないみたいです。
「そうだ！魔法だ。ここはみんな魔法が使えるの？」
「出来る人と出来ない人がいるわ。それに、魔法には攻撃型と治癒型があるの。両方出来る人は・・・そうね。王国内に１０人はいないわ。」
「・・・おれにもできるかな？」
「あなたギルドカード持ってる？」
「いや？・・・何のカード？」
ひょっとして、怪しいカードかも知れません。作ったら最後、とことん支払いが続くカードがあることを学校で聞いたことがあります。
「冒険者の資格？って感じかな。身分証明書みたいなものだけど。」
「ないよ。」
ひょっとしてと、腰のポーチを探しましたがカードはありません。
そんな会話を続けていると、あれ！やっぱりお客さんだぁ。と台所から声が届きました。
小さな金髪の巻き毛の女の子が、上半身だけ壁から出してこちらを覗きこんでいます。
「こらぁ！行儀悪いでしょ！ちゃんとご挨拶しなさい！！」
トコトコと女の子がテーブルにやって来ました。
「こんにちは。ライムです。よろしくね、お姉ちゃん！」
ぇ・・えぇー！！！突然、サンディが大声を上げて立ち上がりました。ライムとリューイを交互に見てます。最後に、ライムをジッと見据えました。どうやらライムに説明を求めているようです。

「だって、ほら！」
ライムはリューイの一点を指差します。その指先は・・・そう！ズバリ胸です。自己主張気味なサンディと違い、控えめではありますが、確かに男の子の胸ではありません。
「言葉はヤックルみたいだけど・・・お姉ちゃんより背が高いのに、小さいけど・・・お姉ちゃんだよ！」
ライムの指摘に、冷や汗がタラタラと背中に流れるリューイでした。
ちょっとまって、確かに性別は聞かなかったけど・・・背は高いし・・・髪も、肩までしかないし・・・言葉使いはあれだし・・・強いし。
このまま家に泊めて、お料理作ってあげて・・・美味しいよサンディ！。まぁ！嬉しいわ、って出来ないじゃない！！それから・・・そして・・・それをネタに村の教会で、って無理じゃない！！
妹の指摘で簡単に行動計画に狂いが生じたようです。意外といい性格ですね。
「まっしょうがないか。確かにライムの言うとおりみたいね。でも、女の子なら普通こんな姿してるでしょう？」
「確かに、男物の服だけど・・・気が付かなかったの？」
そうです。普通は気が付くはずですが、白馬の王子様効果で、てっきり男の子と思い込んでいました。
「あ～～ぁ。てっきり、男の子だと思ってたんだけどな～。」
なかなかあきらめきれないみたいです。黄金月ももうすぐ終わります。次に来るのは灰色の月。雪の降る銀色の月が来る前にしなければならない冬支度は、灰色の月にしなければなりません。もうすぐ町から帰る母を含めての女手３人では出来ない仕事もあるわけです。
「これでも、けっこう力はあるから・・・言ってくれればできることはさせて貰うよ。」
「それと、仕事を探す間、出来れば泊めてほしい。蓄えが全く無

いんだ。」
残念そうに腕を組んでうつむいているサンディに断ります。
「そこは、心配しないでいいわ。仕事は、明日にでもギルドに行けば何とかなると思うけど・・・」
そんなサンディを心配してか、背中を優しく撫でながら、ライムが、大丈夫？お姉ちゃんをしています。
「ところで、お料理出来たけど・・・運んでいいのかな？」
ライムが作ったみたいです。小さい子なのに関心ですね。
「いいわよ。」
手伝おうかとリューイも声を掛けましたが、大丈夫よ！と軽く断られました。
運ばれてきた料理は、根菜類タップリのスープと黒パンでした。いただいます。の挨拶で、美味しいお食事タイムです。
「たまにはお肉が欲しいね。お姉ちゃん。」
村の生活をリューイに話しながらパンを千切っていたサンディにライムが話しかけました。
「う～ん、今年は不漁だってザットさんいってたからね～・・・でも、獲れたとしても、家の株は少ないからあまり配当はないかもね。」
「猟と株って関係するの？それに配当って？」
あ～そうね、わからないかも！とサンディが説明します。
猟は専門の人が行っており、猟に専念するためにその家の家族を養う費用を株の形で皆で負担します。猟の獲物があった場合は、その負担金、株数に応じて獲物から得た肉が分配されます。株は1年間有効で、その応募は灰色の月の中ほどで行われます。
サンディ達のお母さんも、灰色の月初めには出稼ぎから帰ってきます。町で働いたお金の一部を使って株を購入し、不定期ながらも子供たちの料理に使用されることになるわけです。
「俺が猟をするのは出来るのか？」
「ＯＫよ。村の連中も猟をしてるもの。でも、専業者じゃないか

ら殆ど獲れないけど・・」
そんな話をしながらも、食事は進みます。ご馳走さまの後の片付けはライムがヨイショヨイショとやりました。
「両親の部屋だけど・・・ここを使ってよ。」
「あぁ、すまない。」
サンディの指示に従い８畳ほどの部屋に入ります。ツインベッドに上着を脱いでもぐり込みました。
ふと、疑問がわきました。もう夜だよなぁ。なぜ、食堂もここも明るいんだ！
あたりをキョロキョロ見渡すと、天井付近に石版でしょうか白く発光している物体があります。
「お姉ちゃん、寝ちゃった？」
ドアが少し開いてライムが顔を出します。
まだ、寝てないよ！と答えると、トコトコとリューイのベッドに入ってきて言いました。
「お話聞かせて・・・」
小さな子には逆らえません。いいよと答えてリューイの昔話が始まります。
「むかし、むかし・・・あるところに、お爺さんとお婆さんが住んでました。・・・」

ギルドに行こう

「・・・そんでもって、めでたしめでたし・・・」

桃太郎のお話を終えて、ライムの様子を見てみます。寝たようです。

リューイは左手を顔の前に持ってくると、薬指の指輪に小さな声で話かけます。

「おーーい！聞こえるか？」

「聞こえるよ！。それに声に出さなくてもＯＫだよ。私は君の思考を直接読めるし、逆もね。」

（わかった。少し確認したいがいいか？）

（ＯＫ！）

（今日、野犬と戦ったが、俺の体どうなってるんだ？反射神経、スピード、力・・・全て前と違うぞ！）

（前にも言ったけど、あなたは通常の生命体ではないの。流体金属が核の意思を読み取って、通常の肉体での動きをシュミレーションした結果に基づき形状を変えているの。要するに、骨も肉も血液も無いのよ。だから、擬態して人間のように振舞えるようにあなたの動力炉の出力の内、実に３割がそのために消費されてるし、核に付随した量子電脳の使用率では４割を超えているわ。）

（・・・要するにスーパーになったと思えばいいのかな。）

（生前の１０倍出力で、私がリミッターをかけているわ。最大出力は・・・その時にまた。）

（俺の鎌、どうしたんだ。あれって、武器じゃないぞ！）

（え！あなたは異世界の戦士じゃないの？戦士＝武器＝刃物。合ってると思うけど・・・）

（あれは・・・農具だぁ！！！そして、俺は・・・農民だぁ！！！）

（え！・・・え！！・・・・・違ったの！）

（とりあえず野犬程度なら追い払えるけど、それ以上だと期待して貰っては困る。）
（・・・この世界だと・・・ドラゴンいるよ！）
（近づかないようにする。）
（あとは・・・そうだ！この体で食事取ったけど大丈夫なの？）
（胃袋の代わりにディラックの海がコンパクトに、その都度作成されるから問題なし！それと、怪我した時に血が出ないと困るから、同じように見える液体を有機合成するから少しは食事をしてちょうだい。）
（それと、ここには魔法があるみたいなんだが、俺には使えるのか？）
（無理！でも、似たことはできるからそれで我慢してね。今、データを転送するわ。）
（・・・癒しの光：流体金属応用個人限定版、ボルト：動力炉からの余剰電力放出、メギドの火：宇宙船からのメガ粒子砲攻撃、メテオ・ストライク：小惑星に核パルスエンジンを付けて目標地点に落とす・・・とりあえず、前2つにする。）
（そんな感じで使えるから。それと、将軍が可哀相だ！って言いながら何か送ってきたから転送するわ。）
（なになに・・・サルでもわかる剣の使い方：これであなたも帝国騎士！！）
（将軍が士官学校で使ってた教科書ね。よく読んどいて。あなたの体はあなたのイメージ通りに動くから。）
いろいろ言いたいことがお互いあるようですけど・・・そんな、こんなで、夜が更けて行きます。

・
・
・

コケー、コケー！！
ニワトリが鳴いてるみたいです。ちょっと声が違いますけど・・・

「ウ～ン・・・朝か！」
リューイが起きたようです。でも、寝る必要あるんですかねぇ。
ベッドの隣を見ると、ライムがいません。とっくに起きてたみたいです。
もぞもぞしながら上着を着て、スニーカーを履きます。スニーカーの形に変化はありませんが、材質が違ってるみたいです。生地が緻密になっており、しなやかです。
食堂へ行くと、ボンバーヘアーを揺らしながらお茶を飲んでいるサンディがいました。相当寝相が悪いみたいですね。
あっけにとられてサンディの姿を見ていると、顔を洗って！と台所をサンディが指差します。台所では、ライムがクレープを焼いていました。
リューイが来たことに気が付いたライムは、ヨイショ！と踏み台を降りると台所の隅にある水瓶から小さな木のオケに水を入れてリューイに渡します。水道が無いみたいです。
外で顔を洗い食堂に戻ると、すっかり朝食の準備が出来ていました。ライムは良い嫁さんになるなぁ・・って、リューイは感動してます。何時の間にか、サンディのボンバーヘアーがストレートに変わってます。??疑問はありますが、ちょっと聞いてはいけないと思ったりしてます。
リューイは、質素な朝食を取りながら、この世界の文明を自分の世界と比較してみました。
水道が無い、家の造りはログハウス風、暖房は暖炉、朝食の食器は素焼きのコップと皿です。西洋世界の中世って感じですかね。王様も居るようだし、サンディは貴族と最初言ってたし・・・
「さぁ、行くわよ！」
食事が終わると、昨日の籠を持ったサンディがリューイに告げます。
昨日と同じようにサンディの後からついていきます。
昨日曲がった十字路を曲がらずに歩くと、周りの建物が、少し立

派になります。木造2階建てに、間口もサンディの家の倍以上あるでしょう。
「ここよ！」
その声に、サンディの指差す建物は、周りの建物と違って石造りでした。
中に入ります。ドアの先にカウンターがあり、何人かの女性が立っています。
その中の1人にサンディは声をかけました。
「あのう・・・一人登録したいんですが・・」
「新人登録ですね。出来ますよ。あなたでしょうか？」
「いえ、この人なんですけど・・・」
後ろで、見ていたリューイを前に出します。
「では、この書類に必要事項を記入してください・」
お姉さんが、書類を出します。
リューイは受け取った書類を、読もうとして気が付きました。
（これは！・・・ギリシア文字？・・・いや、ヒッタイトに近いかも・・・とにかく読めん！！）
書類を斜めにしたり、逆さにしたりして考え込んでいるリューイをギルドのお姉さんとサンディが不思議そうに見ています。
「・・・あの・・ひょっとして、文字が読めないとか？」
リューイがコクンとうなずきます。
「大丈夫！私が代筆したげるから！」
サンディはリューイから書類を取り上げると、カウンター備え付けのペンで書類の記載事項を埋めていきます。
なまえは・・・リューイ・ミハマ、性別は・・・出身地は・・・ここでいいか、特技・・無し、・・・・
何か適当なところもありますが、書類を書き終えるとギルドのお姉さんに渡します。
「はい、ＯＫです！」
「ではこれに手を入れて下さい。」

カウンターの下から大きな箱を取り出します。脇に手が入る穴が開いてます。
リューイは、恐る恐る箱の中に左手を差し込みます。
「この者の、真実を示せ！」
ギルドのお姉さんが呪文を唱えると、左手が何かに包まれ・・・強く締め付けられます。
そして、突然に左手が開放されます。
「ハイ、終わりました。ちょっと待っててくださいね。」
箱から小さなカードが出てきました。名刺より小さいです。
「どれどれ？」
カードをお姉さんとサンディが覗き込みます。
・生命力：計測不可・・・
・体力：計測不可・・・
・俊敏性：計測不可・・・
・魔法力：ゼロ
・魔法対性：それなりに・・・
カードをひっくり返します。
・氏名：リューイ・ミハマ
・出身地：ミルトン・カルキス
・性別：女
・職業：仕官候補生見習い
「エェーーー！！こんなんでこんな職業が付くの？？だいたい、計測不可って何なのよ！これ壊れてるんじゃない！！」
「あなた・・・女の子なのね？」
反応はちょっと違うみたいですが、リューイはとりあえず無視してます。
「壊れてはいないわよ。計測不可というのは、計れないってことで計測限界を超えた能力ではないわ。保留ってことね。」
おねえさんが女の子なんだ！って確認するようにリューイを見ながらサンディに答えてます。

銀色の鎖にカードを取り付けてリューイに渡します。
「カードはランクに応じて3種類あるわ。下から順に鉄、銀、金に変わるの。それと、カードの頭、鎖を取り付けるヘッドがある方ね、ここに星があるでしょ。あなたは最初だから・・・変ね？星1つのはずだけど・・・3つあるのね。それだけ実力はあるってことか。」
「はい、これで全部終了！私たちギルドはあなたを歓迎するわ。」
は～って感じで聞いていたリューイの腕をサンディが引っ張ります。
「次に行くわよ！」
左手のカウンターに行くとサンディは籠を渡します。
「これ、お願いします。」
「どれどれ・・・ジギタの根が5本、ケアの株が8本・・・・それと野犬の牙が6本！・・・無茶はするなよ、まだ黒の2なんだから・・・」
お爺さんはそう言うと籠の中身を引き取り，硬貨を籠に入れます。
「ジギタが2エント、ケアは1エント、野犬は5エントだから・・・48エントじゃな。」
ニコニコしながら籠を受け取ると、その中から20エントをリューイに差し出します。
「あなたが倒した分よ。」
え！って感じでリューイは戸惑いましたが、それはいいと受け取りません。それはそれ、これはこれ、ってサンディは説明します。だったら・・・と交換条件をリューイが提案します。だって、ギルドの職員が全員注目して見てるんですもの早く出たいですからね。
交換条件は、リューイの持ってる鎌のケースが欲しいというものでした。今は布に包んでいますが、何かの時に解くのが大変だからです。
皮製ならこの半分で出来ると思うけど・・・等とサンディ達は次のお店に向います。

パーティ名は赤い靴

道を挟んでギルドの斜め向かい側に細工師の店があります。
ドアの上には、鋏とノミの絵柄の看板が掲げてありました。
ドアを開けながら、おはよう！って挨拶すると、店の奥で何やらごそごそやってた人が振り返ります。筋肉質ですが、背ガ極端に低くリューイの肩に届くかどうか・・・
ドワーフだ！いるんだ。そうだよな・・・ドラゴンもいるって言ってたし・・・
ビックリしてるリューイをよそに2人は商談です。
「この人が持ってる武器のケースを作って欲しいんだけど。」
「どれ、見せてみな。」
リューイは鎌を差し出します。
ドワーフは、巻きつけられた布を解くと、しげしげと鎌を見ています。
振ってみて、刃を指先で確認します。
「ニーちゃん。・・・これはどこで手に入れた？・・・わしらドワーフの一族でさえこんな金属を作ったものはおらんぞ！それに、この柄の材質は見たこともなければ聞いたことも無い！」
刃先の確認で少し指先を切ったみたいで、いててなんて言いながらも質問します。
「あのね！この人はリューイって言って、女の子なの。！！」
サンディの訂正に、ドワーフはリューイをまじまじと見ます。
最後に、リューイの胸で止まり、サンディと交互に比較していましたが、納得したようです。
「わるかった。でもな、お前達ぐらいの年頃の娘は、これでもか！！！っってぐらいの体形してるもんだぞ。着てるもんが男ものだし、言われない限り判らんわ！！」
ごめんなさいとリューイは何故か謝ると、昔から家に伝わるもの

ですと答えました。まぁ、嘘ではありませんからね。
その答えに納得がいったのか、神代の名工が打ったものかと関心しながらしばらく鎌を眺めていました。
「良い物を見せて貰ったし、女の子を男と間違えたのもあるし、簡単なものでいいならタダでやってやる。ちょっと待ってろ。」
そう言うと棚から何かのケースを手に取り店の奥に下がりました。
リューイは、暇つぶしに店の見学です。いろんな種類の皮細工、籠等の工芸品が並んでいます。2、3手にとってみると緻密な仕上げに驚きました。ドワーフは器用だ、とは言われていますがここまで出来るのか！って実感してます。
「ほれ、こんなんで良いだろう。」
ナイフのケースをベースにしたようです。鎌の刃先をスッポリと被せて、ずれないように鎌の頭を回すように幅広の革帯で押さえ、皮ケースに付いた金具で止めています。ケースには20cmほどの鎖がついており鎖の先にリングが付いていました。
「使い方は・・・鎌の柄を剣を挟むようにベルトに挟んで、そのリングをベルトに通しておく。そうすれば危なくないし、邪魔にもならん。取り出す時は、鎌の柄を少し抜いて、ケースと革紐の間に親指を入れて持ち上げると、革紐が外れてケースも落ちる。」
リューイは教えられた通りにやってみました。収納する時はちょっと面倒ですが、取り出すときはすんなりいきます。慣れれば見ないでも出来そうです。
本当に、タダで良いのかと聞いても、とりあいません。
「儲けた！と思えばいいじゃない。家に帰ろう。」
サンディがニコニコ顔で言いました。
家に戻る途中で、急にサンディが立ち止まると、ほら！あそこが村の共同井戸よ。と言って指差します。路地の奥がちょっとした広場になっており、そこにはつるべ式の井戸がありました。小さな子が水桶を抱え歩いてきます。
ライムでした。

リューイはヒョイと水桶をライムから取り上げます。
「ありがとう、おねえちゃん！」
ライムは嬉しそうにお礼をいいます。そんな彼女にサンディはギルドから受け取ったお金を渡します。え！こんなに？って言いながらもサンディから籠を受け取ると、２人にバイバイしながらどこかに出かけて行きました。
２人がサンディの家に戻ると、テーブルにはお茶の用意がしてありました。前もってライムが用意しておいたみたいですね。
サンディが暖炉のポットからお湯を入れてカップにそそぎます。
しばし時が流れます。
「ねぇ！パーティを組まない？」
突然、テーブルに身を乗り出したサンディが言い出しました。
「パーティ？？」
いぶかしげなリューイにサンディは説明します。
・パーティとは、冒険者が目的達成のために集まる集団
・手に入れたものは、パーティ内で分配。均等配分が基本
・パーティでしか受けられない依頼を受けられる
・リーダーが必要
・パーティは自分達で好きな名前を付けられる等等
「いいよ！リーダーはサンディで名前は・・・」
「なに言ってるの！リューイはクラスが私より上なんだからリーダーはリューイよ！！」
「ライムもリューイお姉ちゃんでいいと思う・・・」
何時の間にか、帰ってきたようです。トコトコと籠を両手に持って台所に向いますが、すぐに帰ってきてサンディの隣に座りました。
「・・・お姉ちゃん・・・ちょっと危なっかしい所があるから。その点、リューイお姉ちゃんなら安心できる！」
断言してます。妹に危なっかしいって言われるのも・・・
「じゃぁ、とりあえず！ってことで、俺も結構無茶するところあるから。」

ずっとでいいよ。って言われてますけど、一応念押ししておけば安心です。
何で急にパーティを組む必要があるのか疑問でしたが、どうやら、レベルを短期間で上げたいみたいです。今までは、薬草等を調達しながらギルドに売っていましたが、村から遠く離れた森には魔物や野犬等の襲撃を受けるため、まとまった数をそろえることが出来ません。
周囲を気にしながらの薬草採取は、非常に疲れます。それでも、たまにちょっと油断した隙に野犬等に出会ったことがあります。昨日は珍しい薬草を見つけて夢中になってた隙に野犬に囲まれたみたいです。
1、2体の野犬や魔物でも、塵も積もれば・・・何時の間にか星2つまで成長してます。レベルが上がれば上がるだけ体力、魔力等も上昇しますから、よりいっそう仕事がし易くなります。
「それで、名前はどうするの？」
「・・・・う～～ん！・・・・リューイ何かない？」
丸投げですか？それでもリューイは考えます。
少し考えましたが、ふと解決策が浮かびました。・・・パクリでいいじゃん！！でも方向性は考えないと・・・
「どんな名前のパーティがあるの？」
「え～とね。私が知ってる中では・・・一番強いのが、銀の剣。その次が、トットコハムハム。女性ばっかりのパーティに白い子猫が・・・」
なんか適当です。どんなんでも良いみたいです。
ハァ～って下を向くとライムの靴が目に入りました。ちょっと色あせていますが・・・赤い靴です。
「決めた！・・・パーティを赤い靴と命名する！！」
おぉー！！って感じで2人が拍手します。
「良い名前ね。女の子って感じが良いわ。」
「やはり、リーダーだね。良い名前つけるもの！」

ライムはそう言うと席を立ち台所に向います。
昨日より、１皿多い夕食を食べ、就寝となりました。
その夜、リューイがベッドに入り、しばらくするとドアが少し開き、金髪巻き毛が顔を出します。
「お姉ちゃん・・・いい？」
今夜のお話は、スズメのお宿です。
「むかし、むかし・・・あるところに、お爺さんとお婆さんが・・・」

最初のクエスト

ライムは眠ったかな？・・・よしよし・・

（もしもーし！聞こえたら返事願います！！）

（なにかしら？）

（どうも明日から2人で、探索をするみたいなんだけど・・大型の獣が出てきたらどうしようかと・・・）

（あなたが前に出れば大概の獣いや魔物だってＯＫよ。怪我したって、癒しの光：自己限定版が使えるし。鎌改造版も岩を叩いても壊れない。それに、あなたは気付いてないかも知れないけど、腰の鉈も改造版よ。切れ味抜群！）

（それと・・・あなたが魔法使いたいってことが将軍ものすごく気にしてて、部下に相談したみたいなの。そしたらその部下がやる気満々になって・・・レギオンって名付けたわ。鎌改を頭の上に掲げて【レギオン！】よ。但し、絶対に狭いところで使わないでね。）

要するに、盾になれってことだよな。でも、レギオンってどっかで聞いたころあるんだが・・・

（ところで、君の名は？・・・意外と、名前知らないと呼びかけ難いんだけど・・）

（・・・そうねぇ、ほんとの名前はあなたには発音しにくいから・・・みんなと一緒に【姫】で良いわよ。）

（姫なんだ・・・）

そんなこんなで朝になります。

昨日のように鳥の声で目覚め台所に行くと、すっかり身支度したサンディが待ってます。

顔を洗い、ライムの用意した朝食を、美味しいって言いながら食べてます。

「さて、準備は・・・リューイは特にないわね。ライムはどう？」

え？・・・ライム？今、お皿下げてるけど・・なんで？
「良いよ！バッチリ！！」
ライムは台所から大きなリュックを担いで返事をします。
「さぁ！出かけるわよ。まずはギルド！！」
「ちょっと、待ったぁ！！！・・・ライムを連れて行くのか？まだ子供だぞ！！」
慌てて、やめなよ！とリューイが止めますが、これあるから私も冒険者とライムがギルドカードを出します。鉄の星１つ。軽射撃手です。
「ほら！」
ライムが後ろを向きます。リュックの背中に十字弓が括りつけてあります。
遠くから、撃つのか。それならなんとか・・・いや！その荷物はなんだ？サンディなんか籠一つだし、いくらなんでも多すぎだろ、フライパンの取っ手が出てるし・・・ライムの背の半分はあるぞ！
「あぁ、このリュック？これはライトの魔法効果のある魔法具よ。重くないから大丈夫！」
心配げにな俺を気遣って解説してくれました。何でも、中に入れた物の重さを百分の一にするとか・・・２０キロとしても、２００グラム問題はありません。

そんなこんなで、３人仲良くギルドに向いました。
昨日より時刻が早いのかギルド内に数人の人影があります。ゴツイ体に一部鎧を金属板で補強した皮鎧、幅広の長剣や大型の両刃斧なんてのを持ってます。・・ちょっと近づきたくない感じです。
そんな彼らを気にせずにサンディがカウンターへ向います。
お姉さん！ちょっと・・・なんて声がするところを聞くと、昨日言ってたパーティの登録をするみたいです。
チョンチョンとGジャンの裾引かれます。下を見るとライムが掲示板を指差してます。

「お姉ちゃん、時間かかるみたいだからあっちで待ってよ！」
ギルドのホールの真ん中でずっと立ってるのも考え物です。
リューイは、うん！と頷いてライムの手をとって掲示板に向います。
そういえば・・・リューイは字が読めません。
「なんて、書いてあるの？ライム読める？」
「ライム読めるよ！えーとね。・・・ジギタの根：１５本以上、４０エンタ。・・爆弾キノコ：１０個以上、３０エンタ。・・・噛み付きトカゲの討伐：２０匹以上：４０エンタ。・・・」
いろいろあるみたいです。でも、ライムが掲示板の依頼書を指差しながら呼んでいるのを聞いているうちに何故か一部の文字が読めるようになっていることにきがつきました。これって？？
（文字と発音が合致したみたいね。あなたの核は、あなたの世界の大型コンピューターを凌ぐわ。）
（ご解説ありがとうございます。）
「さて、どれにしようかな？」
サンディの用事が終わったようです。
「最初なんだから、簡単なので・・・これかな？」
ライムと２人で覗き込みます。

［メルル草の球根５０個で銀貨２枚！　・・今ならトレッタ草原で取り放題！！・・］

これって、あやしくないか？・・・取り放題って断るところが、どうも気になるんだが・・・
「良いんじゃないかな。３人もいるんだし。」
「でしょう！！やっと運が向いてきたって感じよ！」
ちょっと、引っ掛かる所もありますが、サンディ姉妹が納得してるところを見ると、俺の危惧なのかなぁ？って感じで了承します。
「トレッタ草原は、森の南にあるの。最初に出会った森の小道を

途中で曲がれば行けるわ。」
ひょっとして、俺が最初にいた所なのかな？それなら心配ないかも・・・
「では、【赤い靴】しゅぱーつ！！」
トコトコと歩いていきます。
村の門では、門番のおじさんに、女の子2人を連れて行くんだから変なことしちゃだめだぞ！って言われましたけど、サンディが小さな声で、女の子よ！って告げたらえらくビックリしてましたけど・・・
段々畑の小道を登り森に入ります。この前のように野犬が襲ってくるかもしれないのでリューイが先頭になります。
森の中は、木立が茂り見通しが利きません。
（獣の気配は無いな・・って、俺、気配なんて判るの？）
（解説しましょう！それはあなたの生体感知機能が無反応なためよ。生体以外に動体も使えるから。）
どうも、ご丁寧に！。とりあえず害はなさそうなので便利に使わせて貰います。
サンディが襲われていた所をを通りすぎてしばらく行くと道が二股に別れています。
「こっちよ！」
どっちかな？って悩んでいるリューイに、サンディが指差します。
少し歩くと、突然に視界が広がります。
トレッタ草原です。
柴草のような草が、ライムの膝くらいの高さでどこまでも広がっています。

レギオンって？

３人は、草原を歩いていきます。
最後尾の少女は籠を手に持って、真ん中の少女は大っきなリュックをしょって、先頭の少女？は手を頭の後ろに組んで・・・まるで、ピクニックみたいだ、とリューイは思ったりしてます。
しばらく歩くと、サンディが遠くの小さな潅木を指差しました。
「あそこよ！あの潅木はこの草原の水場の目印なの。水場に近くにはメルル草が生えてるわ。」
「ラジャー！」
リューイはコースを潅木に向けます。
「ところで、銀貨２枚ってどのくらいの価値があるの？」
「銀貨はね。１枚で銅貨５０枚、５０エンタだよ。銀貨１枚あれば、宿屋で１晩泊まれるし、１０エンタあれば、食堂でおなか一杯食べられるよ。」
「ありがとね。」
ライムに礼を言います。
１エンタは１０円ってとこか。銀貨１枚が５０００円ってとこだね。物価的には日本と同じかも・・・
歩け♪歩こう♪なんて歌いだすと、ライムが教えて！ってねだったりしてます。サンディも交えて３人で合唱しながら歩いてます。

突然、草原がそこだけ丸くくり抜かれた広場みたいなところに出ました。真ん中に小さな泉があります。少し離れて数本の潅木が茂ってます。
「ここでーす！」
サンディが宣言します。
「メルル草は、私とライムで集めるからリューイは見張りね！・・・でも、その前に！」

「ちょっと早いけど、お昼タイムだよ！」
泉の辺に大きな石があります。リューイはそこに立って、周囲の確認です。・・・異常なし！・・・・
ライムがリュックをどっこらしょって感じで下ろすと、中をごそごそかき回しながら食器等を取り出してます。
鍋を取り出した時、鍋にひっかかったフライパンが、転がり落ちました・・・弾みで転がり・・・泉にジャブン！！
すると、泉の水がゴゴゴ・・と音を立てて盛り上がります。
サンディ達がビックリして見守っています。
「・・・ここで、泉の精が出てきて、貴方の落としたフライパンはこれですか？って金のフライパンを持って出たら・・・これ投げつけるからな！！」
リューイがライムほどの大石を頭上に持ち上げて泉に宣言します。
ズズズ・・・と盛り上がった泉の水が引いていきます。
・・・あ！・・・ポイっとフライパンが泉から投げ出されました。
やはり、っとリューイは思ったりしてます。
「ねぇ、どういうこと・・」
「お約束ってやつだ。欲に目が眩んで、はいそうです。なんて答えると食べられちゃうんだ。」
「良く判らないけど・・・気をつける。」
そんな事がありましたけど、ライムは手早く食事を作りました。
今日のお昼は、パスタのような焼きウドンみたいなものです。
へ～麺類はあるんだ！今度リクエストしてみよう。と思いながらもリューイは美味しくいただいてます。
「あれ？今日の料理には肉が入ってる？」
「それはね。昨日沢山お金をもらったでしょ。それで、ハムを少し手に入れたからなの。ほんとひさしぶり！」
（そういえば、昨日の４８エントをサンディはライムに渡してたっけ。）
サンディは全く料理をしてません。昨日もそうでしたから、ライ

ムが何時もしてるんだと、思いましたが口に出して言うことはありません。人にはいってはいけない事もあることをリューイは知っています。

おなか一杯に食べた後は、本日のクエスト【メルル草の球根：50個】です。

リュックから小さなスコップを2個取り出すと、泉から少し離れている地面を掘り出しました。

砂地に小さな2本の葉がチョコンと出ているのがメルル草みたいです。

「リューイは、そこから周りを見張ててね。草原は魔物も出るから！」

潮干狩りみたいに球根を捜してる2人に、石の上から片手を挙げて答えます。

周囲を見張っていた、リューイの頭の中でピキーンっと警報がなりました。

続いて、目の前に半透明のレーダーのスクリーンみたいなものが展開されます。そのスクリーンに左下の方向から急速に接近する赤い点が3個あります。

（生体監視に何か、引っ掛かったみたいね。）

（便利な機能だけど、何かまではわからないのか？）

（経験は反映するわ。最初の接触までは不明なの）

「作業中止！！何かが来る！」

リューイは2人を大石の上に上げて敵が来る方向に立ちケースから鎌改を取り出します。

「・・・姿が見えないけど・・・草が倒れて移動方向が分かるわ。・・・草蛇ね。」

「草蛇は太さは私の胴ぐらいで、3人分ぐらいの長さがあるよ。毒は無いからね」

２人が敵を確定してくれますが、あまり嬉しくはありません。
（・・レギオン・・）
（え！やるの？）
（ここなら、安心して使えるわ。貴方も、一度試しといた方が良いと思うでしょ！）
リューイは、草蛇のやって来る方向に体を向け、鎌改を頭の上に掲げます。
【レギオン！！】
ドッカーン！と言う音が響き渡ると１００ｍぐらい右側の空間が歪ます。
ゆらゆらと歪んだ空間から（ウヲー！）というときの声が響くとともに、抜刀したローマの戦士風の鎧を着た集団で飛び出します。
戦士達は凄まじいスピードで草原を駆け草蛇とすれ違いざまに剣を振り下ろします。
バシュ！バシュ！！と何かを切りつける音が立て続けに響きます。血飛沫で、あたりを霧のようです。
戦士達はそのままの速度で、左側に発生した空間の歪みに消えて行きました。最後の１人がこちらを振り向きピースサインを出してます。

あっけに取られていた３人ですが、
「お姉ちゃん・・・あれ、なに？」
ライムの素朴な疑問に、（レギオン・・・大勢なるが故に・・・）と答えます。
「すごいね！今までに見たことも、聞いたこともないよ！」
（ゴメン、俺も初めてなんだ・・）使ったことを少し後悔してるみたいです。
「ほら！行くわよ。草蛇の牙は良い値段で引き取ってくれるわ！」
突然、草蛇の報酬に気が付いたサンディが２人を促します。
３人は草蛇の受難の場所に近づきます。そこには、細切れになり、

原型を留めていない肉塊がありました。何体の草蛇なのか判断できないほどです。
「あった！あった！！」
サンデイが、肉塊を棒でつついてましたが、目的のものを見つけたようです。
「この量なら5、６本見つけられると思ったけど・・・」
どうやら3本見つけたものの、不満そうな顔付きです。

さて、メルル草球根狩りの続きです。さっきの騒ぎで投げ出したスコップを使い片っ端から球根を掘り出していきます。
「こんなものかしら？ライムいくつある？」
サンディはそう言うと、片手で顔の汗を拭います。
「え～とね。６０個はあるよ！」
サンディが持っていた籠の球根を数えたみたいです。
「それでは、これで終了！村に帰るわよ！」
３人は泉の水で顔を洗うと森の小道に戻りました。

リューイの技

森の小道を村に戻ります。
初めてのクエストは問題なく終了しました。っとこんな気分でいると何かが必ず起こるものなのです。
キュピーン！
リューイのレーダーに何かがひっかかった模様です。
（うん・・何だ、何だ？）
（リューイもてるねぇ、またなんか来たみたいよ！でも、分かんないとこみると、これも新型ね。）
目の前のスクリーンには近づく赤い点があります。でもリューイ達が進んでいるのですから、相手はまだこちらに気付いていないと考えられます。
「スト～ップ！前になんかいるみたいだ！」
「ストップって？」
「また、蛇かな？」
とりあえず止まりました。ストップとは止まれの事だよってライムに説明します。
「判んないけど・・・いるみたい。こっちにはまだ気付いていないと思う。」
「でも、この道を抜けないと村に帰れないよ。道をそれると森は移動し辛いし、魔物や獣がうじゃうじゃ居るし・・・」
「じゃあ、不意を突いて仕留めよう。」
作戦が決まったようです。サンディは杖を持ち直し、ライムは十字弓を背中から降ろして最初の矢をセットします。リューイも鎌改を左手でケースから取り外して構えます。
そして、そろそろと小道を進みます。
すると小道の先に、大きなそれは大きな猪がこちらを睨んでいます。

（オッコ〇ヌシ様みたいだ！）それぐらい大きいのです。
「来るわよ！」
かなり遠くから駆けて来るのに地面が振動します。
「火炎弾！、続けて火炎弾！！」」
サンディが魔法を連射します。
「ッテー！」
ライムの十字弓から短矢が飛んでいきます。
巨大猪の顔面に炎が上がり、矢が突き刺さりますが、そんな攻撃はものともしません。さらに突進してきます。
リューイが前に出ます。左手で鎌改を持ち刃を下側にして構えますが、持った手はブルブルと震えてます。
（逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ・・・）繰り返してます。
（・・加速装置！・・）
（え？なにそれ？）
（いいから早く、唱えて！）
（加速装置！・・・）
リューイの頭の中の何かがカチリといったような気がします。
途端に、周囲の音が消えました。木立から落ちる葉が空中で止まっているように見えます。
（あなたの運動能力等を１００倍に高めたわ。今回は一気に最大まで上げたけど、練習すれば自分に合った能力に任意に設定できるから・・）
（これって、時間を止めてるの？）
（いいえ、周囲の時間経過は変化しないわ。あなたの能力が上がったことで時間が止まったように見えてるの。そこの２人には、一瞬であなたが消えたように見えてるはずよ。）
よく周囲を観察してみると、空中で停止したように見えていた木の葉も少しずつ回転しながら落下しています。
（これなら、あの猪も怖くないでしょう？がんばってね！）
猪の突進がスローモーションに見えます。

リューイは駆け出すと、猪の左側に回ると擦れ違いざま、鎌改を下から上に切り上げます。
切った感覚はありますが音はありません。しばらくすると重低音の悲鳴が上がります。
リューイは急いでサンディの方に駆け出します。
左の首付近から血飛沫がゆっくりと舞い上がっていますが、突進の勢いは変わりません。
猪の前に出ると、鎌改を刃を逆さにして構えます。そして駆け出して猪の頭に振り下ろします。
ボキッというような手ごたえとともに猪の頭は地面に落ち、牙が地面に突き刺さりました。
突進したエネルギーが全て猪の首に集まり、猪の体は首を支点に回転します。ゆっくりと回転しながらやがて背中から地面に落ちていきました。
（加速装置、解除！）
リューイの周りの音が復活します。
「お姉ちゃーん！」ライムが駆け寄ります。
「急に居なくなったと思ったら、いきなりドサッと猪がひっくり返るんだもん、ビックリしたよ。」
「あなた・・・何をしたの？ジックリ聞かせて貰うからね。でも、その前に！」
「分かってるよ・・！ライト！それにフライ！」
ライムの魔法により巨大猪は首を下に近くの木に縛り付けられます。最後に出刃包丁をリュックから出して猪の腹を上下に切り裂いて内臓を出します。
内臓は、前もってリューイが掘った穴にボタボタと落ちていきます。
「お姉ちゃん、ちゃんと埋めるんだよ。血の匂いで別のが来ると困るから・・」
血抜きは1時間程度かかるとの事です。

「さて、話して貰いましょうか。あなたの不思議な魔法のことを・・」

リューイは、ここと違う世界から来たこと、魔法ではないが魔法みたいな科学の応用した不思議な能力のことを。

最初はそんなバカなと思っていた2人でしたが、無詠唱で電撃を飛ばしたり、加速装置により2人の前から一瞬で消えたりするのを見て信じないわけにはいきません。

「それじゃぁ、お姉ちゃんは町みたいな大きなとこでも一瞬に破壊できるの？」

「出来るよ。でもやらないよ。」

「それにしても・・・隕石落とし・・・恐ろしい技ね。」

技能としてリューイの能力を認識したみたいです。魔法だって、結構恐ろしいと思いますけどね。

そんな話をしている内に、猪の血抜きが終わったようです。

ヨイショ！とリューイが担ぎます。

森を抜け、段々畑の小道を歩き村に入ります。

3人の姿を見て、門番がビックリしてます。だって、3人目の若者風女の子がデッカイ猪を担いでいるんですからね。

「こっちよ！」

村の十字路でサンディが真直ぐに進み、リュウーイを呼びます。

「ここが猟師さんの家だよ」

先に入ったサンディが猟師と交渉しているようです。

「リューイ、入ってきて！」

ドアが小さいので、猪を肩から降ろして引きずりながら中に入ります。

家の中では猟師のおじさんがそれを見てあごを落とします。

「おいおい・・いったいどうしたらこんなのをお前らが仕留められるんだ！俺ら猟師でさえ罠でも張らにゃあ仕留められねえぞ！！」

「あの娘がバカ力で、猪の首を折ったのよ。一瞬だったわ。」
「何ッ！あのにいちゃんは娘っ子？」
おじさんの驚きはさらに増したようです。
「ところで私達は猟師じゃないから、分担が分からないんでここに来たんだけど・・・」
「あぁ・・そうだったな。分担割合は半分だ。猟師の取り分が２割、配分が３割、残り５割が仕留めたものの取り分だ。・・しかし、これだけの獲物だと、５割をお前ら食いきれめえ。ハム５本と猟師株２０枚でどうだ。当然この毛皮はなめして後で持っていくが。」
「毎週お肉食べられるね。」
そんなライムを微笑みながら見ていたリューイは、あらかじめ取引をサンディに一任してます。
「それでいいわ。」
「よし、取引成立だ。今、株を発行するからな。来期の株だ安心しな。」
さらさらと書類が書かれていきます。
書類とハムを受取り、猟師さんとの交渉は終了です。
帰り際に大物を狩る時は手伝ってくれってリューイは頼まれてましたけど・・

次にギルドに向います。
依頼完了手続きをし、買取窓口で草蛇の牙を換金して本日は終了です。

夜になり、リューイのベッドにライムが侵入します。
「ねぇ、お姉ちゃん。泉でのお話、ライム良くわかんない。」
今夜はそれにしようとリューイはお話を始めます。
「昔、昔。あるところに、正直なキコリが住んでました・・・・」

洗濯と次の依頼

（姫さん～。おーぃ姫さん！）

（呼んだかな？）

（・・レギオン・・とんでもなかったぞ！・・まあ、威力はあったけど・・）

（それよ、それ！船中大騒ぎよ！海兵隊の連中ったら【旨く行ったゼィ！！イェィ！！】ってどんちゃん騒ぎの最中なの。次はどんな衣装でやるか懸賞金を出してるみたいだし・・それを横目で見ていた連中も次は俺達だって一緒になって騒いでるのよ。）

（おかげで兵の士気は鰻登りだけど・・・将軍は胃潰瘍で寝てるわ。）

（・・・大変なんだ。偉い人って意外と大変なんだね。）

（まぁ、それは置いといて、広域殲滅用が提案されたわ。【我命じる星の屑】：直径５０ｍに、船からパルスレーザー砲の一撃が届くの。近接防衛隊の連中が考えたみたいなんだけど、意外と使えるかもよ。）

（気が向いたらね。）

（それと、加速装置の練習も大変だろうから、ターボ１，２，３の３段階に加速を設定しといたわ。１で１０倍速、２で５０倍速、３で１００倍速ね。）

（ありがと。正直あれが無いと猪に殺されてたかも。）

（じゃぁ、今日も頑張ってね！）

何時もの朝が来てリューイはごそごそと起き上がります。

（今日一日が平穏でありますように・・・）珍しく祈ったりしてます。

でも、そういうのって必ず裏切られるんですよね。

朝食を終えた時にそれは起こりました。
「おねえちゃん。洗濯物出して！今日は赤い靴の定休日でライムお洗濯するんだから！」
リューイはドキ！っとしました。
この世界に放り投げられてから、一度も着替えたこともなく、一度もお風呂に入ったこともありません。トイレは・・必要有りませんでした。
「ライム・・俺・・着替えもってない。」
「「えぇ！！今までずーーっと着たきりだったの？？」」
２人は驚いてます。口に手を当ててビックリしてます。
「出かけるわよ！！」
サンディがリューイのてを掴むと、有無を言わせずに表に出ます。
「ライムも行きたかったな。」
拉致られていくリューイを、残念そうにライムは見ていましたが・・諦めたのか後片付けを始めました。

家を出てターボ全開爆走モードでサンディが走ります。右手で掴んだリューイの足が地面に着いていないかのようです。
それでも、道行く人に（おはよう）って挨拶してますけど・・・挨拶された方は、（だれだっけ？）って立ち止まって振り返ります。

細工師の右隣が村の雑貨屋です。
雑貨と言うだけあって、薬、食料、衣料何でもありです。
お店の前で急ブレーキを掛けずに、９０度のドリフトターンをしてドアを打ち破るように雑貨屋に入ります。
お店のカウンターで急停止、リューイが０．２秒遅れて着地したみたいです。
若い女性が店員です。背中に服の上から汗をかいてます。
「この娘の服を中と外、下と上合わせて２セット頂戴！」
サンディが店員を睨見つけるように言いました。

「・・・あのう・・サイズは？」
サンディがリューイをジロ！と見ると、フルフルと首を振ってます。
「じゃぁ、サイズを計りますね。こちらへ、どうぞ！」
店員さんがリューイにオイデオイデをします。
しぶしぶ店員さんの後について奥の部屋に向います。
（さぁ・・脱いで脱いで！）
（両腕を開いて、次は上ね。）
（ふ～ん。・・・あら？・・・ほほぉー・・）
奥からは店員さんの言葉と、リューイのジタバタしている音が響きます。
しばらくすると、げっそりやつれたリューイとヤッタゼ！って感じの店員さんが出てきました。

「エェッ！！もう一度言って頂戴！」
「はい。こちらの娘さんのサイズはありません！」
「でも、ここは村一番の品揃えだよ？私のもライムのもサイズあるのに？」
「よく聞いてくださいね。娘さんのサイズはありません。男の子用のサイズは沢山ありますよ！」
「男物？」
「はい。沢山ありますよ！」
（う～ん・・・確かにリューイを初めて見た人は男だと勘違いしてるようだし・・・胸はライム＋αだし・・・背は高いし、強いし、この際どうでもいいか。要するに洗濯してる間の着替えだし・・」
「男物、適当に上下と中と外。２セット頂戴！」
店員さんはテキパキと下着と上着を袋詰めにすると、リューイに手渡します。
「ありがとうございました！」
両手で大きな袋を抱えとぼとぼとリューイは歩きます。

料金はサンディが払いましたが、いくら？とはちょっと聞きづらい状態です。
前を歩くリューイの足元を何気なく見たサンディは、あることに気が付きました。
「先にもどって、私寄るところあるから！」
サンディは来た道を戻って行きます。

「お帰り！どうだった？」
ライムが抱きつきながらリューイに聞いてます。
「さぁ、着替えて！お洗濯するんだから」
渋々部屋に戻ると、着ている物を脱いでます。
・・・これ、どうやって取るんだ！なんて言ってますけど・・・
目を閉じて服を無事脱ぎ終えました。
サンディに買って貰った服を袋から取り出します。
男物です。袖のないシャツとパンツ・・・・懐かしさに涙が滲みます。
上着は黒のワイシャツ風のシャツと、黒のストレートパンツです。
ちょっと学生風ですね。
下着とGシャツ、Gパンを一纏めにすると、部屋を出ます。
ドアの外で待っていたライムにおずおずと洗濯物を手渡しました。
「わぁ！・・ラスカル様みたい！」
トテトテと自分の部屋に戻ると何かを持って帰ってきました。
「ね！似てるでしょ。」
ライムの持ってきたパンフレットには、リューイにた格好でシャツを少しひらひらさせた男役の絵姿がありました。
「王国で一番人気の歌劇団の人よ・・・ライムの憧れなの。」
はぁ～という返事しかリューイには出来ませんでした。

バタンとドアが開きます。
「リューイ・・・着替えたのね！・・・さぁ、出かけるわよ！」

突然の宣言です。
え？と返事をする間も無くサンディに腕をとられ連行されていきます。
「あ～ぁ・・・今度こそ一緒に出かけたかったのにー！」
ライムは残念そうに、洗濯物を抱えて台所に向います。

今度はゆっくりと歩きます。
リューイの腕を自分の腕に絡ませ、少しリューイにもたれかかって・・・
そうです！恋人気分の状態でゆっくりと歩きます。
そしてギルドに到着です。

「ちょっとね、買い物し過ぎて金欠状態なの。割のいい仕事を急いで探すわよ。」
サンディが小声で言います。
依頼用の掲示板を2人でひたすら探しますが、なかなか良いのがないようです。

「御2人さん。ギルドでデートは関心しないな？」
振り向くと、妙齢の美人・・それでいてスタイルはサンディに負けず劣らず・・・
皮の鎧を着こなし、両手剣（ロングソード）を持った冒険者がこちらを見てました。
ロングの髪から尖った耳が少し覗いてます。
「エルフ？」
「ほう、珍しいか？いくら山村でもエルフくらいはいるだろうに。」
「リューイは、もっと田舎から来たのよ。それに私達はデートじゃなく、仕事を見つけてるの！」
「そっちの男に、肩をあずけていては誰でもそう思うだろうに・・・で、見つかったのか？」

サンディは首をふります。
「そうか・・・こんな話をするのも何かの縁だ。私とこれを受けないか？」
そう言うと右手の依頼書をサンディに手渡します。

依頼：水の精霊に祝福された聖水の入手
場所：精霊は悲恋の洞窟に住む
条件：魔物数が多く１人での依頼は受け付けない
報酬：銀貨２０枚

「やるわ！」
サンディは即答しました。
「ちょっと待った！魔物多いんだよ。やられちゃうよ。」
「男が心配性とは・・・情けない。」
「この娘は、女の子よ！」
サンディがリューイの肩をガシ！っとつかんでエルフの前に突き出します。
エルフはじっとリューイの全身を見ます。
上から下へ・・・もう一度、上から胸で止まりました。
「確かに・・・でも、エルフより・・・」
いってはいけない事を理解しているようです。
「ところで、私は、ルミナと言う。シルバーの星１つだ。そちらは？」
「私は、サンディ、こいつはリューイ、後、ここにはいないけどライムでパーティを組んでるの。黒の星３つ、２つ、１つよ。」
ここでは、詳しい話が出来ないとサンディの家に移動することにしました。

悲恋の洞窟　（1）

「小さいのに、感心だな。」
ルミナはライムの入れたお茶を美味しそうに飲んでます。
「ところで、今回の依頼は難しいの？」
ここは、きちんと確認しておく必要があります。危険ならばライムを置いて行くのも選択肢です。
「いや、それほどでもない。・・オークが多いのが玉に瑕だが・・」
オーク・・・結構な相手です。あまり見かけない魔物ですけど、初心者殺しの異名をもってたりします。
「それならば、赤い靴からは、私とリューイってことで・・」
「お姉ちゃん！！・・・ライムも仲間だよ。それにお姉ちゃんって攻撃魔法しか出来ないじゃない！！」
ライムがすかさず抗議します。
「俺も仲間はずれは良くないと思うぞ。いざとなれば、昨日の猪みたいに・・・」
「まて！・・・昨日の猪とは、あの猟師宅の前で解体していた巨大猪のことか？」
「そうだよ。リューイお姉ちゃんが一瞬で刈り取ったんだから！」
ライムは自慢そうに言ってます。
「そうか・・・なら、ライムとやらを連れて行っても問題ないと思うぞ。それに補助魔法は洞窟探査には欠かせないからな。」
ライムとリューイは嬉しそうに、ヤッター！なんていいながらハイタッチなんかしてますけど、サンディの胸中はあまり良くありません。
でも、ライム一人を残していくのも気がかりです。
「ウ～ン・・・リューイがいるなら・・・ライム！ＯＫよ！！」
サンディは渋々ながらも同行を許可します。

「・・・ところで、リューイ、私と試合をしないか？お前が倒したという猪は・・・私では無理だ・・その実力を見てみたい。」
「試合・・・でも、防具も木刀もないぞ！・・・それに俺の武器は剣じゃないし・・・」
ルミナはリューイを微笑ながら見ています。
「もちろん、真剣でかまわない。」
だけど・・・何ていっているリューイをサンディは立ち上がらせます。
けちょんけちょんにしちゃいなさい、なんて言ってますけど・・今一つ、リューイは気乗りしてないみたいです。
「こっちよ。裏庭なら誰にも見えないからね。」
ライムが台所の裏ドアを開けて2人を案内します。

裏庭は、家1軒分くらいの広さです。
庭の真ん中にルミナとリューイが歩いていきます。
「さて、では・・・始めるぞ！」
そう言うとルミナ後ろ跳びして距離とり、同じようにリューイも後ろに下がります。
ルミナが長剣を身をねじるようにして右手で抜くと、リューイは左手でケースを外し鎌改を取出します。そして、右手で腰から鉈改（鉈改造版）を引抜き、逆手に持ちます。
（逃げちゃダメだ！・・逃げちゃダメだ！・・でも、相手は刃の長さだけでも、1．2mはあるけど・・俺の鎌の刃長は30cm程度だし・・鉈だって40cm程度しかないぞ。足しても相手の半分ぐらいじゃないか！！）
ルミナが大上段に構えます。リューイは映画で見たカンフーの応用です。左手を前下げ、右手を後ろに上げて、足を前後に爪先立ち・・・
（変わった武器と構えだが・・スキだらけだ。・・・さそってみるか？）

ルミナの構えが八双に変化し、半歩踏み出します。リューイは半歩下がりながら軸足を中心に体の向きを入れ替えます。そして左右の腕を上下逆の構えに変えます。

（半歩で構えを入れ替えるのか・・スキではなく自然体？？・・・バカナな！打ち込めば全てが分かる！！）

ルミナが３歩素早く前進し八双の構えから、リューイに向い斜めに振り下ろします。

（ターボ１作動！）

リューイが半歩下がりながら体を回転させて長剣の軌道から身を逸らします。

長剣の軌道からリューイが逸れたことを見て、さらに一歩リューイの近づいて、今度は長剣を振上げます。

リューイは左手の鎌の刃で長剣を受けると衝撃に屈することなく鎌を振上げます。そのままルミナに近づき鉈を首筋に突き付けます。

（ターボ解除）

「これで、いいか？」

「十分だ！」

２人は武器を納めます。

「ところで、あのような戦い方は見たことがない。どこで覚えた？師はまだ存命か？」

４人でまったりとお茶をのんでいると、ルミナが突然きりだしました。

「自己流・・・師はいない。ただ、全ての動くは円を描く事を基本としている。」

「そうか・・・円の動き・・・確かに、始めもなく終わりもない、それに比べ私の動きは直線だ・・負けるわけだな。」

ルミナは自己嫌悪に陥っているみたいです。

こういう時は話題を変えるのがベストですよね。

「話をず～～っと前に戻すけど・・・洞窟って言ったよね。どこ

へいくの？」
そうでした。今度は洞窟探検なのです。
「オークが居るって事は、結構深いと思うんだけど・・」
「悲恋の洞窟よ。」
「それって、人間に恋した水の妖精が住むっていうあの洞窟？」
洞窟の名前からして、何かいわく付きの洞窟みたいです。
「歩いて半日、中も広くて、妖精の泉は一番奥にあるって細工師のおじいさんに聞いたことあるよ。」
「そうだ。そして、そこには沢山のオークがいる。」
「ライム、準備しなくちゃ！！」
ライムはそう言うと自分の部屋に帰っていきます。
残り3人で臨時パーティの役割分担を確認します。
洞窟内を歩く時は、ルミナが前、その後をサンディとライムが歩き、最後尾をリューイ。
戦う時はなるべく壁を背にし、前衛をルミナとリューイ、後衛をサンディとライム。
洞窟内で手に入れた宝や硬貨等はクエスト終了後に分け合う。均等配分が基本。
食料、水等は赤い靴が確保。薬草、毒消し等の医薬品はルミナが確保。
初めての洞窟クエストです。ルミナという先輩冒険者からいろいろとアドバイスを受けることにしました。

悲恋の洞窟　（2）

3人は朝早く家を出ます。
今日は、洞窟の調査なんですけど、3人の格好はトレッタ草原のクエストと同じです。
ライムが大きなリュックを背負ってますから、まぁ、必要なものは全部有るんでしょうけど・・・
ルミナとの待ち合わせ場所はギルドのホールです。
先を歩く2人の足元に気付いたのは、十字路を過ぎたあたりでした。
（あれ？2人とも靴が新しくなってる！）
昨日まではパンプス風の靴でしたが、今日は、薄い赤に染められた、皮の半ブーツです。
（そういえば、俺たちのパーティは（赤い靴）だったよな。でも、俺のは・・・！！）
俺は白いスニーカーだ！と下を見ると靴が何時の間にか薄いピンクです。桜色っていうやつです。
（サービスで色を変えてみました。）
（・・・ありがと・・）
姫が色を変えたみたいです。
（ダンジョンへ行くんでしょ？空からサポート出来ないから、残念がってたよ。）
（ありがとう・・と言っておくけど、あまり遊ばないでね。）
ギルドのドアを開けると、テーブルで1人待っているルミナが居ます。
「おはよ！・・こっちの準備はできたわ。」
「よし！それじゃぁ出かけよう。」
ルミナが席を立ちます。傍らの長剣を背負うと、もう片方の肩に

皮袋を背負います。

村を出て段々畑を下に下りていきます。

畑を越えて、橋を渡ってトレッタみたいな草原に出た所で道が分かれていました。

「左の道を行けば町に行けるわ。今回の洞窟は右の道を進んだ森の中にあるの。」

サンディの言葉に従ってリューイは右に向かいます。

草原が潅木に変わり、立ち木が密集し始めます。森に入ったのです。

森の小道（・・あまり人が通らないのでしょう、獣道みたくなってます）をしばらく歩くと突然、前方が開けました。

石組が崩れて苔むした廃墟がそこにありました。

アランがへぇ～って感心してますと、ルミナが先行します。

「こっちだ！」

石組みを右に、左に、まるで迷路です。

3人は慌てて後を追います。

「あれだ！」

ルミナが指差す先には、大きな壁のよう石組みの中にぽっかりと開いた洞窟の入口がありました。

「ねぇ、お昼のしようよ！」

これから、どんな冒険になるのか想像できませんが、（オークがいっぱい）ってことを考えると、ここでちょっと一休みは大切なことかも知れません。

日持ちするビスケットを食べ、水筒のお茶を飲んで休憩です。

「ところで、悲恋の洞窟ってどんな感じなんだ？」

「ほぼ、一本道だ。横道もあるが直ぐに小部屋になる。」

「宝物も、あるの？」

ライムが話に加わります。

「小部屋にオークが貯めこむことがある。誰かが取っても、直ぐにオークが補充するようだ。」
「だったら、オークを倒すのは不味くない？」
「無理に倒すことはない。しかし、水の精霊に合うには倒すしかないかもしれん。」
「祝福された聖水っって、聞いたことないけど・・」
「あまり一般的ではないからな。しかし、特殊な儀式には絶対に必要な物だそうだ。」
「さて、十分休んだことだし・・行くぞ！！」
４人は腰を上げます。
洞窟の入口は２人並んで入れるくらいの大きさでしたが、少し入ると急に広く、高くなっていました。
洞窟内は真っ暗ではなくところどころに小さな松明が焚かれています。
やはりなにかいるみたいです。しかも知能を持っているものが・・・
「我望む・・・ライトーン！」
ライムが魔法の明かりで周囲を照らしました。ライムの頭の上３m程度の所を、人の頭程の光の玉がぷかぷか浮いています。
ほぉ～っとリューイが周囲を見渡します。
魔法の明かりで洞窟内の水晶が輝き天井はまるで星空です。
「ライム、様様だな。松明ではこうはいかん。」
ルミナはライムの頭をイイコイイコしてます。
ルミナ、サンディ、ライム、リューイの順に並んで進みます。
リューイは最後尾ですが、念のために生体感知レーダーを作動させ、鎌改を左手に持ち臨戦態勢です。
（ピキーン！）とリューイのレーダーが警報を発します。
「前方、右側に何かがいる。数は・・・まとまってる。」
ルミナはポケットから布切れを取出し確認します。

「警備室か・・・そんな数にはならないはずだ。入ってみるか？」
サンディが頷きます。
少し歩くと右側に行く枝道がありました。
「どうだ、気配がするか？」
「バッチリだ。４体いる。」
「よし、ドアを蹴破って、爆裂魔法を叩き込む、そして私が左、リューイが右だ。」
３人が頷きます。
物音を立てないようにそろそろと４人が進みます。
ドアの前に来ました。
リューイがドアを前にサンディの魔法のタイミングを計ります。
すると、ライムがチョコチョコとリューイのところにやって来ました。
ドアを少し開けて鍵がかかっていないことを確認してます。
（ライム。なにするの？）ってリューイは見てます。
ライムはリュックをごそごそ始めると、小さな玉を取出しました。
玉にはわっかの付いた紐が出てます。
玉を握り、わっかをもう片方の手で握るとリューイとルミナの顔を見て頷きます。
２人が頷き返すのを見ると、ドアをちょっと開けました。
玉のわっかを勢い良く引っ張るとドアの隙間から中に投げ込みます。
そして、ドアを閉めました・・・。
（ドォム！！）
低い音が響くとドアの隙間から鋭い光が漏れ出ます。

悲恋の洞窟　（3）

シュウー・・っと薄い煙が漏れ出ているドアをリューイが蹴飛ばします。
バタンとドアが吹き飛び中には、ふらふらしながら立ち上がろうとしているオークがいました。
「右だ！」
ルミナがそう言うと部屋に飛び込み、背中の長剣を振り抜きながら手前のオークを斜めに両断します。
リューイも、遅れてなるか！と鎌改の刃裏でオークを殴りつけます。殴られたオークは勢いあまって壁に叩きつけられます。
残り2体も武器を取る暇を与えずにそれぞれ葬りました。
「もう大丈夫だ！」
リューイは外にいるサンディ達に声を掛けると、2人は素早く中に入ります。
外で2人きりはちょっと心細かったりしたみたいですね。
「あらら・・派手にやったのねぇ。」
へやの中のスプラッタな状態を見てサンディが言います。
「ライムが一番過激じゃないかと・・・」
「でも、いい判断だ。広場ではこうはいかないが、狭い部屋だと効果的だ。」
そんな会話を我関せずな姿勢で、ライムは獲物を漁ってます。

「何かあった？」
「何もないよ。銅貨だけ・・・」
「何時も有るとは限らないさ。」
ちょっとがっかりしているライムをルミナが慰めたりしてます。
「何もないなら、さぁ、先を急ぐぞ！」
しばらく休んで先に進みます。

トコトコと洞窟を進みます。
相変わらず天井は高く、道は曲がりくねってはいますが、道はきちんとした石畳です。
月明かりの夜の街道を歩いているような錯覚さえ覚えます。
道が大きな岩を迂回したときです。
「まて、ここからは様子が変わる。十分注意するように！」
ルミナが一旦歩みを止めてみんなに注意します。
たしかに、風景が変化します。

「これって・・・」
「神殿・・・」
「だよね・・」
「そうだ。かつて栄えた王国の神殿跡と言ったほうが正しいけどな。」
「だから、途中に門番みたいな部屋があったのか。」
「・・今は、殆どここに詣でるものもいない・・」

神殿は洞窟内の岩壁をくり抜いて作られているようです。
かなり遠くにあるのですが、ライムの作った（ライトーン）の明かりで神々しい姿を浮かべています。
神殿までの道は一直線で等間隔に列柱が並んでいます。
かつては、列柱の上に据えられていたであろう石像の破片が辺り一面に散らばっています。

「ねえ。なんでこの洞窟を（悲恋の洞窟）って言うの？」
そうだよね。ってリューイも頷きます。
「今では知る人もいないか・・・そうだな、いわれを話してやろうか？」
「うん！」

道の両側にある列柱の台座に腰を掛けると、ルミナのお話が始まります。

昔、まだそれぞれの部族が独立して暮らしていた頃のことです。
この森も、その頃はトレッタ平原の北にある森と一体となった大森林でした。
そして、森にはエルフの王国があったのです。
ある日、エルフの王様は夢の中でお告げを受けました。
この森の岩山の中に大きな洞窟があり、そこには泉の精が住むと・・・
その場に神殿を造り泉の精を大切に守れと・・・
あくる日、王様は王国中に御触れを出し、岩山の洞窟を探しました。
そして、見つけたのです。岩山の洞窟とその奥に湧き出る不思議な泉を・・・
王様は洞窟内の岩肌をくり抜いて、泉を守る神殿を建てました。
洞窟の前にも、大きな神殿を立て皆でお参りできるようにしました。
そして時は過ぎて行きます。
神殿には、代々王族から1人の女性を洞窟内の神殿に巫女として差し出していました。
ある国王の時代に、王族には1人の王女がおりました。
誰もが、王女が巫女になるものと思っていました。
でも、王女には・・・好きな相手がいたのです。
それでも、しきたりを破ることは出来ません。
王女は泣く泣く、結婚を諦め、洞窟内の神殿に向いました。
しかし、相手の男は諦め切れません。
その夜、神殿に忍び込み、洞窟内の神殿に向ったのです。
神殿で、残してきた相手の幸せを泉の精に一人祈っていた王女は、じぶんを呼ぶ声を聞きました。

あの人が向えに来てくれたのです。
王国も、しきたりも、2人には関係ありません。
2人で遠くに、誰も知らないような土地へ逃げようと神殿の列柱の道を走りました。
しかし・・・見つかってしまったのです。
警備兵は不審な2人に矢を射ちました。何人も、何回も・・・
そして、ついに矢は当たったのです。
王女の胸を貫いたのです。
男は自分さえここに来なければ。と嘆き悲しみ、その場で王女を優しく抱いたのです・・・
そして、王女を貫いた矢は、男の胸に深く差し込まれたのです。
国王は、いたく悲しみ、せめて来世では一緒になれよ。と2人の遺体を矢を抜くこともせず、1つの棺に収めました。
その時、奇跡が起きたのです。
棺の蓋を閉める正にその時、棺から光が満ち溢れ、清浄な水が溢れ出しました。
そして、あふれ出た水の流れは、2人の棺を泉の奥底に運んだのです。
奇跡は続きます。神殿に湧く泉の水は不思議な働きをするようになったのです。
それは、死んでいない限りどんな病気も怪我も一瞬で全快するというものでした。
何時しかこの神殿の水を（祝福された聖水）と呼ぶようになったのです。

「と、まぁこんな感じだな。」
「ふ～ん。」
「悲恋なのね・・・・悲恋の洞窟って・・これ？」
「よくあるような、ないような・・・」
反応はいろいろでした。

悲恋の洞窟　（4）

そうなんだ、悲恋なんだってリューイは自分に言い聞かせてます。だって、悲恋でしょ！ってサンディにポカリと実力を伴った言い聞かせを受けましたから。

一人だけ、トボトボと列柱を進んでいきます。

何時の間にか、道の周りは池のようになっています。水の上に浮かんだ一本道を進んでいきます。

ライムがなにかいるかな？って覗いてます。

何もいないようですが、かなり深いようです。

（ピキーン！）

警戒反応です！目の前に半透明の索的用画面が自動的に展開します。

（赤だ・・でもまだ遠いな・・）

「判るか？神殿の入口を見てみろ・・2，3匹こっちを伺ってるが、奥にはうじゃうじゃいるぞ。」

「何とか、一網打尽にしたいとこだが・・・」

「私の魔法は単体用よ。」

「私だって、矢は一本づつだよ。」

無理は言わないでってサンディ達が訴えてます。

（協力したら全体攻撃が出来るかも！）

（え！どうやって・・・うん、うん・・なるほどね。）

どうやら、アドバイスを受けたようです。

「あの・・提案があるんだが・・」

皆にジロリ！って睨まれました。

「いや・・ひょっとしたら、全体攻撃出来そうなんだけど、協力してくれない。」

「リューイって、全体攻撃できるの？また、（レギオン）使うの？」

「いや、あれは、もっと広いとこじゃないと無理なんだ。俺の単体用攻撃方法なんだけど・・皆で協力すれば全体魔法と同じように使える方法を見つけたんだ。」
３人は、単体で全体？どうするの？って顔で見てます。
「ライムはさっきの爆弾みたいなやつ、まだ持ってる？」
「洞窟って聞いたから・・・後、１０個位ある。」
「じゃあ、説明する。好く聞いてくれ。」
４人は頭を寄せ合って、カクカクしかじか、フムフム！って相談してます。

「じゃあ、判ったかな。タイミングが大事だ。」
神殿に少しづつ近づきます。
リューイのレーダーには赤い点がどんどん増えていきますが、神殿の円柱の影から伺っているオークは２，３匹です。
「作戦開始！」
サンディが（火炎弾）を神殿に向って打ち込みます。
ドカンっと音がして、神殿の入口付近に火炎が開きます。
ワァー！！と神殿からオークが一斉に飛び出し、こちらに向ってきます。
「次！」
リューイ達は逃げ出します。そして、ライムから貰った小さな玉を道の両側の水面に投げ込みます。
ドムゥ！っと光と音がして、大きな水柱が道の両側に立ちました。
水しぶきが道に滝のように落ちてきます。
その中を何事もないようにオークが向ってきました。
「いまだ。（ボルト！！）」
リューイの動力炉から大電流がバリバリと先頭のオークに走ります。
すると・・・後ろのオークに次々と電撃が伝染していきます。
感電したオークは体から煙路を出しながら痙攣しています。

リューイは濡れた床に両手を付いてしばらくバリバリと電流を流していましたが、オークがシュン！と消え始めたことを見て、やっと立ち上がります。
「うまくいったかな？」
「すごい！」
「こんな使い方もあるのね。」
「むちゃくちゃだ！！」
反応は色々ですが、とりあえず入口までの道は確保したみたいです。
オークの残した銅貨を回収しながら神殿の入口に辿りつきました。

神殿の入口の両側に小さな水路が掘られています。
神殿の奥から綺麗な水が流れてきます。この水が先ほどの道の両側にある池を作ったみたいですね。
神殿の中も両側に列柱が続きます。
外の道と違って、柱の間に石像が安置されています。
どんどんとおくに入りますと十字路になっていました。水路には橋が架かっています。
「どうする？」
ルミナが確認します。
「行って見ましょう。先ずは右側からね。」
道を右に折れて、石橋を渡ると扉があります。警備室はドアでしたが、やはり神殿の中は違います。
リューイは扉のノブを回して少し開きます。鍵は掛かっていないようです。
ライムを見て頷きます。
チョコチョコっとライムは例の玉を持ってやってきました。
リューイとライムが見詰め合うことしばし・・ライムは頷くと玉の紐を引きます。
リューイが扉をそっと開くと、ライムは玉を投げ込みます。

ドムゥ！！鈍い音がして、とびらの隙間から閃光が溢れます。
リューイとルミナが扉を蹴破って飛び込みました。
「・・・誰もいない！」
「しかし、見ろ！ここは食堂らしいな。」
ルミナが剣で示した先には、血にまみれた肉の塊・・そして、鎖につながれた足の切れ端・・・
サンディが慌ててライムの目を手で覆います。
「オークは肉食で、人を食べるって聞いてたけど・・・」
「そうだ。やつらは何でも食べる。人を襲えばこの通り、そして持っていたものを大事に蓄える。」
ほら！って箱をサンディに渡します。
なに？って箱を開けると・・・安ものの指輪や首飾り等が入っています。
「持って行きな・・悪いものじゃない。」
サンディはそっと箱を籠に入れました。
「さて、次は反対側だ！」
部屋の惨劇を見てちょっと足取りが重くなりましたが、反対側の先にある扉を同じ用にして開きます。
部屋の中はさっきと同じで誰もいません。
いや・・いました。かつて人だったものが・・・壁の鎖に両手を縛られ両足を切り取られた遺体が・・
宝物もありません。
がっかりしましたが、あまり時間を無駄にしたくありません。
気を取り直して、４人は神殿の奥に向うことにしました。

泉の精

４人は、神殿の奥に進んでいきます。
通路の両脇に並んでいた列柱が無くなり、水路の幅が広くなりました。まるで、浅い川が流れているようです。
前方に数段の石段に縁取られた泉が見えます。
泉の傍には４体の石像
泉に向って微笑みながら手を差し伸べています。
清浄な、水晶のように透明な水が石段を濡らしながら水路に流れています。

「この石像・・ルミナに似てるね。」
「エルフ像だからな。ほら、耳の形が同じだろう。」
ルミナは近くの石像を指差してライムに説明してます。
「ここで、終わりだよね・・・依頼はどうなるの？」
「ここで、いいんだ。」
ルミナは泉の前に跪きます。
光球に照らし出された泉の風景とルミナの姿が合わさると神々しさが漂います。
３人は思わず、何時しかルミナの後ろに下がっていました。

「・・エル・ミハイラフ・サヌ・マアライカナ・・我は救いを求めに参りました・・」
ルミナの不思議な詠唱が始まります。
「・・サヌア・マヌエト・ミク・リモカナ。我に姿を御見せ給わんことを・・」

何が始まるの！って感じで３人は見てますが、言葉を出すことはありません。

突然！・・泉の奥で何かが光りました。
泉の水はぐんぐんと溢れ出してきます。
バシャーン！！と泉の水がはじけ飛びます。

３人が思わず目を閉じます。再び、目を開いたその先には・・・
神々しい光を光を放ちながら泉に浮かぶ少女の姿がありました。
泉の精です！
絶対にそうです。だって少女の体は泉の水と一体になった水で出来てますから。

「我を呼んだのは・・其方か？」
「はい。・・聖水を賜りたく。」
「フム・・・昔日のエルフ王国は潰え、この神殿はオークの根城と化した。その、オークどもを粗方滅ぼしここまでここまで来たからには・・与えるに吝かではない。」
「しかし、それには代償を必要とする。瀕死の重症を負っても飲めば必ず全快する力を持つ聖水に、そなたはは何を捧げるのじゃ。」

ルミナは黙ってしまいました。そんなことは聞いてないぞ！って顔に書いてあります。
「あのう・・・ちょっといいですか？」
リューイが間に入ります。
「ホォ～、面白い者が同行しておるな。何じゃ？」
（リューイ、彼女私達のこと知ってるみたい、気をつけてね。）
姫がこっそり耳打ちしてます。
「代償って、どんなものですか？」
「別に、命をよこせ。というようなものではない。・・珍しいもの。宝と呼ばれるものじゃ。」
「宝は持っていません。ここまでの道でもオークの宝はありふれたものです。」

「そのようなものは、我も欲しくはない・・・そうじゃ、其の方の腰にあるもので良いぞ！」
泉の精はリューイの鎌改を指差します。
まぁ、確かに珍しいものです。形は何ですが・・材質はドワーフのおじいさんも判別不可能！冶金工学の賜物ですからねぇ。
「ルミナ。聖水は必要なんだな？」
「あぁ、それが無いと・・・私は部落に戻れん！」
リューイは腰に差した鎌改を取出します。
泉の精の許にゆっくりと歩いていき、鎌改を渡しました。
「ふ～む、やはりか・・」
泉の精はジッと鎌改を眺めています。

（私に好く似た、形を持たぬ者達よ。貴方はどこから来ましたか。この世界で何をするのですか？）
リューイの頭に、姫以外の思念が飛び込んできました。
（この世界の外から、そして何かをするために！）
（私の願いを成就させるためよ！）
姫も思念の会話に加わります。
（・・その願いはこの世界に害となりますか？）
（害・・・善と悪はある意味で等価値だから・・・定義立てるには・・・）
（害にはならない。少なくとも俺はそう思う。）
（それが貴方の目的に向う姿勢ならば・・目的は詮索しません。・・困っている者を最後まで見捨てないで下さいね。）

「良かろう・・娘よ。これが、求めるもの、祝福された聖水じゃ。」
泉の精の手には何時の間にか小さな小瓶があります。
ルミナの前に進むと、その手に小瓶を渡しました。ガラスの小瓶の中には透明な光を放つ水が入っています。

「・・・我はこの泉を去る。ここにはオーク達の住処になっておるからな。」
エッ！って感じで４人は泉の精を見ます。
「そんなに驚くこともあるまいに・・ところで、人間の娘よ。お前達は悲恋の洞窟を知っておったか？」
２人はふるふると首を振ります。
「悲恋の洞窟はエルフの昔話・・・しかも知る者も少ない伝説じゃ。ここは無くとも構わぬ。」
「でも、それでは・・・」
「聖水が手に入らぬか・・心配せずとも、日の当たる神殿の神官に頼めば聖水は手に入るだろうに・・それに、人の生死を左右する物は本来あってはならぬ物。これが最後と知れ。」
「でも、それじゃぁ、死にそうな人を助けられないよ。」
「生死は人の定め。無理に乱すことはない。・・・今までそのような物があるとは知らなかったであろうに・・」
３人は頷く。
病気や怪我を治療する薬や魔法はあるが、瀕死の者を救うような代物は聞いたことが無い。
「だから、無くとも構わぬのじゃ。帰るがよい。お前達が立ち去った後、この神殿の入口を閉ざし、我も立ち去るとしよう。・・洞窟は、オーク達の住処じゃ。残しておこう・・」

４人は礼を言うと足早に神殿を出ます。
列柱の中ほど迄来ると、神殿の方から大きな音が響いてきます。
振り返ると、天井から巨石がどんどん落ちているのが見えます。
しばらくの間、落石は続きます。やがて神殿はその中に閉じ込められ、見えなくなりました。

道の曲り角にあった巨石まで辿りついた４人はちょっと休憩です。

ライムの美味しいお茶とお菓子を頂きます。
「すまない！これのために、お前の大切な武器と交換してしまって。」
「いいよ。そもそもあれは鎌で武器じゃないし・・これも有るし。」
リューイに頭を下げるルミナに、いいよいいよって手振ると、腰の鉈改を見せてます。
「でも、伝説の武器だったんでしょ。ドワーフのおじいさんもそんな事言ってたし・・」
「いや、あれはたまたまおじいさんが見たことが無かったからだよ。問題なし！」
たしかに、この世界の材質ではありませんが、泉の精が鎌を持って戦う事は想像出来ませんし、したくもありませんから特に問題は無いでしょう。
今頃は、壁に飾ってお茶でも飲んでるのかも知れません。
「実は、この依頼は私が個人的に出したものだ。ギルドは通っていない。」
「しかし、依頼は依頼。ちゃんと報酬は払う。全額、赤い靴の取り分で構わない。」
「厚かましいが、一つお願いがあるのだが・・いいだろうか？」
どんな？って3人は聞きます。
しばらく考えていたルミナがリューイに顔を向けました。
「リューイをしばらく貸して欲しい・・そうだな、一ヶ月位だ・・」
「「「えぇー！！」」」
3人は思わず叫びました。
ようやく依頼が完了したのですから、報酬たんまり、寝て暮らすをしようと思ってたみたいですね。
「理由は、聞かせてくれるよね。」
「あぁ・・この聖水を持ち帰るためだ。そこには私の部落がある。

そして明日をも知れない妹がいる。」
「大切なものをこれと引き換えにしたリューイの顛末をみて貰いたい・・」
「ルミナの部落って遠くなの？」
「山を2つ越えた先にある。・・・エルフの隠れ里だ。あまり、人には知らせたくないがな・・」
「リューイはどうなの？」
構わない。とリューイは答えます。まだ目的が見えてきませんから広く世界を知る必要があります。
「それじゃ、一旦村に帰って明日出発ということでいいわね。」
荷物を纏めると、４人は洞窟の入口を目指し歩き出しました。

猿飛び

悲恋の洞窟から帰った翌日、リューイはサンディの家の前にいます。

「ほら、ハンカチ持った？忘れ物ないの・・・」

サンディが母親のようにリューイの持ち物を確認してますが・・まぁ、問題はないと思います。なんてたって、リューイは改造人間食べるものも飲み物も本来必要ないですからね。

「お姉ちゃん、これあげる。」

ライムがそういって渡してくれたキビダンゴ・・いや、爆光球のほうがありがたいと思ったりしてます。

娘３人？姦しくしていると、ルミナがやってきました。

「準備は出来ているか？だいたい、１０日位山道を行く。人間には結構きついぞ！」

３人は改めてルミナの装備を見てみます。

皮の鎧にかわのブーツ、背中には長剣。そして、肩に担いだ小さな皮袋。

少し露出過剰なところもありますが、３人があこがれる冒険者の正装です。

今度はリューイをサンディとライムが見ます。

Ｇシャツに Ｇパン。腰につけたポーチに鉈のセット。手には身長程の木の棒、先端には金具とワッカが何個か付いてます。これは、鎌改が無くなったので代用品を買ったみたいです。最後に肩に斜めに背負った布袋。

ちょっと、冒険者には見えませんね。どちらかと言うと旅人です。

「山は物騒だぞ、大丈夫か？」

ルミナの念押しです。確かに街道を歩くような格好ですからね。

「問題ない！」

リューイが答えます。

「では、出かけるとしよう・・サンディすまんがちょっと借りるぞ！」
ルミナが歩き出します。リューイはライムに頑張るからね、なんて言ってましたが、急いでルミナを追いかけます。棒の金具がカシャンカシャンと音を立てます。熊避けにはなるかも知れませんね。
「行っちゃった！」
「もう直ぐ、お母さんが帰ってくるわ。それまでにすることがいっぱいあるから・・・ライムも手伝うのよ！」
「うん！」
ルミナ達が村の十字路を曲がり見えなくなると、残念そうに家に入っていきました。

村を出て、段々畑を森に入り、トレッタ草原に向った小道を進みます。
トレッタ草原の分岐路を山の方に向って進むと、段々小道が小さくなり、終いには獣道のようになります。
それすら、何時しかなくなり、２人は深い森の木立を進んでいきました。
２人の行く手を潅木やツタが阻みます。ルミナは長剣を抜いてエイ！、ヤッ！っと、邪魔な枝等を払って進みます。
「フゥ・・疲れるな。お前がエルフなら楽なんだが・・」
なんで？って聞いてみると、エルフは枝渡りが出来るのだそうです。
リスか猿のように枝から枝へと飛ぶことによって平地を歩くように森の中を移動できるのだそうです。
「まぁ、無理なことは仕方が無い。」
ルミナは再び長剣で行く手のツタを払い始めました。
（できるよ！）
（え！どうやって・・・）
（貴方の身体能力は人間の１０倍。ジャンプすれば、垂直で５ｍ

は軽いし、体重も十分の一に減らせるし・・・それに半重力場を体に形成すれば、長時間の飛行は無理でも、枝から枝に飛ぶことは簡単、簡単。）

（具体的には？）

（イメージして実行かな？細かいところは貴方の電脳と私がサポートするから大丈夫！）

「あのさ・・さっき枝渡りって言ってたよね。ちょっと見せて貰えるかな？」

親の敵のような形相で枝を払っていたルミナに恐る恐るリューイが聞きました。

「あぁ・・そうだな。長い旅だ・・ちょっとまて、見せてやる。」

ルミナはそう言うと長剣を背中に戻し、体制を整えます。

ひょい！っとルミナが真上に飛び上がりました。

リューイの真上にある枝に降り立ちます。垂直に５ｍ以上ジャンプしてます。

すると、その枝から１０ｍ程はなれた木の枝に飛び移ります。さらに次の枝に移りました。

リューイは生体レーダーで確認すると、青い点がピョンピョンと移動しているのが解りました。

「じゃぁ、俺も！」

棒を紐で背中に斜めに背負うと準備完了です。

（確か、イメージって言ってたよな・・ようし！）

「猿飛び！」

リューイは垂直にジャンプします。ルミナより高く、そして、他の枝にひょい！っと飛びます。

生体レーダーでルミナの位置を確認すると、その方向へ枝から枝へ飛び移って行きます。

ルミナはしばらくピョン、ピョーンと枝を飛んでいましたが、高

い木の梢を見つけると、ちょっと休憩することにしました。
「さて、戻るとするか・・・少し移動しすぎたな・・」
ルミナが戻ろうとして姿勢を変えたその時です。
ルミナが立つ梢にフワリ！っとリューイが降り立ちました。
ビックリして足を滑らすルミナを慌ててリューイが抱き抱えます。
「・・おま、お前は・・枝渡りができるのか？」
ビックリしたルミナはそう言うのがやっとです。
「枝渡りと似た技だよ。」って誤魔化します。
腕の中でモガモガ動いてるルミナに気が付いて、腕を開放します。
赤みが差した顔でしたが、なにやらほっとした表情です。
「ちょうどいい。ここで一休みしよう！」
そう言ってルミナは梢に腰を下ろします。
リューイも向かい合う形で腰を下ろすと、背中の布袋を開き、水筒の水を飲みました。

（いやー大変だったよ。今静止軌道上にＧＰＳ衛星を１２個ばら撒いたから貴方の位置は常に把握できるからね。位置が特定できないと色んなバックアップできないからね。）
（ＧＰＳって・・・）
（気にしないで、これも、船の連中の精神衛生上のためだから、あなたの手助けをしたいって連中が多すぎるのよ。常に作戦スクリーンに貴方を捕らえていないと安心できないって参謀本部も言って来るし、次はまだか？って色んな部署の輩が来るしね。）
（大変なんだね。）
（とにかくなるべく厄介ごとに巻き込まれてね。）
それは、違うんじゃないかとリューイは思いましたが、幸いにも相手には伝わらなかったようです。

「まぁ、お前が枝渡りが使えることは確かなようだ。これで、これからの移動が楽になる。」

「まだ、先なの？」
「あぁ、森の半分くらいか・・・森を抜け切る所で今日は終わりだ。木の上なら獣や魔物の心配もせずに済むからな。」

じゃぁ、出発するぞ！っとルミナは枝渡りを開始します。
ピョンピョンとたちまちリューイの視界から遠ざかりました。
生体レーダーのスクリーンを前方に展開します。
「猿飛び！」
フュン、フワリ・・リューイもレーダーの青い点を追いかけました。

どこか別の場所で・・
「ほらほら、サボってないで手を動かす。大金払ってんだからちゃんと働いてよね。」
「みんなー、お茶が入ったよー」
大工の棟梁は冷汗をかきながら弟子達の仕事を見てます。
この姉妹の仕事を請け負ったのが運のつき・・普段の倍のスピードで仕事が進んでいきます。

さらにどこか別の場所で・・・
「姫、位置精度をさらに向上させるべく周回軌道上にＧＰＳ衛星を新たに3基設置したいのですが・・」
「許す！」
「姫、新たな技を考案致しました。カプセル封印型怪獣を用いた召還魔法なのですが・・・」
「やめとけ！」

エルフの隠れ里

2人は森の梢を飛んでいきます。
ピョン、ピョン・・フュン、フワリ・・・
流石、エルフは森の民です。優雅に華麗に枝から枝へと移っていきます。
リューイはというと、慣れてはきているんですが・・少しギコチないです。
でも、イメージしたのが（カム〇外伝）の忍術ですからある程度力技になるのは仕方無いのかもしれません。
そんな感じで、2時間ほど森を進むと、ルミナの移動が止まりました。
リューイが急いでルミナの所に行くと、そこは大きな木の上です。
降り立った立ち木の先は、ゴツゴツした岩肌むき出しにした山がそびえています。
へェ～って感じで感心しながらルミナのいる梢にフワリと着地します。

「今日は、ここで野宿する。木の上だ、獣の心配もない。」
そう言って、背中の袋を下ろします。
確かにこのまま行っても中途半端な場所で野宿となりそうです。
早速準備です。
袋からロープを出して、幹に結ぶと梢の方に斜めにロープを張ります。それを2本。
次に、斜めに張ってあるロープと梢を互い違いに編みこみます。
「この編みこんだ間に、2つに折った布を入れて・・・ほら、この中に体を入れて休むんだ。寝相が悪くとも、編んであるから落ちる事はない。」
ルミナは、作業を解説しながら即席のベッドを作りました。

早速、リューイも隣の梢で試してみました。
中に潜り込むと、ちょっと窮屈ですが、安定してます。これなら高い場所から落ちないで済みそうです。
まだ少し明るいですが、２人は早々と眠ることにしました。

チュンチュン・・
朝です。まだ日が昇るには少し早いみたいです。朝靄に森が包まれ手います。
インスタントベッド？を畳み、１つの梢に座って２人仲良く携帯食料を齧ってます。
もう直ぐ出発です。
「岩山も森と変わらん。ただ、不安定な岩に飛び乗ると崩れるから注意しろ。出来るだけ大きな岩を選ぶんだ。」
ルミナが岩山の注意をすると、ピョンピョンと飛んで行き、瞬く間に見えなくなってしまいます。
森と同じように生体レーダーでルミナの方向を確認します。大分離れてしまいました。
「猿跳び！」
リューイもフュン、フワリ・・と後を追いかけます。

２人は岩山を飛んで行きます。
次の日は谷を越え、森を抜け・・・
野を越え、また谷を越え・・・・・
岩山の窪地に身を寄せ合って眠り、谷川で魚を取ってバーベキュー・・
そんなこんなの旅を続けること１０日目で、ルミナの隠れ里がある森に着きました。

「ここだ！この森に私の部落がある。」
ルミナは、そう言ってますがリューイには、今までの森とどこが

違うのか判りません。
「森全体が結界に包まれている。森を見ても、森に入っても、人間には気配等判るわけが無い。」
キョロキョロとあたりを伺うリューイを苦笑いしながら見てます。
では、行こうか、とルミナが手近な梢に飛び乗ろうとしたその時です。
ヒュン！、ヒュン！！
ルミナの足元に2本の矢が突き刺さりました。
何時の間にか近くの梢にエルフの男性が立っています。奥にもう1人。
生体レーダーには黄色の点が段々増えていきます。
ルミナを男が指差しました。
「・・よくも戻ってこれたものだな！」
ルミナは黙っています。
「お前が祠の封印を破ったのを見ていた者がいる。・・言い逃れることは出来ないぞ！」
生体レーダーの黄色の点は8個、目の前の2人意外に6人が森に隠れています。
「・・この村に未練は無い！・・妹に届けたいものがあるだけだ。」
「その妹、いや！巫女姫の病も・・お前が去った後は悪化する一方だ。いまさら・・去れ！」
「後生だ！・・届けるだけでいいんだ・・・」
どうやら、村でなんか仕出かしたようです。村の掟にでも抵触したのかもしれませんね。
リューイはただ、ただ状況を見守るだけです。
その時です。
リューイの生体レーダーに急速に接近する黄色い点が現れました。
みるみる近づいてきます。
そして・・・シュタッ！とリューイの前に白い布に身を包み、長

い髪を組紐で結んだ1人の女性のエルフが降り立ちました。
ふかぶかとリューイ達にお辞儀をすると後ろに振り向き梢のエルフに顔を向けます。
「シェイム・・ここは通してあげなさい。長老の命です。」
「ですが・・その者は掟破り、ましてや、よそ者を村に連れ帰るという失態もしでかしておるのですぞ！」
「それを含めてです。・・長老はルミナの弁解を聞いても良いとまで言っています。」
「しかし・・・・判りました。・・・帰るぞ！！」
シェイムと呼ばれたエルフが目の前の梢から消えると、他の反応の次々と消えていきます。
「申し訳ありません。彼は、真面目すぎるものですから・・」
「ライカ。もういい。それで、長老は申し立てを聞くといったのだな？」
「はい。でも聞くとは言っても許すとは申しておりません。」
「それはかまわない。掟は掟だ。何も無かったことには出来まい。」
「そちらの方ですが、賓客としてお招きするよう巫女姫様より承っております。」
「まて！妹は・・大病で臥せっているはず・・」
「今は、でも、１０日程前、突然祠に御出でになり、姉と伴に来るお方を泉にお連れするよう告げられました。その後は昏睡したままです。」
「そうか・・・」
ご案内します。というエルフに従い2人は森に入っていきました。
エルフの部落は隠れ里、深い森の中にあって周囲を結界に囲まれています。
用の無いものは入れない。入らせないのが村の掟。
だから村があるのか、有るとすればどのあたりなのか外部の者に

は判りません。
そんな森をよく知るエルフの後を追ってリューイは飛んでいきます。
しばらく進むと空地が見えました。
森の中に周囲１００ｍ程度の空地があり、そこにログハウス風の家が立ち並んでいるのが見えます。
その端に森の梢から、シュタッ！っと降り立ち、一番大きな家に３人は歩いていきます。

「お入りください。」
長老の家の前でエルフが言いました。
ルミナは動ぜずにドアを開けて進みます。リューイも後を着いていきます。
室内は、以外と広く、長老職のエルフが数人壁を背に両側に座っています。正面に座っているのが、大長老という事でしょう。大長老の前には炉が切ってあって、小さく炎が燃えています。
ルミナは炉の前に座ります。リューイもそれに倣いました。
周囲からは、のこのこと・・とか、よくもおめおめと・・とか小声が聞こえましたがルミナは無視しています。
ルミナが、大長老にふかぶかとお辞儀をします。あわててリューイもお辞儀をします。
「祠の封印を破り、古の地図を持ち出した罪。今更弁解の余地は有りません。甘んじて受ける所存でありますが、その前に一度だけ、巫女姫に合わせて頂きたく参上致しました。」
「・・・・」
「・・今一度、妹に合わせて頂きたく・・」
「ルミナが生まれた時・・時の巫女姫は、こう言った。（この者はこの村には過ぎた者・・）」
「どんな意味かは判らんかった。・・・だが、地図を持ち去り、戻ったということは・・・手に入れたのか？」

「はい。・・しかし、これが最後ともう二度はないと・・」
「そうか・・確かに二度は必要無かろうて・・しかし、あそこはオークの棲家、どんなにお前が武勇に優れていようとも単独では数に飲まれるのは必定・・」
「この者達の助けを借りました。その上、彼女の大切な武器を交換品として差し出しました。」
「・・泉の精の欲しがりし宝とは、この者の武器とはの・・」
「お客人、すまんことをしてしもうた。お客人の武器はもう二度と手には入らぬじゃろう・・・」
「ところで、聖水は何処じゃ。」
ルミナは懐から聖水を取出しました。
小さなビンに入った聖水は、聖水自体から透き通った青い光を発しています。
長老達は思わずその光に見入ってしまいました。それほど綺麗なのです。
そんな中、大長老が手を叩きます。
お呼びですか。と先ほどのエルフが入ってきました。
「その祝福された聖水をロミナに飲ませない。」
エルフは畏まって、聖水を受け取ると部屋を出て行きます。
「今夜はこの村に泊まりなさい。お客人もご一緒に・・・沙汰は明日でよかろう。」
ルミナは礼をするとリューイを伴い家を出ました。
今夜は、古巣・・昔住んでいた家に泊まるようです。

ロミナとオニギリ

チチチ・・チュンチュン・・

朝です。エルフの隠れ里に、ニワトリはいません。

村を取り巻く深い森に住む小鳥達が一斉に囀ってます。賑やかですからエルフの人たちは皆早起きです。

ルミナはリューイを伴って村の共同井戸に向います。

こんこんと湧き出る石組みの井戸から水を桶に移して顔を洗います。

「軽く朝食を食べて長老に家に行くぞ！」

布でゴシゴシ顔を拭きながらリューイに告げます。

ベッドが2つだけの小さなログハウス、それがルミナの家です。

壁に組み込まれた暖炉の火を掻き立てポットを据えつけると、火箸の先に干し肉を刺して軽く炙ります。

「ほら、出来たぞ。」

ルミナがパンに焼きたての干し肉を挟んでリューイに渡します。

リューイは、お茶の準備です。

「食べながら聞いてくれ・・昨日の件でおおよその察しはついたと思うが・・」

リューイは頷きます。

「私の家系は古いエルフ王家の末裔だ。この村の祠の巫女として祭祀を代々受け継いできた。」

「母が無くなった時だ、村の者は当然私が後を継ぐものだと思っていたが・・・妹が名乗り出た。」

「私と妹は双子だ・・・しかし、妹は、妹の目は見えないんだ・・」

「お姉さんは世界を見てきて・・そして私におしえてね。って・・

」
「私は、村を出た・・たまに帰って、村や町、クエスト、珍しい食べ物・・いろんな事を妹に話した。」
「そして、今年の若草の月に、村に帰って来たら・・・妹が重病と巫女より聞いた。」
「村に生まれ、外に出ることかなわず、まして世界を見ることもなく・・私には耐えられなかった。あまりにも不憫でならなかった・・」
「私は、訳もわからず駆け出した。・・・気が着いた時には・・・祠の前にいた。」
「幼い頃の母の話を思い出した。祠には、エルフ王国の神殿の地図がある。その神殿にはどんな病も治す不思議な聖水がある・・と。」
「私は・・祠の結界を壊し中にあった壷の中から古い地図を見つけると村を飛び出した・・・」
「だから、私は罰を受ける。しかし、顛末だけは確認したい。それだけだ・・」

ルミナは温くなったお茶を飲みました。
リューイはなんと言ったらよいか悩んでます。自分に兄弟がいたら・・なんて考えてるのかもしれませんね。
「ルミナ！長老が御呼びだ！」
家の外で誰かが怒鳴ってます。
「シェイムか。今行く！」
「さて、御呼びだ・・出かけよう！」
昨日のエルフに先導されて長老の家に向います。
朝早い時間ですが、村の中は賑やかです。
数人連れ立って森に入るエルフ達の背中には弓矢が背負われています。狩に行くのかも知れませんね。
「シェイムです。連れてまいりました。」

エルフの男はそう言って、リューイ達を中に入れます。
昨日と同じように、村の長老が揃っています。
リューイ達は大長老の前に座りました。

「揃ったか・・」
「さて、ルミナよ。そこの客人を連れて、祠に行くがよい。」
「それと、お前の沙汰じゃが・・村払いとする。祠から村に帰るに及ばず！立ち去るがよい。」
「そして、御客人・・戦士の魂とも言うべき武器を聖水の代替にして頂き、重ね重ね礼を言う。・・これを受けて欲しい・・」
大長老は後ろから長剣を一振り取出しました。
「エルフ王国健在しころ、国王がドワーフに打たせた長剣じゃ・・銘を（おにぎり）という。貰ってくれ・・そして孫を頼む。」
シェイムが大長老より名剣（おにぎり）を受け取り、恭しくリューイに捧げ渡しました。
でも、リューイの武器って元は唯の鎌です。貰っていいのかな？ってルミナを見ると、貰っとけと目が言ってます。
「このような名剣を私が持っても・・」
少し遠慮して見せます。日本人は謙虚さが売りですからね。
「良い良い。村においても意味が無いもの。そなたに貰われてこそ意味があるというもの。」
では・・とリューイは受け取りました。
「さて、祠は男子禁断・・・巫女がご案内します。」
「では、参りましょう。」
何時の間にか2人の後ろに白いフードをまとった女性が立っていました。

長老の家の裏手にある小道を3人は進みます。
村には不釣合いな敷石で舗装された小道です。
うねうねとした道を歩いていくと、石造りの建物が見えてきまし

た。
「祠の巫女が住まう館です。祠はもう少し先になります。」
サンディの家の2倍程の館を過ぎると、石造りの小さな祠がありました。
「しばらくお待ちください・・」
巫女が立ち去りました。
祠は直径1m程の泉を中心に据えて、4方に石柱を組み、その上に薄い石を敷き詰めて屋根とした簡素な造りでした。
石柱には文字を書き綴った布が張り巡らされており、おそらくそれが結界となるのでしょう。
泉の奥には石で出来た祭壇があります。古い材質不明な壷が祭られています。
村はログハウスなのにここは石造りってちょっと変だな？なんて考えていた時です。

「お姉さま！」
リューイが振り返ると、そこにはもう一人のルミナが立っていました。
ルミナが駆け出し・・もう一人のルミナに抱きつきます。
「ロミナ・・直ったのか・・・よかった、よかった。」
2人、抱き合いながら再会を喜んでいます。
でも、すぐに、ルミナは気がつきました。
「ロミナ・・・目は・・」
ロミナの両目は包帯が巻かれていたのです。
「病は直ぐに良くなりました。・・そして私の目も・・でもあまりに眩しくて・・しばらくは見ることを控えろと・・」
「そうか・・それならよかった。」
「いいえ。良くありません。聞けばお姉さまは、このままこの村を去るとか、二度と村には戻らないとか・・」
「おねえさまの姿を見ることが出来ないなんて・・」

（リューイ。ちょっとよいか。）
（今、いいとこなんだから、手短に・・）
（私の所の、早期警戒管制部隊がね・・今日の話を聞いてたようなの。・・もう、涙を滝のように流してんのよ。それで、これを贈れって言って来てるんだけど・・）
（なにを贈るの？）
（携帯通信機！・・今座標セットしたからあと少しで着くよ。空みてて！）

「2人とも、ちょっといいかな？」
ルミナとロミナが振り向きます。
「なんと言ったらいいか・・とにかく、2人を哀れと思い天が贈りものをしたいと言っている。ほら、空から白い花が落ちてくるだろう。あれがそうみたい。・・とって来るね。」
リューイの言い訳じみた話の最中に、青いそらから白いパラシュートが降りてくるのを見つけました。
それには及びません。と巫女がシュタッっと枝渡りで回収に行きます。
「お姉さまのお連様は、神託をなされるのですか？」
「いいや、こいつはリューイというただの娘さ。私より強いかもな。」
「戦士様ですか。この度はいろいろとありがとうございました。」
ロミナは改まってリューイに丁寧にお礼を言います。
「何時までも居ると別れが辛くなる。2度と会えないかも知れないが幸せに暮らせよ。」
「お姉さまもお元気で・・・」
改めて2人抱き合ってます。これで、最後ですからね。リューイもちょっと涙ぐんでます。

「これで良かったのでしょうか？」
巫女さんがパラシュートを回収したみたいです。
小さな包みが結んであります。それを開けると・・２つの携帯電話？と手紙が入っていました。

「なになに・・コンパクトの蓋を開けて赤いボタンを押すと相手のコンパクトに音がなる・・どれどれ・・」
ルミナとロミナにコンパクトを渡して確かめてみます。
「次に、音が鳴ったほうのコンパクトについている赤いボタンを押すと音が鳴り止んで通話が出来る。その時鏡に相手の顔が映る。鏡を写したい方向に向けると相手にそれが移る・・・できた？」
「やめる時は、青いボタンを押す。そしたら消える・・・ホントだ！」
これさえあれば、遠く離れた２人が顔をあわせて話し合うことも出来ますし、ロミナに遠くの町や村を紹介することも出来ます。
ルミナとロミナは天の神様にお礼を言いました。
船の連中もちゃんと聞いてるんでしょうね。

「これで、思い残すことは無い・・」
「ロミナ、しあわせにな！」
「お姉さまも・・リューイ様、姉をよろしくお願いします。」

ルミナはシュタッ！っと枝渡りで祠を去ります。もう２度と戻りません。でも、村の様子は何時でもわかります。
安心したルミナはどんどん加速して故郷を離れていきます。
リューイもルミナの存在を生体レーダーで確認しながら（猿跳び）で追いかけます。

盗賊団現る

黄金の月が終わり、灰色の月も半ば近くになりました。
サンディ達が住む山の村も段々畑の収穫が終わり、出稼ぎに出ていた者達が次々と帰ってきます。
サンディのお母さんも月初めに帰ってきました。若草の月に出かけてから7ヶ月ぶりです。
ただいま～。ってお母さんが帰ってきた時、ライムは真っ先に走っていってお母さんに抱きつきました。甘えんぼさんですね。
でも、ライムはまだ12歳。お年頃ですから仕方ありません。その後、お帰りなさいってちゃんと挨拶も出来ました。
「あら？サンディはどうしたの？」
お母さんの素朴な疑問です。
「お姉ちゃんはね～、大工さんのお仕事見張ってるんだよ。」
「えっ？」
何かあったのかしら。とお母さんは考えました。でも、家は小さいですけど頑丈な造りです。修理する場所など思い浮かびませんでした。
「あら！お帰りなさい。もう少し後かと思ったけど・・・ご苦労さまでした。」
サンディは町で働いているお母さんを一度見たことがあります。小さな宿屋の台所で、それは忙しく立ち回っていました。
「ところで、この家に修理するところってあったかしら？」
「何処にも無いわ。」
「だって、大工さんが来てるんでしょう？」
「あ～・・それね。いいわ。話したげる。でも、その前に荷物を置いて来て。ライムお茶を頼むわね。」
そうです。お母さんは未だ荷物を持ったままでした。

「そう・・そんなことがあったのね。」
「そんな訳で、お母さんが帰ると、リューイの泊まるところが無くなるの。だから、納屋を改造して寝室を作ってるのよ。」
「よく判りました。ところで、何時帰ってくるの？私もお礼を言わないとね。」
「それが・・一月ほど前のクエストで同行したエルフとエルフの故郷へ行ってるの。もう直ぐ帰ってくると思うわ。寝室は後2日で出来上がるから、お布団も用意しなくちゃね。」
家族水入らずでお茶をのんびり飲みながらお話は続きます。だって、半年以上合っていませんでしたから。

2日たって、リューイの寝室が完成しました。大工の棟梁に気前よくサンディが給金を支払います。
お母さんは、何処で稼いで来たんだろう。って思いましたが、聞くことはしませんでした。
だって、昨日、猟師さんの家に猟師株を買いに行くと、（お前さんちには、２０株を渡してるからそれで十分だろ）って言われました。そんなにお金があるはずないのにって考えてたら、サンディと一緒の娘が仕留めた大猪と猟師株を交換したと教えて貰いました。
だとしたら、寝室の改造費もなんとか自分達で調達したに違いありません。
「これで、お姉ちゃんが何時戻っても大丈夫だね。」
お母さんの手を握りっぱなしのライムが言いました。
「ライムはお姉ちゃんが大好きなのね。」
お母さんはそんなライムを微笑んで見てます。
「うん。だって、強いし、綺麗だし、そんでもって、ライムが寝る時に何時もお話してくれるんだよ。一度もライム聞いたこと無いお話だよ。」
きっと遠くから来たのね。娘達も懐いているようだし、ずっといてくれたらいいんだけど・・・お母さんは、まだ見ぬリューイにそ

んな感じを持ちました。

そんな日々送っていた時です。村の中を誰かが狂ったように鐘を鳴らしながら通りすぎました。

早鐘です。

サンディが慌てて通りに出ます。そして左右を先ず確認。・・火事では有りません。

駆け出します。そしてギルドに駆け込みます。

そこには既に、大勢の者達が集まっていました。サンディもその中に入って行きます。

「・・っとこんなところだ。今一度言うぞ！盗賊団が村外れで目撃された。今は黄金の月が終わり、この村が一番満ち足りた時だ。やつらはそれを狙って来たに違いねえ。・・」

普段は奥まった事務所にいるギルドマスターがギルドのホールにあるテーブルに載って皆に告げています。

（こまった。）とか、（今ここに冒険者は何人いるんだ。）とか、いろんな人が一斉に話し始めます。

「だまれ！！　とりあえず奴等が襲ってくるとすれば、今夜だ。昼にはこねぇ。今から段取りを決めるからそこで大人しくしてろ。」

「サイズ、カルアちょっと来い！」

集まった中の2人を連れてマスターは事務所に入っていきました。

「おぉ、サンディか。例のねえちゃんは来てねえのかい。」

「それが、エルフと一緒にエルフの里に行ってるのよ！」

そうかぁ・・残念。と猟師のおじさんが言いました。

その娘っ子っていうのは例のあれか？そうだ・・なんか有名になってます。

しばらくワイワイ・ガヤガヤやってますと、マスターが2人を連れて出来ました。

「いいか、手はずを伝えるぞ！よく聞けよ！！」
「村の入口は2箇所だ。南側をサイズに、北側をカルアに任せる。2人とも銀3つだ文句はあるめぇ。」
「残りの銀持ちは6人だ。4人をサイズに2人はカルアだ。人選は任せる。」
「そして、残った黒は星3つ以上が14人。ここは7人づつ分ける。」
「最後に黒の星2つ以下だな。屋根に上って援護しろ。何処の屋根でもいい。」
「最後に、質問はあるか？・・よし、じゃぁ準備にかかれ！！」

サンディとライムは自宅の屋根に上り、村に入ってきた盗賊団の迎撃はやらなければなりません。
でも、村人の殆どがこんな時は同じようなこ事をするはずですから、ある意味戦力外通知に等しいものですね。
サンディは自宅に駆け込みます。
「お母さん・・・」
お母さんは、ギルドでの話しを聞くと早速準備です。
必要なものは、夜食と水筒、魔力補給の小瓶、薬草、毒消しですね。小分けして小さなかばんに詰め込みます。
武器は、おかあさんがフライパン。サンディが杖、ライムが十字弓とボルトそれに爆光球をポケットに入れます。
家に戸締りをして、家の裏に梯子を掛けます。
水を汲んで屋根に上り、屋根に水を満遍なく掛けます。こうすれば火矢を受けても直ぐ燃え上がりませんからね。
さらに、水が入るものに全て水を入れます。
最後に通りの真ん中にかがり火を準備します。
これで準備終了です。後は、夕食を軽くとって連絡を待つことにします。

夕暮れが訪れ、村の家々からほのかな明かりが漏れる時でした。
昼間と同じように早鐘を打ち鳴らしながら誰かが走る抜けます。
盗賊団の襲来です。
3人は、ゆっくりと立ち上がると、裏にある梯子を上ります。
最後にお母さんが登り終えると、梯子を3人で屋根に持ち上げました。

ナナイ村の危機

屋根に梯子を持ち上げると、屋根の影に隠れて通りを覗います。
幼い子供を持つ母親は早くから裏山に猟師さんに付き添われて逃げています。
通りは、シーンと静まってます。時折、犬が吼えていますが、緊張感が伝染したかもしれませんね。
待つのはイヤなものです。
お母さんは、ライムが小さい時を思い出しました。
あの時も、盗賊団の襲撃があって、私はライムを背負ってサンディと伴に裏山に隠れたんだわ。
でも、あの人は銀2つ・・門の所で盗賊と戦って・・亡くなったのよ。
今回は、何事も無いといいんだけど・・・

突然村の門の方が明るくなりました。
門の方を見ると、空から炎が降ってきます。
火矢です。盗賊団の襲撃が始まったのです。ワァー!!という声が聞こえてきます。
また、火矢が空を彩ります。
「盗賊団はね。部隊を3つに分けてるんだよ。新しい連中は、切り込み隊で、中堅が弓を使い、古株は最後の略奪をするのよ。切り込み部隊は消耗品なの。幾らやられても盗賊団に入りたい者を切り込みに使うから。そして、見所のあるものを中堅、古株と変えていくのよ。」
「じゃぁ、後になればなるほど強くなるの?」
「そうね。そうなるわね。」
門の方の戦いが激しくなってきたようです。ワァー!っという声に混じって、ガシャガシャっという鎧や武器のぶつかり合う音が大

きくなっています。
サンディは杖を握り直しました。ライムは十字弓を引き絞ってボルトを装着します。

「一人行ったぞー！！」
十字路にある民家の屋根から叫び声が上がります。
サンディが通りを見ると盗賊団の男が大きな斧を持って走ってきます。
サンディの向かいの家の屋根から火炎弾が発射され、男に当たります。大きな火柱が上がり、その場に男は倒れました。。
サンデイは小さな火炎弾を作ると、家の前の松明を燃やします。
それを合図にあちこちの松明が燃え上がります。
これで、しばらく通りを明るく照らすことができます。

「今度は、２人だー！」
また、門を越えた盗賊が走ってきます。
サンディが火炎弾を発射します。ライムはボルトを発射しました。
盗賊はそれを身を捩って避けると、短剣をサンディ達に投げつけます。
カキン！とお母さんがフライパンで弾き返します。
サンディが継ぎの火炎弾を発射しようとしてる間に、周囲の家の屋根から火炎弾やボルト、矢等が次々に盗賊に飛んでいきます。たちまち盗賊はその場に斃れることになりました。

「火矢が来るぞー！」
その声に空を見上げると、火の玉のように一団となった火矢が飛んできます。
火矢はサンディ達の屋根にも突き刺さりましたが、お母さんが水に浸したボロ布を棒の先につけた道具でパタパタと消していきます。
さらに次の火矢がとんできます。ライムも手伝ってパタパタやっ

てます。
でも、上手く消すことが出来なかった家もあるようで、離れたところで火の手が上がりましたが、この状態ではどうしようもありません。
どんどん火矢が打ち込まれます。３人は懸命にパタパタを繰り返します。

「火矢が近づいたってことは、中堅の連中がいよいよ出番ってことよね。」
「そう。これからが本番よ。絶対に躊躇しないでね。相手は人の形をした魔物って考えればいいわ。」
「ライム、頑張るよ！」
３人が決心を固めたその時です。

「破られた！！・・来るぞー！！」
そう告げた男の人の体に次々と矢が突き立ちます。
ワァー！！という大声をあげて十数人の盗賊が道を走りながら手当たり次第に物を壊していきます。
十字路に近い家のドアを斧で叩き壊し始めました。周囲の屋根からたちまち矢が飛んで行きます。
「絶対に当たる距離まで待ちなさい！」
十字弓でボルトを撃とうとしたライムに注意します。
家のドアを破る音が近づきます。
パシュ！っと音がしたかと思うとドアを破っていた男のわき腹にボルトが突き刺さります。
サンディが振り返るとライムが真っ青な顔をしてます。
「ありがと。私もがんばるからね。」
サンディが励ますとライムは小さく返事をし、十字弓に次のボルトを装着します。

次の一団がやってきました。
今度はサンディも火炎弾を立て続けに発射します。ライムの十字弓は狙いは確かなのですが、連射することは出来ません。一人づつ確実にがモットウです。
お母さんはそんな2人を見守ることしか出来ません。だって、武器はフライパンですからね。でも、屋根に盗賊が上がってきたら、これでパカンってやっつけるつもりです。
サンディ達や周囲の家々の屋根からの猛射により盗賊はサンディの家の数件手前までしか来る事が出来ません。
でも、盗賊達はこれも作戦の内なのです。
何回か決死隊を投入することで、サンディ達が疲れるのを、魔力が尽きるのを、矢やボルトが尽きるのを待っているのです。

門からの声や、剣戟の音が小さくなっています。
銀板を持つ冒険者の技量は半端ではありませんが、人間です。疲れもします。・・やはり防ぎ切れないのでしょうか。
こんな時に居ないなんて・・・リューイをちょっと恨めしくなり涙を堪えるために上を向きました。

「え！・・・」
空から何かが降ってきます。
たしか、屋根に上がった時は星空だったよねぇー。なんて考えてます。
空から降ってきたもの・・流星のように一直線に村の外に落ちていきます。
プシュ、プシュっと短い断続音がします。
ほんの一瞬でしたが、確かに流星が落ちてきました。そして、流星は盗賊団の上に降り注いだのです。

（姫様～～これ以上高度を維持できません。落ちますよ～！）

（それを何とかするのが操船部門でしょうが・・・それでもプロなの！）
（近接防衛用ガトリングレイザー発射！！）
（回頭いそげ！！）
（左舷ガトリングレイザー発射準備よし！・・テッ！！）
（姫様ほんとにやばいですよ～！半重力機関がレッドゾーンです！！）
（それじゃぁ、軌道位置にシフト移行・・開始！）
姫の後ろで成り行きを見守っていた将軍は冷や汗をかいてます。
（姫、この船で成層圏まで降下するのは、関心しませんが・・・半径２Ｋｍの大型船ですぞ。）
（しょうがないでしょ。リューイから緊急依頼がきたんだから・・・）
（さぁ！衛星軌道シフト完了したら宴会よ！！）
（そうだ！今日は俺達が主役だ！海兵隊だけにいい思いはさせないぞ！！）
（（（オォー！！！））））
確かに士気は上がってるんですが・・・

星の屑

リューイ達は野を越え、山を越え、ナナイ村を目指して走ります。
ピョン、ピョン・・フュン、フワリ・・・走ると言うより飛んでるんですが・・・
最後の岩山を越え、森を抜ける時には夜を迎えていました。
このまま村に帰るか、それとも森で一夜を明かすか悩みながら村を眺めた時です。
大きな火の塊が村に向って飛んで行きました。

「盗賊共の襲撃だ！行くぞ！！」
ルミナがそれを見て叫びます。そして、段々畑を駆け下ります。
慌ててリューイも追いかけます。

村の手前まで来ると、盗賊団が手勢を３つに分けて陣取っています。
先頭の集団は村の門辺りで激しい戦闘をしているようですが、まだ村には入り込めないようです。村から１００ｍ程度の所にいる集団は、盛んに火矢を村に放っているようですが、まだ村に火の手は上がっていません。時間の問題かも知れませんが・・
最後の集団は人数は少ないですけれども・・酒盛りしてます。

「リューイ、良く見ろ。あれは、盗賊の襲撃の仕方だ。新入りは一番危険な前衛。それに何度か生き残ったものが中衛で、火矢を担当。最後の連中は古株だ。最後の略奪だけ参加する。しかし、前衛、中衛を生き残った連中だ。銀３つの実力以上だぞ！・・さて、どうする？」
リューイは考えます。
リューイの身体能力とターボ加速を使えば、ある程度の敵は倒せ

るかも知れません。
　でも、ルミナは銀３つ以上の連中が大勢いると言っています。打ちもらしたものが村に逃げ込んだりしたら大惨事になります。それにルミナは銀の星１つ、実力差が有りすぎます。

（姫！いいかな。頼みたいことがあるんだ！！）
（な～に？・・あらら、大変なことになってるね。）
（この前、狭い範囲の全体攻撃が有るって言ってたよね。あれを、盗賊団の後ろの奴らに出来るかな？）
（星の屑ね。出来るわよ・・ちょっと間が開くけどその辺は臨機応変にね。）
（では・・・星の屑よろしく！）
（ＯＫ！！）

「後ろの連中は何とかする。ルミナはサンディ達をお願い！」
ルミナの返事も聞かずにリューイはおもむろに立ち上がると、天辺にわっかがついた杖を構えて走り出します。
ルミナはリューイの後ろ姿に頷いて村の門に向って走り出しました。

（ターボ１！）
リューイは加速して走ります。走って、盗賊の中衛と後衛の中間にやや離れて急停止。
急に姿現したリューイに盗賊達はビックリしましたが、姿は十代の女の子です。とりあえず逃げ出さない内に確保しとこ。ってな感じで数人が近寄ってきます。
リューイは叫びます。

「この村を助けるために！」
「この村を守るために！」

「ナナイよ！　私は、帰って来たぞ！！」
リューイは両手を天に大きく伸ばして大きな声で叫びます。
「我願う・・星の屑！！」

リューイの叫びになんじゃ？ってな感じで盗賊が見てますが・・
その中の一人が星空を指差します。
その時！
大空から沢山の光線が断続的に降り注ぎます。まるで流星が盗賊団に向ってきたみたいです。
最初の一撃はほんの数秒に満たない時間でしたが、ちょっと間を置いて再び流星が降りそそぎます。
（作戦終了！あとはよろしく！！）
姫からの連絡です。
どんな方法で実行したかは不明でしたが、その威力は甚大です。
まだ動ける盗賊が居るのを見たリューイは、討伐するため駆け出しました。

ルミナは流星雨を門の戦闘の真っ最中に見ました。
リューイが判らないことを大声で叫んだ途端の出来事です。
門に到着すると、門の中の冒険者と連携してたちどころに3人程倒しましたが、前衛は必死に向ってきます。ルミナはたちまち防戦する側になりました。
そんな時です。
「あれは何だ！」
その場にそぐわない叫びに皆が後ろを振り返ると、流星が雨のように盗賊団の後衛が居るあたりに落ちていきます。
それを見た盗賊達に動揺が走り、戦闘は一気に逆転します。
「ルミナじゃないか！遅かったな。それより今のを見たか？」
門を守っていた、サイズがルミナを見つけて声を掛けます。

「あれは、リューイの技だ。今後衛の方に行ってる。何とかしてくれ！あいつは・・黒３つだ！！」
「判った。ここは、頼むぞ！」
サイズは、後衛に向って走り出しました。

サイズは走ります。
後衛は盗賊達の古株。その実力は銀３つ以上と言われています。そんな連中の所に、黒３つが挑んだとしても嬲り殺しにされるのは火を見るより明らかです。
中衛の盗賊が立ちはだかるのを一撃で葬りつつ走っていきます。
そして、ようやく後衛まで辿り着いた彼が見たものは衝撃的なものでした。

リューイは杖の中ほどを両手に持ち斜めに構えます。
太った盗賊は、大きな両刃の斧を片手で肩の上に構えてます。
リューイが杖を回しながら、胴を撃とうとすると、盗賊は簡単に斧でその一撃を払います。
払われた杖を体とともに回転させ次の攻撃に出ました。
今度は、斧で杖の中間を打たれリューイは杖を落としてしまいます。
盗賊はニャリと笑うとリューイに斧を振り下ろしました。
しかし・・リューイは素早く片足を下げ半身の体制で斧の一撃を避けました。
と、同時に腰の鉈改を素早く抜くと、斧を持つ腕に振り下ろします。
ズバッ！と鈍い音がして、盗賊の片腕が切断されます。
切断された腕を慌てて押さえた盗賊の腹に回し蹴りを叩き込みました。
太った盗賊ですが、リューイの一撃で体をくの字にしながら水平に飛ばされます。

鉈改を腰に戻して、杖を拾います。
村に向おうとして、こちらを見ている男に気が付きました。
杖を構えます。
すると、男が慌てて手を振ります。
「お前が、リューイか？」
「そうだけど・・・」
「ルミナに頼まれたんだが・・・必要なかったみたいだな。まだ、門は戦闘が続いている。まだ戦えるか？」
それを聞いたリューイは村に駆け出します。サイズも慌てて後を追いかけます。

盗賊団壊滅

リューイは、盗賊の後衛を討伐しましたが、村の門付近はまだ戦闘が続いています。
段々畑の続く道を駆け抜けます。
サイズが後に続きますが・・なにせ、門から走ってきて再び駆け上がるのです。幾ら若いといってもキツイことは確かですから、段々と離れてしまいました。

門の付近は、喧騒と剣戟の音が入り乱れています。
盗賊の後衛は消えましたが、中衛の連中が混じったことにより門の防衛は難しくなっています。
数人、十人の単位で村の中に入り込まれてしまいます。
村の一部に火の手も上がっています。
そんな中にルミナは盗賊を相手に剣を振るいます。
「ヤァ！」
叫びと伴に振り下ろした長剣に盗賊がまた一人倒されました。
次の盗賊に向うルミナの長剣は刃こぼれでボロボロです。だって、盗賊達は両刃の斧を使いますし、皮鎧は一部に金属板が使われてます。はっきり言ってルミナ達よりも装備が良いんです。
「ダァ！」
横薙ぎに振るった長剣は盗賊の胴に食い込みます。
「ギャァー・・！」
盗賊は叫び声をあげて斃れます。
バキ！
嫌な音がしました。
ルミナの長剣が根元から折れてます。長剣の先は・・斃れた盗賊の片腹に食込んだままでした。
剣が無ければ戦えません。いい獲物です。

倒した盗賊に駆け寄り彼の持つ両刃斧を取り上げようとした時です。
「ルミナ！・・これを使え！！」
リューイの声です。
声の方を向くと布で来るんだ物が飛んできます。
受取って・・中を見て・・ビックリしました。
だって、そこにあるものは・・エルフの宝物「オニギリ」です。
でも、今は戦闘中。すかさず装備すると戦いに身を投じます。
それまで使っていた長剣よりも少し短いですが、バランス、重さとも申し分ありません。
「ヤァ！」
袈裟懸けに切り下ろしたオニギリは鎧まで断ち切りました。
いまは亡きエルフ王国の伝説となるほどの長剣です。今までの長剣とは切れ味が全く違います。斬りたいと思うものが切れるのです。

「大丈夫？」
リューイが心配そうに声を掛けます。
「あぁ・・ところで、これは返すぞ！」
ルミナがオニギリを鞘に入れてリューイに渡そうとしました。
「それは、ルミナが使って！・・俺には剣が使えないし・・もともとルミナの村のもんだし・・・」
「しかし、これはお前の武器の代わりじゃないか。」
「そう言ってたよね。だから、僕の好きに使っていいわけだし・・あげるよ。」
たしかにそうかも知れません。リューイが貰ったものですから、どう使おうとリューイの自由です。
「ありがたく頂くことにする・・・」
いいのかな？って感じでしたが、オニギリは名剣です。このままではリューイが誰に渡すか判らないと思い、ありがたく頂戴することにしました。

「ここは、任せていいかな？サンディ達が心配だ。」
確かにそうです。結構な数の盗賊達が村に入っています。
「早く行け！」
その言葉を聴くが早いかリューイは村の中に飛び込みました。

「お姉ちゃん・・助けてよぉ～」
ライムが通りに座り込んで助けを求めています。
盗賊の一人がはなった矢を避けた時にバランスを崩して屋根から落ちたみたいです。
幸い、オシリを打ったぐらいで怪我はありませんでしたが、今は非常時です。通りは一番危険なのです。
直ぐに救助作戦が開始されます。お母さんはフワリと屋根を降りるとライムを抱えます。身近な屋根に上ろうと見渡した時、盗賊の一人と目が合ってしまいました。
「Wォー！」
雄たけびを上げながら走りよる盗賊に、サンデイは必死に火炎弾を放ちますが、気が動転しているため中々当たりません。
「オォリャァ！！」
叫び声と共に振り上げた両刃斧を見て、お母さんはライムに覆いかぶさりました。
・・でも、何時までたっても体を分断されるような痛みが襲ってきません・・
怪訝な顔をしながら振り向くと、盗賊のお腹から棒が斜めに突き出しています。盗賊は事切れていましたが、棒が支えになっているのか倒れることが出来ないでいるみたいです。
若者が十字路の方から走ってきます。
「大丈夫だった？」
若者が助け起こしてくれました。
ライムが若者を見て抱き付きます。涙目上目使いは反則です。
「お姉ちゃん・・ライム怖かったよー！！」

「もう大丈夫だぞ！・・ルミナも門の方で頑張ってるし、もう少しの我慢だよ。」
リューイはそう言うなりお母さんとライムを小脇に抱えてシュタッ！っと屋根に飛び移ります。
そこには、涙で顔をクシャクシャにしたサンディがいました。
「遅かったじゃないのよぉー。」
ご免ご免と謝りながら、2人をサンディに引き渡すと通り飛び降ります。
盗賊から杖を引き抜くと通りの真ん中で仁王立ちになりました。
かっこいいわね。ってサンディが見とれていると、お母さんが近寄ります。
「あれで・・・女の子なの？　確かに、体形は女の子だけど・・・」
「そうだよ。ラスカル様みたいでカッコいいんだよ。」
強いとは聞いてたけど・・・桁違いの強さね。それに、優しい心の持ち主だわ。
この娘達と何時までもいてくれたら、心強いのだけど・・・

また、盗賊達が通りに走りこんで来ました。
サンディ達は屋根の上から迎撃します。
そして、よれよれになったところを、リューイが杖でバシ！っとやるとそれでいちころです。

門の方の喧騒が小さくなってきました。
先ほどの盗賊達を最後に通りに走りこんで来る者はおりません。
やがて、門の方から一段と高い勝どきの声が上がります。
サンディ達3人はほっとして屋根の上に座り込みました。
勝ったみたいです。何とか乗り切ったみたいです。

リューイは屋根の3人に待ってて！と声を掛けると、通りを門の

方に走って行きます。だって、門にはルミナが盗賊と戦っていたんですからね。

一夜明けて

盗賊団の襲撃は取り合えず何とかなりました。・・・って言うか、はっきり言って、殲滅です。
でも、むらの被害はゼロではありません。
家も何件か燃えてますし・・死んだ人もいるのです。
村の一番の激戦区である、南門にリューイは走って行きます。
途中参加とは言え、ルミナがそこで戦っていたんですからね。

「あら～リューイ君。今頃ど～したのぉ。」
服のあっちこっちに返り血を付けたルミナが走りこんできたリューイに絡み付きました。
正直言って、お酒臭いです。
南門を守っていた人たちの犠牲はそれなりにあったみたいですが、一段落付いた今は誰が持ち込んだのか皆で酒盛りの最中でした。
そばには、十数人の盗賊が縄で蓑虫みたいになってます。
かなわないと見て降参したみたいですが、酔っ払った冒険者につんつんされて呻いてます。
「おぉー、お前か。・・しかし大したヤツだなー。」
「お前ら！こいつだー。盗賊の頭を討ち取ったヤツは！！」
サイズが酔っ払いに言うと一斉に（ウォー！）と声が上がりました。
「飲め！」
マスターが大きなカップでお酒をリューイに渡します。
クンクン匂いを嗅ぐと・・・アルコールたっぷり、悪酔いしそうですが、周囲の人たちに囃し立てられ・・・ゴクリ！と飲み干しました。
エライ！！って一斉に声が上がります。拍手もしてくれます。
何時までも此処にいるととんでもないことになるかも！と思い、

ルミナを小脇に確保すると戦略的撤退を図ります。
まぁ・・早い話が、逃げ出しました。
明日ギルドに来いよーって誰かが言ってますけど、下手に返事なんかしたら大変です。
一目散にサンディの家に走ります。

「リューイさんありがとう。もうだめかと思ったわ。」
サンディの家に着くと戸口にお母さんが待っていました。
そんな事無いです。って謙遜するリューイを中にいれると、すかさずライムがお茶を運びます。
リューイから開放されたルミナは椅子に座るとテーブルにバタンです。
「わたしは・・酔ってなんかいないぞ～」
って言ってますけど、これは酔ってる人が言う言葉です。
「私達リューイのお部屋を造っといたんだよ。」
「エッ！」
ライムの思わぬサプライズにリューイは吃驚しました。
でも、リューイはずっとお母さんの部屋に泊まってましたから、今日からは宿屋泊まりだな。って思っていたんです。
「今日は遅いからお休みなさい。」
でも！っと傍らのルミナを見ます。
「それなら、大丈夫。ちゃんと2人が泊まれるようにベッドは2つ置いてあるから！」
サンディのありがたい言葉です。
ヨッコイショ！っとルミナを持ち上げます。
「こっちよ！」
サンディの後を着いていきます。
「今日は・・ダメかな？」
「なにが、ダメなの？」
「お姉ちゃんのお話・・」

「おかあさんが話してあげる！」
ワーイ！って喜んでいるライムは、お年頃の１２歳で赤い靴のメンバーです。

次の朝、と言っても昼に近い状態です。村中が寝坊した状態ですがこれは仕方ありません。昨夜あんなことがあったんですからね。
リューイ達は４人揃ってギルドに向います。
ギルドのホールにはもう人が一杯です。
ガヤガヤと煩い状態ですがギルドマスターと連れの騎士が登場すると、急に静かになりました。
マスターがテーブルに飛び乗りました。
「おめえら、良く眠れたかー？」
「「「オォー」」」
「昨夜は大変だったが、村に大きな被害は無かった。そして、盗賊団は壊滅できた！！」
「「「オォー」」」
「ここに居る騎士は盗賊団の討伐を国王より受けた騎士団の代表だ。彼らからの感謝と礼金をたっぷり頂戴した。」
「「「オォー」」」
「そこで、謝礼の分配だが・・・昨夜の騒ぎで、死んだヤツもいる。怪我したヤツもいる。村の家も何軒か焼かれている・・そこでだ。これらの費用を差し引いて、平等に分配するが文句のあるヤツはいるか？」
マスターは周囲を見渡したしましたが誰も文句をいう人はいません。
「じゃあ、一人銀貨１枚になる。足りない分はギルドから補助しよう。」
「それと、昨夜の戦闘でレベルが上がったヤツもいるだろう。カウンターで確認しながら受取るんだ。いいな！！」
「「「オォー」」」

一斉にカウンターに並びます。
お姉さんが一人づつ箱に手を入れさせてレベルの確認をしています。
上がった！とか同じだ・・とか声がします。終わった人は別のお姉さんから報酬を受取ると帰っていきます。
リューイ達の番になりました。
サンデイとライムは共に黒の星3つに上がりました。
ルミナも銀の星2つです。
ところが、リューイは・・・銀の星3つに一気に上がったのです。
周囲が騒然としましたが、サイズの一言（こいつが頭をやっつけた・・）を思い出して、それだけの実力があるのか・・なんて自己完結してます。
「お姉ちゃん、強いもんね！」
ライムの言葉に頭を掻いてます。
報酬を受取り帰ろうとしたところを騎士の一人に呼び止めれました。
「これをお前に進呈する。」
騎士は一振りの長剣を差し出しました。
「おれは、剣を使えないんで・・・お気持ちだけ受取ります。」
騎士はしばらく悩んでましたが、代案を提示することにしました。
「では、此処でお前が使える武器の代金を我々が負担することにしよう。マスターにその旨伝え置く。」
それならば、とありがたく受取ることにしました。

早速武器屋に出かけます。
でも、リューイには、剣は使ったことがありません。さて、どうしようかと悩みましたが、今持ってる杖は振り回したり、殴ったりと結構使いでが良いことに気が付き、杖を作って貰うことにしました。
木の棒ではなく、鋼の棒です。棒の上には、飾りを付けて其処に

４個の鉄のわっかを入れます。杖を付くと、チャリンって良い音がするんですよ。
リューイは昔見た山伏が持ってた杖を頭に描いて、注文をつけます。
あの杖を悪者に向ってエイッヤッ！って構えたらちょっとカッコ良いな。って思ったりしてるみたいです。

武器屋から帰る道では、盗賊達の亡骸を投降した盗賊達が台車に乗せています。
傍には冒険者と騎士が目を光らせて彼らの監視をしていました。
別の台車では盗賊達の武器や鎧を回収しています。
「盗賊の亡骸は川沿の広場で荼毘にするの。墓は作らずその場に埋めるのよ。回収した金属は村の物になるんだけど・・多分、町に売りに行くはずよ。」
サンディが彼らの仕事を見ながら説明してくれました。
「投降した盗賊はどうなるの？」
「それは、罪状次第だ。盗賊行為を1回すれば、鉱山で5年の重労働。2回で10年。3回以上は死ぬまでだ。」
ルミナが答えてくれます。

猟師さんの依頼　（1）

サンディ達が家に戻ると直ぐに昼食の時間です。
お母さんが簡単な料理を作って待ってました。
（これ！パスタに似てる。）ってリューイは思いましたが、意外と小麦が取れるところでは、同じようなものが食べられているのかも知れませんね。
「皆に、報告があるの。」
えっ何々？って感じでパスタを頬張るのがちょっと止まります。
「えぇーとね。お母さん、この村の食堂で働くことにしたから・・」
サンディとライムは吃驚してます。
「銀色の月が終わっても町に行かなくてもいいの？・・ずっとライムと居られるの？」
ライムはそう言ってお母さんに抱き付きます。
何時も家の事をキチンとしていますけど・・やはりお母さんと一緒が良いに決まってます。
「でも、良く仕事があったわね。」
サンディは現実的です。やはり気になりますよね。
「なんでも、村から遠くないところに洞窟が見つかったそうよ。オークばかりらしいけど、冒険者の初心者向けにちょうどいいって、村を訪ねる人が多いらしいの。」
（（（悲恋の洞窟だ！））））
最深部の神殿は岩崩れで埋まってしまいましたが、洞窟自体は残すって泉の精も言ってました。
初心者用の洞窟として有名になったみたいですね。でも、オークが集団で出てきたらどうするつもりなんだしょうか。
そこは、あまり気にしないことにしました。だって、泉の精はもういませんし、赤い靴が二度と行くことは無いと考えたからです。

「何時までも続くと良いわね。」
お母さんに甘えるライムを見てサンディが優しく微笑んでます。

リューイ達の部屋を作ったために、悲恋の洞窟での報酬は余り残っていませんが、盗賊の討伐で赤い靴は銀貨４枚を手に入れました。
でも、銀色の月を過ごすには少し足りません。少し家族？が増えましたからね。
何と言っても、ナナイ村は山村です。銀色の月は、その名の通り深い雪に包まれます。そうなっては、狩りもギルドの依頼もすることが出来ません。
冬越しの仕事をするならいまの内です。
そんな訳で、早速次の依頼を探すことにしました。

早速、次の日、朝早くからギルドに４人で出かけます。
でも、その前にちょっとより道して、リューイの武器を取りにいきます。
武器屋はギルドの隣です。昨日頼んだ時に、明日には出来ると言っていました。

「おはようございます。・・・頼んだものは出来てますか？」
「おぉ、出来取るぞ。これで良いのか？随分と重いものになっとるが・・」

ドワーフのおじいさんが壁に立て掛けてある金属棒を指差します。
「これね！・・・重いぃぃ・・。」
ライムが棒を持ってみましたが、ビクともしません。
「そんなに重いのか？」
ルミナが持ってみます。片手では無理・・両手でようやく持ち上がりました。
そんなに重くなったのかな？と少し心配意しましたが、リューイ

が持つと片手で楽にもつことが出来ます。
グルグルと回してみましたが、大丈夫です。
「どうもありがとう。いい出来だよ！」
棒を杖のように床に付くと、上に付いてるわっかがチャリンとなりました。

武器を受取り、今度こそギルドに出かけます。って言っても、隣ですけど・・
ギルドに入ると、何時もと違って数人の冒険者が依頼用の板に張られた依頼書を眺めています。色々と決めかねているようですね。
サンディ達が近づくのを見た冒険者が声を掛けます。
「ヨォー！確か・・リューイとか言ったな。俺達のパーティに入らないか？俺達は皆銀だ。ここで稼いで、来年は王都に行く。どうだ。付いて来ないか？」
「リューイは赤い靴のメンバーなの！変な勧誘しないでね！！」
サンディがピシャリと言いました。
サンディの剣幕に男達はスゴスゴ引き下がります。そして、再び依頼の検討です。
サンディ達も依頼書を見て回ります。
なるほど、男達が悩むのも無理ありません。
薬草探しと獣の討伐だけしかありません。薬草は報酬が安すぎますし・・・獣は熊や狼ばかりです。ルミナやリューイだけなら可能でしょうが、サンディやライムには荷が重過ぎます。
ここは、地道に薬草かなぁ・・なんて考えているサンディの前に新しい依頼書が張り出されました。

「えっと・・獲物の番求む！・・・山で狩猟の獲物を獣に取られないように番をして欲しい。期間は5日、報酬は銀貨5枚とハム5本。」
サンディは張り紙を剥がすと受付のお姉さんのところに持って行

きます。
「あぁ、これですね。詳しくは猟師さんに聞いてください。」
猟師さんの家に行くと数人の猟師さんが猟の準備をしています。
弓矢の弦を張り替えたり、矢じりを研いだり、罠のバネに油を差したり大忙しです。
「あのぉー・・獲物の番の依頼を受けたんですが・・」
サンディがそう言うと猟師さん全員にギロッって睨まれてしまいました。
タジタジでどうしようかな？って考えていると一人の猟師さんが奥から出て来ました。
「こらぁ、脅かしてどうするんだ！・・すまないね。・・・お前達この間の娘っ子かぁ？」
「はい。獲物の番の依頼を受けました。」
「すまねぇ・・明日から狩りなんで若いやつら気が立ってるんだ。お前達なら問題ねぇ。お前ら、こいつらだぞ。あの大猪を狩ったのは！」
どうやらこの間の猟師さんは猟師達の頭領だったようです。
その言葉に、全員の顔つきが変わります・・サンディ達をジックリと眺め、嘘だろう？って顔で見てます。
「明日の早朝、夜明けと共に山に向う。5日間の間、俺達は狩りをする。その獲物は一箇所に集めておいて、次々に狩りをする。お前達はその獲物の番をすることだ。匂いに釣られて肉食の狼等が繰るかも知れんからそのつもりで準備しな。それと、山に4泊するからその準備もな。」
「判りました。明日の朝、ここに集合で良いですね？」
「それじゃぁ、よろしく頼む！」
家に戻ると早速準備です。
冒険者の食事は自前が原則ですから、4人分が5日分。それと飲

料水です。料理に使う鍋と食器も必要です。
着替えも1式用意し、毛布も4枚持っていきます。それに魔力補給の小瓶を4本、薬草と毒消しも準備します。
こんなものか・・とテーブルにそれらを並べ、4人に分配します。ライムは大きなリュックに入るだけ入れて、残りを3人が布のカバンに詰め込みます。後は武器を持つだけですが、リューイはサンディに背中に背負う大きな籠を持たされました。途中で薪を入れるんだそうです。

猟師さんの依頼　（2）

次の日の朝早く、まだ星が出てる内に４人は家を出ます。
出かける時にお母さんが早く帰るんですよ。って言ってましたけど、まるでピクニックに行くような雰囲気です。
先頭のルミナは皮の鎧にオニギリを背負って布のカバンを肩に掛けています。
次のサンディは、普通の町娘の服装で、魔法の杖を持ち、肩には布カバン。
ライムも服装はサンディと同じで大きなリュックを背負ってます。リュックには十字弓を乗せてます。リュックは重量軽減率百分の一ですから、重くはありません。
最後のリューイは、Ｇシャツと Ｇパン。腰に鉈改と腰に小さなバック。そして、鋼の杖です。今回はさらに、篭を背負ってます。

猟師さんの家に着くと、家の周りが騒音で溢れています。
漁師さんと漁師さんの荷物を運ぶ沢山の人でいっぱいです。そして、皆それぞれかってに話してますから、騒々しいったらありません。よく近所から苦情が来ないものです。

「オメエら！静まれ！！」
頭領の一喝で、一瞬に喧騒がシーンと静かになりました。
「準備は出来たか！！」
「「「オォー」」」
「よし、出発だ！、猟師、荷駄、冒険者の順だ。いいな！！」
ぞろぞろと猟師さんの家を離れ村の門に行列を作って出かけました。
一列に並んで、段々畑を通り、森に入り、山に向います。

ルミナと一緒にルミナの故郷へ行った時にも森を通ったんですが、途中から道を変えています。
獣道を通っているようです。そこは、潅木も、ツタも少なく歩きやすい道でした。
森を抜けると、岩山です。
大きな岩の陰で、皆で昼食を取ります。リューイが岩の上に上って周りを見ると下の方に村が見えました。
岩山を少し登ると、また森が広がります。ここが目的地でした。
大きな岩が小さな岩に張り出して屋根のようになっています。
村人は荷物を其処に纏めて帰って行きます。そして、5日後に獲物を運ぶためにまた戻って繰るのだそうです。

「今日から5日、ここで獲物の番だ。まぁ、今日は猟がねえから、実のところは明日からだな。ゆっくり休むのも仕事の内さ。」
頭領の言葉に従い、荷物の傍に赤い靴の基地・・寝る場所を確保します。
猟師さん達は厳つい男達ですので、基地の傍に小さな焚き火を作り早めの夕食です。

「お姉ちゃん・・お話して！」
ライムのおねだりにしょうがないなぁっていいながら昔話を始めます。
リューイの昔話は、サンディやルミナでさえきいたこともありません。3人とも真剣な面持ちで聞いています。

次の日の朝早く、猟師さん達は5人づつ、2組に分かれて狩りをするみたいです。
「じゃぁ、俺達は行ってくるが、食料の番を頼む。それと、獲物が取れる度に一旦戻るから、その時に一服出来るよう、湯を沸かしておいてくれ。じゃあな！」

そんなことを言いながら、沢山の罠を担いで森に入っていきました。
食料を入れた荷物は岩棚の奥のほうに押し込んであります。
取り合えずは、焚き火用の薪の確保と水の補給ですが、薪は昨日ここに来るまでにリューイ背負い籠一杯に集めて来ました。
ルミナのもう少し確保すべきだ！との意見で、再度リューイが籠を背負って出かけて行きました。ついでに谷まで降りて水を確保するつもりです。
サンディ達も仕事です。先ずは焚き火の番、これはサンディが担当です。ルミナとライムは周囲に簡単な杭を打ち、杭と杭の間に糸を張り巡らせます。其処に鈴を所々に付けると、立派な警報装置になります。猟師さんが引っ掛からないように所々に赤いリボンを結びました。
サンディは、焚き火の周囲を周りから石を運んで炉のように組んでいきます。
次に、膝ぐらいまで石を積み、横に棒を渡してポットを載せてお湯を沸かします。これで、猟師さんが何時戻ってきても大丈夫です。

こんなものかな？ってサンディが周りを見渡していると山のような薪を背負って両手に水桶をぶら下げたリューイが戻ってきました。
ご苦労様。って言いながらサンディが水桶を受取ります。
リューイは全く疲れていなかったんですが、ライムに指示された席に座ります。席と言っても手ごろな石の上に畳んだ毛布を置いただけなんですけどね。
焚き火の岩棚側に４人が座り、外側はリューイとルミナです。
ポットを熾き火に移動して、大鍋に適当に野菜とお肉そして塩とハーブと水を入れます。炉にかけてしばらくすればスープの出来上がり！ですね。

昼過ぎに猟師さんが２人獲物を担いでやってきました。鹿のよう

ですが頭がありません。
大まかな解体と血抜きはすんでいるとの事で、岩棚の隣にある窪みに入れました。獲物の上に枝を渡して、葉の多い枝をかけて置きます。こうすれば日に当たりませんし、夜露に濡れることもありません。
後は、よろしく。って少量を手に出かける猟師にスープを勧めます。
こりゃいい。あったまる！ってよろこんでお椀からスープをかきこみます。

猟師さんが帰ってしばらくすると別のチームの猟師さんが獲物を持ち込みます。
やはり、獲物の解体等は終わっていて前のチームの獲物の上に重ねます。
猟師さんによると今年は獲物が多いとのことです。
でも、こんな時は獲物を狙う獣達も群れを作って移動してくるそうですから、油断するな！って念を押されました。
お茶を飲んで、やはり食料を持って仲間の所に帰っていきます。

猟師さん達は、今夜はこの場所に戻りません。罠を仕掛けた場所の近くに皆で野宿をするんです。
そんな訳で今夜から、獲物の番の本番です。
まだ夕方にも成っていませんが、ルミナとリューイは一眠りすることになりました。夜更けに起こして貰い、サンディ達と交代するためです。

「じゃぁ、おやすみなさい」
リューイ達がサンディの後ろで毛布に包まると、サンディとライムは薪を手近な所に積み上げ、魔法の杖と十字弓を何時でも使えるように準備します。

「お姉ちゃん・・ちょっと心配だね。」
「イザとなれば、２人を起こすから大丈夫よ。」
山は、日が暮れると急に静かになりました。

渡り狼の襲撃

山の夜は暗く静かに更けて行きます。遠くで無視の鳴き声が聞こえます。
でも、サンディ達の周りは違います。
目の前の炉には焚き火が燃えていますし、頭上にはライムの作った光球が2個クルクルと回ってます。
昼間ほど明るくは無いですが、十分周囲の状況は確認できます。

「お姉ちゃん。まだ起こさないの？」
「もうちょっと、寝かせてあげましょう。ほら、あの星があの岩に隠れたら起こしましょう。」
「うん！」
2人ではちょっと寂しいみたいです。周りが静かですから、岩ねずみの動くガサガサと言う音にも、思わず武器を構えてしまいます。

そんな話をしていると、チリリン・・って鈴が鳴りました。
え！って感じで2人は鈴の鳴った方を見ると、鋭い目が光球の光を反射しています。
そして、その数は少しづつ増えていきます。

「ライム。2人を起こしなさい！！」
「わかった！！」
ライムが後ろを振り返るとリューイとルミナは既に身支度をしています。
なんで？って2人を見てますが、リューイは元々寝る必要がありません。ルミナは剣士ですから、獣の殺気を感じ取ったみたいです。
「ルミナ。左を頼む！」
焚き火の前に移動して襲来を待ちます。

獣の光る目は更に数を増していきます。もう２０匹以上いるみたいです。
やがて、１匹が光球で照らされた岩場に現れました。
狼です。でも普通の大きさではありません。ヤギ位の大きさの狼です。

「渡り狼だ！リューイ油断するなよ。こいつ等あの大きさで群れで狩りをするんだ！！」
余りの大きさにちょっと引き気味の３人にルミナが注意します。
サンディとライムは岩棚近くに移動して杖と十字弓を構えます。
前に焚き火が盾代わりです。
ルミナは焚き火の左側に立ちオニギリを肩に担いで構えます。
リューイは焚き火の右側の獲物を保管している岩の窪みの前です。
焚き火に薪を追加して、鉄の杖を斜めに構えてます。

何時でも来い！の状態ですが、狼は中々襲ってきません。相手を焦らして隙が出るのを待っているようです。

「ガウォン！」
一匹の狼が、ルミナに飛び掛ります。
「ウォッ！」
ルミナは、気合の入った声と共にオニギリを狼に向って振りぬくと、ズシャ！っと狼の頭部が２分しました。
「次！」
と言ってますけど・・狼は遠巻き状態です。
「ライム。混戦になったら爆光球を投げて岩棚にサンディと避難しろ！」
リューイが怒鳴ります。これね。ってライムはポケットのふくらみをポンポンと手で確かめます。

「ガオオン！」
一際大きな遠吠えが響くと、狼が一斉に襲ってきました。
数匹が1つの群れで襲ってきます。
リューイは鋼の杖を風車のように回します。ガツン！、ガツン！と狼に鋼の杖が当たりますと、重さと遠心力が合わさった衝撃力で狼をへし折ってしまいます。
1つの群れを始末すると次の群れに向って体制を整えます。
ルミナは身の軽さとオニギリに切れ味の良さで、動きに隙を生じないように長剣を振るいます。
ズシャ！・・シュパッっていう感じです。
サンディとライムの姿は焚き火の炎の影になっているためか、狼は襲ってきません。
それでも、ルミナを狙う狼を火炎弾と十字弓の発射するボルトで1匹1匹倒していきます。

4人協力して渡り狼と死闘を繰り返している時、それは起こりました。
1匹の他の狼より巨大な狼が、ガォ！っとライムに飛び掛りました。焚き火を全く怖がりません。
そして、狼の体には、ライムの放ったボルトが2本も刺さっているのにです。
わぁ！っとライムは頭を抱えます。その声に皆がライム見ました。
ズシャ・・・重い音がしました。
ライムが恐る恐る頭を上げて前を見ると、子馬程の狼がリューイの投げた鋼の杖で岩に縫いつけれれています。
杖を手放したリューイに、また群れが襲い掛かります。
リューイは腰の鉈改を左手に持ちます。
（姫！分身する。コントロールよろしく！）

（了解！・・ターボ2でOKよ！）

「ターボ2！！」

リューイが叫びます。体の何処かで、カチッ！っとスイッチが入ったのを感じます。

「分身！！」

リューイが叫ぶと同時にリューイの姿がぶれていきます。そして・・2人に分かれました。別れた2人がまたぶれると・・・4人になりました。

4人のリューイが別々に鉈改を構えます。

走りこんできた狼を4人のリューイが1匹づつ対峙します。

1人のリューイは横薙ぎに狼を弾き飛ばし、別のリューイは狼の頭部に鉈改を叩き付けます。更に、別のリューイは・・・

サンディ達は開いた口が塞がりません。

それでも、襲ってくる狼を個別に倒していきます。

更に、4人のリューイが同時に4匹の狼を倒しました。そして、それ以降は襲ってくる狼はおりませんでした。

やっと、短いようで長い渡り狼の襲撃を退けたのです。

3人と4人のリューイは座り込んでしまいました。

すると、リューイの数が4人から2人に、2人から1人に数を減らしていきます。ブースト2の効果を姫が切ったのです。

3人はそんなリューイを不思議そうに見てました。

「リューイ！前から変わってると思ってたけど・・今のはなんなのよ！！」

何かサンディが怒ってますけど・・

「あぁ・・分身ね。・・体の移動速度を究極まで上げると出来るんだ。でも疲れるかえら余り使いたく無いんだけどね。」

「なるほど・・体術の一種か。4人に別れたのではなく、4人に

見えるように高速で動くのか・・考えただけでも疲れるな。」
ルミナが一人で納得してます。似たようなことが出来る人がいるのかも知れませんね。
「お姉ちゃん。ありがとう！」
ライムは感謝のハグです。内心リューイが一番嬉しかったりします。

「でも・・これどうするの？」
ライムは死屍累々の渡り狼の群れを指差します。
取り合えず一箇所に集めます。明日来る猟師さんに報告すれば、どうすればいいか教えてくれるかも知れません。

一難去って・・・

山に朝日が昇る頃、サンディ達は朝食の準備です。
昨夜は殆ど寝てないんですが、お腹は関係ありません。
焚き火に鍋を乗せて、とりあえずスープとお茶の準備です。

皆でモグモグ食べていると、岩陰からニョキっと猟師さんが首を出しました。
「おっ！いい時に来たみたいだな。」
獲物を担いできた猟師さんは早速ご相伴にあやかります。
更に、猟師さんが、獲物を担いできます。
「いやぁー今年は大漁だぜ。」
結構、罠に掛かる獣が多いみたいです。

そんな中。
「だれだー！これを殺ったのは！！」
頭領の大きな声が山々に木霊します。
岩陰を指差しながら此方に近づいてきます。余りの威圧感にライムは半ベソかいてます。
確か、そっちは・・例の狼よね？でもあれだけ怒るとは・・・ひょっとして山の神？
「そっちの狼なら俺達皆で殺ったけど・・」
「狼じゃぁなくて・・いや、狼だな・・とにかく、あのデッカイ狼を殺ったのはだれだ？」
リューイが恐る恐る手を上げます。
「おめえか・・頼みがある。あの毛皮を譲ってくれ！」
「え・・？？」

話を聞いてみると、狼の毛皮を身に着けていると、他の獣に襲わ

れないという言い伝えが猟師仲間にはあるのだそうです。
実際、頭領も擦り切れていますが、確かに狼の毛皮のようなものを着ています。
今まで、危険な獣に襲われなかったのもこのせいだ。と断言してますが・・
そんな訳で、昨夜の狼の襲撃で倒した狼の毛皮を貰いたい。中でも、一番大きな狼の毛皮は頭領自身に譲って欲しいということのようです。
特に、通常の狼より大型の渡り狼の毛皮は猟師達の間では垂涎の品なのだと教えて貰いました。
そして、あの巨大な狼に至っては、持っているだけでも尊敬されるのだそうです。

「いいよ。譲ってあげる。」
「ありがたい。何れこの礼は・・・」
「礼もいいよ。特に困ってないし・・。それより、あんなのが未だ来る可能性はある？」
「いや、今までの目撃例からはあの群れで終わりのはずだ。」

なら、問題ないです。また来たら大変ですけど、これで終了と聞いて少し安心してます。
「オラァ！狼の毛皮を剥ぐぞ！　こっちへ来い！！」
頭領が若い猟師さんに指示して、サッサと毛皮を剥いでいきます。
「な、何なんですか！このでかいの！！」
「おれんだ！傷を着けるなよ！！」
シュッ、シュッと短い音が連続して聞こえます。

次々と猟師達が獲物を担いでやってきます。
来た傍から頭領は毛皮を剥ぐ作業に参加させます。だって、数が数ですからね。

粗方毛皮を剥ぐと岩山の下の方に穴を掘って狼を投げ込みます。
そのままにしてると場合によっては別の獣がやって来ることがあるそうです。

いや～疲れた！って言ってる猟師さんに簡単な食事を提供します。
だって、もうお昼近いんです。野菜ごった煮に干し肉を入れた簡単なものですけど、皆さん美味しく頂いたようです。
後を頼む！って言いながら猟師さんは自分のパーティに戻っていきます。
また、赤い靴の４人になりました。

「薪を取って来ようか？水も残り少ないし・・」
そう言ってリューイは籠を担いで、森に入っていきました。
３人は、昨夜の来襲で破損した警報器の修理です。
それが終わると、森からルミナが数本の木を切ってきました。３m程度にそろえると横木を渡し、簡単な柵になるようにツルで縛り上げます。
「これを岩棚の前に置くから、危険だと思ったら後ろに隠れるんだ！」
「わかった。昨夜みたいな時だよね。」
ライムとサンディがちょうど入れるぐらいの大きさです。

リューイが戻ると少し早い夕食です。
今夜はリューイとライムが先番を勤めることになりました。
満天の星空の下、焚き火を前に、毛布に2人包まって、リューイの昔話にライムは耳を傾けます。
そんな健気な姿に天は味方をしたのでしょうか、サンディ達と交替しても特に何も起こりません。
今夜は静かに時が流れます。

夜がけると、また、猟師さん達が罠に掛かった獲物を担いできました。
やはり今年は獲物が多いようです。岩の窪みは獲物で溢れ雨露を防ぐ木の枝を押し上げています。

「おめえら、今夜が最後だな？・・今朝、罠を調べてたら４箇所も何かに襲われた後だった。他の連中が仕掛けたのもそんなのがあったそうだ。渡り狼とは違う。もっと大食らいなヤツだ。ここには、まだ狼の匂いが染み付いてるから大丈夫とは思うが、気を付けるに越したことはねぇ。」
「忠告ありがたく受け取っておく。せいぜい熊だとは思うが・・」
「いや！熊じゃねぇ・・俺には判る・・」
そう言いながら頭領は去っていきました。
頭領は猟師のプロです。そのプロが熊じゃないと言ったら・・それは何なの？って疑問を持ちましたが、この山にそんな獣がいるなんて聞いたこともありません。
でも、今夜は最後だから、盛大に焚き火をしてお肉を焼いて、お茶を飲みながらリューイのお話を聞こうと言うことになり、準備を始めます。

「・・というわけでみんな幸せにくらしました。めでたしめでたし。」
「なるほど・・罠に掛かった鶴を助けると、服を作ってくれるんだな・・覚えておこう。」
「お嫁さんになってくれるんだ。・・・お婿さんはどうしたら来るのかな？」
今夜は（鶴の恩返し）みたいですが、ちゃんと伝わったんですかね。疑問です。
「ねぇねぇ・・次は？」

ライムは面白かったのか、次のお話をリクエストしてます。
え～とね・・なんてリューイが考えていた時です。

「大変だ！！直ぐ来てくれ！」
猟師さんが息も絶え絶えに走りこんできました。
サンディが水を飲ませると少し落ち着いたのか、ぜいぜい言いながらも仲間が襲われていることを話はじめました。
「どっちだ！」
ルミナが叫びます。
「この方角だ。焚き火があるからそれが目印だ！」
ルミナが走り出そうとするのをサンディが止めます。
「みんなで行くわよ！」
知らせてくれた猟師さんに後を頼み、皆で走り始めます。
ライムが造った光球が周りを照らすので足元は万全です。

遠くに明かりが見えます。多分猟師さんが言った目印の焚き火でしょう。
近づくとバキバキと木が折れる音がします。
熊とは違う。ルミナは確信しました。

銅竜との戦い

猟師さん達の野宿する焚き火が遠くに見えるようになった時です。
周りの森の木が、バキバキと折れる音がしました。
熊なら精々ガサガサです。もっと大きな何かが居るようです。

【アクセル！】
ライムがルミナに加速の魔法をかけたようです。アクセルだと・・・大体2倍速ぐらいですかね。
「ありがとう。体が軽くなったぞ。」
ルミナが後ろ手に手を振り、オニギリを抜いて構えます。
リューイは鋼の杖を持って、恐る恐る焚き火に近づいていきました。

その時、森の中からヌ～っと大な顔が出てきました。
「「キャー！！」」
サンディとライムは思わず尻餅を着いてしまいました。だって、そこに現れたのは大きなトカゲだったからです。

「気をつけろ。トカゲのようだがこいつはドラゴン！銅竜【アンバードラゴン】だ！！」
ルミナが叫んでます。
素早い身のこなしでドラゴンを翻弄しながらオニギリで斬り付けますが、ドラゴンの鱗によって剣の刃が滑るみたいです。深く斬ることが出来ません。

リューイはというと、ターボで加速しつつ、鋼の杖で殴りつけているのですが、やはり有効打が少ないようです。
２人の邪魔にならない様に、サンディの魔法が炸裂しますが、元

々ドラゴンの鱗は魔法低減の効果を持っているため、余り役に立ちません。ライムの十字弓はドラゴンの鱗には強度不足・・・
はっきり言ってちょっと辛いなって言う状態です。

ドラゴンの武器は長い尻尾を鞭のように使った攻撃と、両手足の爪、そして大きな口から覗く牙です。
近づくと尻尾で牽制し、ちょっとでも隙を見せると口がガブンと来ます。
でも、ルミナとリューイが戦っている合間を見て、サンディ達は傷ついた猟師さん達を安全な場所まで運ぶことが出来ました。治療も、薬草で何とか成りそうです。

「お前の分身攻撃で何とか成らないのか？」
リューイは首を振ります。リューイの身体能力は１０倍です。でも、その力で重い鋼の杖を振るってるんですが・・鱗に跳ね返されているようです。鱗の弾力性が半端じゃありません。

段々とルミナのオニギリを振る様子に疲れが見え始めました。
スピードはそれなりに保っていますのでドラゴンの攻撃も何とか回避してますが、元々スタミナがあまり無いみたいです。

リューイは何を思ったか、鋼の杖を振りかぶり、槍のようにドラゴンへ投擲します。
なんとか、鱗を破って少し肉に食込んだみたいです。
すかさず、駆け寄ると、両手で杖を掴み叫びます。
【ボルト！！】
ドオオォン！！と耳をつんざく音が響きます。リューイの動力炉から過大電流がバチバチと流れていきます。
「ギャオォーー」
これには、ドラゴンと言えども耐えられなかったみたいです。

一声叫ぶと体を振り回してリューイを振り解きました。そして、突き刺さった鋼の杖を手でどうにか引き抜くと半分にへし折りました。

一瞬攻撃が緩んだと見たルミナがジャンプして傷口をオニギリで抉ります。

「グァァ」

あまりの痛さのためでしょうかドラゴンが】身を捻りました。

その動きでルミナが弾き飛ばされてしまいました。

次は、リミッターを切って、ターボ3で行くしかないかも・・・

なんて考えている時です。

（腰のバックから、懐中電灯みたいなものを取って！）

後ろ手で探すとそれらしきものがありました。早速取出します。

（左手で持って、親指の所にあるスイッチを指で捻る！）

姫の言うとおりに捻ってみました。

「ギュワァ・・・」

懐中電灯モドキの・・丁度光が出る所から、細い糸のような紫色の光が１ｍ位伸びました。中心はそれこそ１ｍｍにも満たないような強烈な光を放つ線ですが、周囲３ｃｍ位はボーっとした紫の光が染み出ているように見えます。

（プラズマ・ソードよ！長剣のように使えるから。でも、物凄く切れ味がいいから自分と味方を斬らないようにしてね！）

「ギュオン・・ギュオン・・」

プラズマ・ソードを振るたびに空気が電離される音が響きます。

剣を振りかざし、素早く周囲を確認します。

猟師さん達はサンディ達が後方に避難完了です。ルミナはサンディの肩を借りて撤退中です。

周囲には誰もいないみたいです。

【ターボ2！】

リューイは加速するとドラゴン目掛けてジャンプします。

そして、プラズマ・ソードを横薙ぎに一閃。

ドラゴンの背面に着地すると、目を閉じて残心です。

「ドサァ！」

ドラゴンが振り向こうとした時・・大きな音がしました。ゴロゴロと何かが森を転げます。

シュゥー・・と言う音も聞こえます。

リューイが残心を解いて、プラズマ・ソードを構えて後ろを見ると・・首から血を噴水のように噴出すドラゴンの姿がありました。

頭はどこかに転げたようです。

プラズマ・ソードのスイッチを戻すと紫色の光はすうっと懐中電灯モドキに吸い込まれていきます。

それを腰のカバンに詰め込むとみんなの所に戻っていきました。

3人は呆気に取られて見ていました。

光で物が切れるなんて聞いたこともありません。光の剣なんて伝説の中にもありません。

大体、伝説の剣なら、ルミナのオニギリがそうなんです。それが切れないものを簡単に切り裂くなんて・・・

「何とか成ったよ！」

「お姉ちゃん！！」

戻って報告するや否やライムのハグに危うく倒れそうになってます。

「あれは、なんだ！」

「あぁ・・あれね。魔道で作られたこの棒に【ボルト】の強力なヤツを閉じ込めるとあんな感じになるんだ。でも、【ボルト】１０回分以上の力を使うんで余りやりたくないんだけどね。」
適当に誤魔化します。
「私には・・使えんか。」
ルミナはガッカリしてます。
「リューイは・・見方だよね。」
サンディは念を押します。
「当たり前だろ。俺は、赤い靴のリューイだし！」
「そうだよね。」

騒ぎを聞きつけた頭領がやって来ました。
「何なんだ、この騒ぎは。トンでもないのが出たって聞いて来たが・・・！！」
サンディの指差した先を見て、頭領は仰天しました。
だって、そこには首の無いドラゴンが立っていたからです。

「これは・・銅竜じゃないか！・・・この山にはこんな物はいないはず・・」
どうやら、銅竜は此処から北のほうへ山５つ以上離れた所に生息しているみたいです。
「この間の渡り狼といい、今回の銅竜といい・・この山はおかしくなったかもしれん。」

ドラゴン・ハンターの印

銅竜との死闘を終えて、サンディ達は元の獲物の集積所に戻ります。
怪我をした猟師さん達は別の猟師さんがおぶって運びます。
頭領は別の仲間の元に引き返しました。明日は早く戻って来ると言ってました。

岩棚の所には知らせてくれた猟師さんが盛大に焚き火をしてました。
ライムはポットでお湯を沸かし、皆にお茶を入れてあげます。疲れた体にはお茶が一番ですからね。
お茶を飲んで一息入れたところで、交替で眠ろうとしましたが・・眠れません。眠ろうとして目を瞑ると、ドラゴンのグア！っと開けた口が飛び込んでくるんです。
ここは、１つ・・・と言うことで、リューイの昔話で紛らわせることになりました。

「昔、昔・・あるところに・・」
「何時も、昔だよね。そんでもって、あるところって何処なの？」
ライムの素朴な疑問ですが・・・それは、聞いてはいけない事なんですよ。
ほら、リューイの顔が引きつってますし、変な汗もかいてるでしょ。

「とにかく、昔なの！・・それで、俺も知らない位遠いところだから、あるところって言うんだよ。」
逆切れ寸前です。
「話を戻すね。・・・あるとことに、お父さんとお母さんと、お

兄さんと妹が住んでました。」

「今回はお爺さんじゃないのね。」

「うん。どうやら少し若い世代の話のようだ。」

と、こんな感じでお話が続きます。途中、ライムの質問攻撃や、ルミナとサンディの的外れな感想が入りますが、時間つぶしには丁度いいかも！です。

明け方近くになって「ヘンゼルとグレーテル」のお話は終わりましたが、サンディ達は白熱した議論を始めてました。

「最初に村に入るのはライムでいいな！」

「次は私で、ライムと村の中を撹乱すればいいのよね。」

「最後は、私がオニギリで一毛打尽！」

リューイはなんの作戦だろう？って聞いてます。

「魔女を全て倒したら、村の東半分は私が貰う！」

「西は私が貰うわ。」

「そしたら・・・ライムの分が無いじゃない！！」

どうやら村の襲撃の計画を練ってるみたいです。でも、何処の村？・・・3人の会話から少しずつ理由が判って来ました。

昔は家だったんだから、今は村ぐらいに発展してるはずです。それは、お菓子の村。悪い魔女が一杯住んでます。だから、村の魔女を全てやっつけてその後で美味しく村ごと食べる計画です。

しかし、どうやったらこんな展開になるのか不思議ですね。

ワイワイやってると何時の間にか朝になってます。

今日は狩猟の引き上げの日です。昼ごろには村人が獲物を運ぶために山に上がってきます。

サンディ達は残った食料で朝食をたっぷり作ると早めに食べることにしました。

後は、猟師さんに振舞います。

昨夜助けた猟師さん達が朝食を終えるころに頭領達が罠と獲物を担いで帰ってきました。
先ずは一服とお茶を飲んでましたが、朝食が余ってると聞いた途端お碗を持って焚き火の鍋に駆け寄ります。すっかり鍋は綺麗になりました。

「ほら。回収してきたぞ！」
頭領が銅竜の牙をリューイに投げてよこしました。
この牙だけでもいい値段で取引されるとのことです。更に、ギルドに行けば討伐の証拠とすることが出来ます。

「しかし、怪我は負ったが死んだ奴はいねえ。獲物も例年より多いし、何と言ってもこの渡り狼の毛皮は俺達猟師の宝物だ。全員に配っても余りある。いい仲間同士の取引に使えるってもんよ。」
頭領は、焚き火の傍に座って、年期の入ったパイプでタバコをプカリって吸ってます。
お茶の入ったお椀を片手に持って、見るからに終わったぞ！ッて感じに見えます。

リューイは曲がった鋼の杖を傍において隣に座ると、腰のバックからタバコを1本取出しました。
焚き火の薪を1本手に取ると、タバコの火を付けます。
スーー・・パ・・
思わず顔が綻びます。この世界に来る前、リューイは真面目に勉強と仕事をしてましたが、唯一、悪友との付き合いで覚えてしまったのがタバコです。
昨夜、懐中電灯モドキを掴んだ時に気が付いたみたいです。
それまで、吸いたいとも思ってみなかったんですが・・頭領のパイプを見て思い出したみたいです。
ジーッ！っとライムが睨んでますが、リューイは気が付きません。

でも1本でやめて吸殻を焚き火に放り込みました。

猟師さん達は忙しそうに獲物を木の棒に括りつけてます。罠も纏めて担ぎやすそうに縛りつけました。

リューイ達は特にすることはありません。空荷の背負い籠を見た頭領がこれを運んでくれって、獲物を幾つか籠に放り込ん出ます。

だいたい終わったかなって皆で周りを見渡していると村人が大勢岩棚まで上がってきました。

獲物を村人に託して、猟師さん達は罠を運びます。怪我をした猟師さんは仲間が肩を貸して移動開始です。

ゆっくりと岩山を降り、森に入り・・・ナナイ村に帰りました。

猟師さんの家の前で報酬を受取ります。

一旦家に戻ると、夕食にはまだ早い時間なのでギルドに向ってレベルが上がってないか調べてみることにしました。

でも、その前に、武器屋さんに寄ります。

「おめえ、この杖どうやったんだ？」

ドワーフのお爺さんが吃驚してます。

リューイが訳を話すと静かになりました。

「そりゃ・・仕方が無いの・・・2，3日待っとれ。」

曲がった葉がねの杖を持って奥に行ってしまいました。

ギルドに行くと何だか様子が変です。マスターが腕を組んで待ってました。

気にせずにカウンターのお姉さんにレベルアップの確認をします。

サンディとライムが1つ上がって、黒4つです。ルミナとリューイは上がりません。レベルが上がるほどなかなか上がらないんだそうです。ちょっと残念ですね。

左手のカウンターにリューイがドラゴンの牙を乗せた時です。
それまで腕組みしながらジッと此方を見ていたマスターが近づいて来ました。

「やっぱり、おめえか。銅竜とはいえ立派なドラゴンだ。しかし、おめえの武器は杖だったはず・・ドラゴンの鱗では弾かれてしまうんだが・・」
「おねえちゃんは光の剣を使ったんだよ！」
ライムが答えました。リューイは変な汗をかいてます。
「光の剣？・・まあいい。それでだ、レベルは上がらなかったがおめえらに御褒美だ。カードを貸しな。」
マスターが皆のカードを集めると奥に入っていきます。
しばらく待つとマスターが戻ってきました。
「ほらよ。カードの下をよく見ろ。赤の小さな宝石があるだろ、それがドラゴンを倒したチームの印だ。そして、これはおめえだ。赤の宝石と青の宝石が並んでる。これがドラゴン・ハンターの勲章だ。」
皆にカードを渡すと頑張れよ！って言いながら事務所に入っていきました。
これが、噂に聞くドラゴン・ハンターの印なのかとルミナは感動してます。
サンディ達は、そんな物かという感じです。経験の差がこうなるのでしょうか・・・とりあえずは皆喜んでます。
隣のカウンターに出したドラゴンの牙は銀貨１０枚になりました。
これで、杖の修理が出来るってリューイは喜んでます。

クロスボー改

ギルドで赤い靴のメンバーは、ドラゴン・ハンターの印を入れて貰いました。
家に帰ると、４人はテーブルに膝をついて眺めてます。

「昔、王都のギルドで一度だけ見せて貰った物と同じだ。」
「これって、役に立つの？」
「宿は割引いてくれる。武器や防具もだ。それと、他の冒険者に一目置かれる立場になることだ。」
「私が、見たときは、酒場の喧嘩だったかな。壮年の剣士がギルドカードを見せた途端、喧嘩が収まった。不思議に思った私は剣士を問い詰めると、これと同じカードの印があったんだ。」
「ふ～ん・・でも割引は魅力よね。」

でも、他の冒険者とは違うんだぞ！ってことがカードの違いで表されていることに優越感を持ってたりしてます。
まあ、このメンバーなら悪用はしないでしょうし、少しぐらい天狗になっててても問題は無いでしょう。

（しかし、すごい切味だったな。）
（物質を構成する原子をプラズマ化するから、なんでも一応切る事が出来るわ。）
（切れないのも有るってこと？）
（霊体は無理。それに再生能力が高いものも無理かなぁ・・）
（えぇ・・・オバケ居るの？）
（似たものは居るよ。）

ちょっと、ブルーになってます。でも、オバケみたいなのには、

ルミナが役に立つかも！と考え気が楽になってます。
ルミナ→オニギリ→オニが切れるなら、オバケもできるかも！
連想ゲームみたいな考えですけど・・以外とホントだったりするかもです。

「ちょっとリューイ聞いてるの？このカードなんか凄いものらしいわよ。」
「あぁ、聞いてるよ。でもね、良いことばかりじゃ無いんじゃないか？って考えてたんだ。」
「確かに、それはある。ギルドランクを無視した依頼が舞い込む可能性が高い。積極的にドラゴン・ハンターの印を表に出すのは控えるべきだろう。」
「そんな～・・割引なのに・・・」

そんなことでその日は終わりました。
数日後、リューイは杖を受取りに武器屋に向います。ライムが一緒です。
ライムは、十字弓をもう少し威力が上げられないか、相談したいっとリューイに付いてきました。
「こんにちは。」
「オォ・・おまえか。出来取るぞ。」
そう言ってドワーフのお爺さんが取出したものは・・なんか、前と変りない鋼の杖です。
「そう、ガッカリするな。・・握ってみろ。」
リューイは杖を握ってみます。
「うん・・あれ？・・太くなってる！」
「そうじゃ。芯の部分に魔法強化を施した材料を使っている。強度は数段上がっとるはずじゃ。」
「そんな感じだね。」
リューイはビュンビュンと杖を振る回してます。

「あのう・・・」
「うん、どうした？」
「これ、もっと威力が上がりませんか？」
「どれ、貸してみろ。」
ライムはお爺さんに十字弓を渡しました。
「フーム・・これは、初心者用か・・改造は無理じゃな。」
ライムはガッカリしてしまいました。だって、少し改造すれば威力はずっと上がると思っていたからです。
「まあ、そんなにガッカリすることもなかろうて。買い換えれば良いんじゃ。」
そう言って、２丁の弓を取出しました。

取出した弓は、速射性を重視したものと威力を重視したものです。片方は一度の操作でボルトを連続して３本発射できますし、もう片方はライムの弓より威力が１．５倍ほどあがっています。威力が増したことで、特殊なボルトの発射も可能です。
ライムは悩んでしまいました。
これから、もう直ぐ銀色の月です。無駄遣いは出来ません。

「これって、幾らぐらいなの？」
「１つ銀貨４枚だ。」
「この２つを改造して合体できる？」
ドワーフは出来ると答えます。そして、弓の値段は銀貨６枚。

「じゃあ、鋼の杖の修理費と弓の購入改造費合わせて銀貨１０枚・・・それにこれでどう？」
リューイはタバコとマッチを取出しました。
おじいさんはタバコとマッチをしばらく見つめてました。その用途を聞くと吃驚してます。

「魔法以外の火をつける道具か・・そしてパイプの要らないタバコとは・・・」
「良いじゃろう。明日取りに来い！」

家に帰るとサンディが心配そうにリューイ達を待ってました。
リューイは銀貨１０枚を持ってましたが、ライムは銀貨１枚で改造を依頼しようとしてましたから、多分お金が足りずにガッカリして帰ってくると思っていたんです。

「ただいまー！」
とライムは元気にドアを開けます。
「どうだったの？」
「うん。凄いのが出来るよ。改造できないから新しいのを買って改造するんだよ。」
「えぇ！・・そんなにお金持って無いじゃない！」
「お姉ちゃんが払ってくれた。それでも足りないみたいなんで、お姉ちゃんの持ってる物を足したんだよ。」
「リューイ。なにをあげたの？」
「あぁ・・タバコとマッチかな。ここには無いみたいで喜んでたよ。」
「ドラゴンの牙の代金も全部？」
「もう、何も残ってない。」

ホントにもう・・サンディは少し怒ってます。でも、今後の事を考えるとライムの武器強化は必要です。
銀色の月がほんとに始まる前に、もう少し依頼をこなさなければ、長い冬は越せないかも知れません。
明日からは地道に薬草取りをしなければね。と思ったりしてます。

次の日、昨日と同じようにリューイとライムの２人で仲良く武器

屋に向います。
「お爺ちゃん。できたー！」
「おぉ、出来取るぞ。ほれ、これじゃ。」
動滑車を使った複雑な弦の張り方ですが、使用方法は今までと変わりません。
簡単な、照門の前に細長い箱が有り此処にボルトを2個入れるのだそうです。連射は2個まで、しかし威力は十字弓の倍の性能だそうです。
しかも、威力が増したおかげで、特殊なボルトを打つ事が出来ます。
「この弓は・・そうだな、クロスボー改と名付けるか・・特殊弾を撃てるぞ。サービスで、炸裂弾を3個と煙幕弾2個をつけてやるわい。」
「ありがとう！」
2人で武器屋を出て家に帰ろうとした時です。
ギルドの石壁になにかの看板が出てました。
「当ギルドで　ドラゴン・ハンター　でました！」
宝くじ・・・そんな感じの看板です。

サンディ達のお婆さん

本格的な冬が訪れる前に、もう少し手許金を確保しとこう。ってことで、現在ギルドの依頼掲示板と睨めっこの最中です。
この前も、依頼件数はあまり多くはなかったんですが、今回はもっと少ないです。

「どれも、変りは無いわね。この辺から行こうか。」
「あれ？この依頼・・・お婆ちゃんからだよ！」

サンデイが掲示板の端から依頼書を取ろうとしたら、下の方の依頼書をみていたライムが何か気が付いたようです。
「ほら、村外れのお婆ちゃんからの依頼だよ。」
その依頼書は、冬支度の準備をして欲しい。報酬銀貨1枚。って書いてあります。
冬支度ってどんなのかなって思いましたが、銀貨1枚はこの種の依頼では破格です。
「これ、お願いしまーす。！」
サンディは受付のお姉さんに依頼書を持っていきました。

お婆ちゃんの家は村外れにあります。前に行った悲恋の洞窟のある森まで進み、手前にある小道を森伝いに歩くとお婆ちゃんの家が見えてきました。
お婆ちゃんは、サンディ達の父方のお婆ちゃんです。
でも、何故サンディ達と離れて暮らしているのでしょう。その理由は・・・

「お婆ちゃーん！」
小さな家に近づくとライムが大きな声でお婆ちゃんを呼びました。

すると、扉が開き、中から、お婆ちゃん？・・・お姉ちゃんが出てきました。

「おぉ、ライムか、大きくなったねぇ～。サンディもこの前来た時よりも確実に美人になってるよ。・・うん！私の遺伝だ。」

リューイの頭にはでっかい疑問文が浮んでます。でも、ルミナは直ぐに気が付きました。

サンディのお婆ちゃんはエルフ族なのです。ライムを抱き上げて振り回している時チラっと髪が乱れ尖った耳を見つけたからです。

でも、見かけはどう見ても２０代です。サンディのお母さんより遥かに若く見えます。

「まぁ、中に入れ。依頼の話はそれからだ。」

お婆ちゃんの家は１Ｋです。小さなテーブルに椅子２つ。そして傍らにはベッドが置いてあります。

４人を適当に座らせると、お婆ちゃんがお茶を入れてくれました。

「ところで、そちらの２人は誰だい。１人は私と同じエルフ族らしいが、もう１人は見かけない種族だねぇ。」

「リューイは、少し・・大分変ってるけど、人間だよ。」

「そうかい・・まぁ、ライムがそう言うなら人間ってことにしといてやるよ。」

（俺のことバレてる？）リューイは冷や汗をかいてます。

「それと、もう１人のお嬢さんもいるみたいだけど・・」

（私のこともバレてる？）姫様も指輪状態ですが冷や汗をかいてます。

「や～ねぇ・・ここ来たのは４人だけよ。」

「そうかい・・・そうしとこうかねぇ。」

久しぶりにお婆ちゃんに合えて嬉しかったのか、ライムが今まで

の冒険をお婆ちゃんに披露します。
お婆ちゃんは、そうかい、へ～、ほほーなんて言いながら聞いていました。

「リューイとやら。随分と孫が世話になったようだね。感謝するよ。」
「いえ、こちらこそ・・ですよ。」
「ところで、貴方は冒険者なんですよね。」
お婆ちゃんの姿は村の婦人が着るような長いスカートにエプロンではなく、ロングパンツにシャツ姿だったからです。
「よく判ったねぇ。なるべく判らないような格好をしてるつもりなんだが・・」
右手の剣ダコを見ればイヤでも判ります。とはいえません。
「ところで、依頼の件ですが・・・薪割りではないですよね。」
「あぁ、その話だね。実は、町のギルドからの依頼なんだが1人では、ちょっと心細いと思って、依頼したのさ。」
「依頼の依頼ですか・・・」
「違う。依頼の手伝いだ。下の森に灰色熊がいるらしい。その討伐だよ。灰色熊1匹なら私1人でもなんとかなるが、どうやら夜叉が一緒にいるようなんだ。夜叉の討伐をお願いしたいんだが、どうかね。」
夜叉ってなんだ？っていう顔をしているリューイに胴竜より小型のトカゲよ。ってルミナが教えてます。
「夜叉って強いんでしょ。できるかなぁ。」
「お前達はドラゴン・ハンターなんだろ。十分可能なはずさ。」

「さて、仕度をするから待っててておくれ。」
そう言うと、ベッド脇の木箱から鎖帷子を取出して着装します。
また、木箱をゴソゴソやってましたが、杖を1つ取出すとサンディに放り投げました。

「この前ダンジョンで見つけたやつだ。サンディにあげるよ。」
受取った杖をよく見ると、杖の天辺に大きな魔道石が金属製の爪でしっかり取り付けられてあります。
「これって・・この色だと、炎の杖！」
「そんな名前だったかしら・・・私が持っててもサンディなら使えるでしょ。」
たしかに魔法の杖ですから、サンディには使えます。しかも、この杖、魔力を使わずに火炎弾を撃てるのです。そして、火炎弾の魔法をこの杖を使って行うと、１つ上の魔法、火炎球を打てるのです。火炎球はその名の通り、火炎が球状になって飛んでゆく魔法で着弾すると数ｍぐらいの範囲で高価があるものです。
サンディはありがたく受取る事にしました。これで、赤い靴は結成当時より武器が全員上昇したことになります。

「さて、準備が出来たわよ。」
お婆ちゃんは、片手剣を腰の後ろに差し、金属性の銀の弓を持っています。

お婆ちゃんの家を出ると、みんなで森に向います。
リューイは生体レーダを起動しました。緑の点が森中に点在してますが、黄色や赤色はありません。
「結構人が森に入っているみたいだね。あっちこっちから気配がする。でも殺気を持ったのはいないな。」
「よく判るね。その気配だが、この頃この森に初心者が多く入るようになってね。煩くなったよ。」
「では、もっと奥か。悲恋の洞窟まで行って、そこで一休みしよう。」

ゾロゾロと悲恋の洞窟まで獣道を歩きます。たしかに、あっちこっちに人影を見るようになりました。

洞窟が何処にあるか判らずにうろうろしてるみたいです。

朽ちかけた神殿に到着して此処で一休みです。

「ここが、悲恋の洞窟か・・ライム位の時長老から聞いた昔話が本当だったとはな・・」

お婆ちゃんが考え深げに言いました。

「でも、お婆ちゃんはライム達と一緒に何で住まないの？」

「私が息子の嫁より若く見えるのは問題だろう。それに私は現役だから世界中を飛び回ってるしね。」

そんなもんかなぁ・・ってリューイは考えてますけど、見掛けは結構大事なんですよ。

一休みが終わった所で、再度リューイは生体レーダを起動します。探知範囲ギリギリのところに赤い点が集中してます。数匹ではありません。数十匹が一箇所に集まってます。

「見つけた！・・・数十匹いるぞ！！」

リューイ達はリューイの示した方向に歩き始めました。

灰色熊Ｖｓお婆ちゃん

リューイの後をぞろぞろと皆で歩いていきます。
お婆ちゃんとルミナとリューイだけなら枝渡りや猿飛びでヒョイヒョイて移動出来るんですが、サンディとライムはどちらかと言うと人間ですからそんな器用な真似は出来ません。
でも、リューイが先頭で、鋼の杖を使ってエイ！って潅木やツタを払ってくれるんで、そんなに疲れないですみます。

リューイが片手で止まれ！って合図をだします。
茂みからそっと覗くと、沢山の生き物がうじゃうじゃいます。

「手前の小さいのが羅刹、その後ろが夜叉だ。」
ルミナが教えてくれました。そう・・ってリューイは答えましたがあまり嬉しくありません。だって、小さいっていう羅刹がリューイサイズ、夜叉はリューイの１．５倍です。そんなのが２０匹ぐらい居るんですから、正直、銅竜１匹を相手にした方が楽なんじゃないかなって思ったりしてます。その上、何かの恐竜映画で見たラプトルとか言う恐竜にそっくりです。きっと獰猛何だろうなぁ、って思ったりしてます。
「そして、奥に居るあの熊が、サンディのお婆ちゃんの言う灰色熊だ！」
リューイは声を出しそうになって、慌てて口を押さえます。
灰色熊の大きさは、この間倒した銅竜程の大きさです。

（どうしようって言うんだ！このお婆ちゃんは！！）
（聞こえてるわよ・・さて、貴方の実力、見せて貰いましょうか！）

「サンディとライムは木登りが出来る？」
「「出来るよ。」」
「じゃぁ、この大きな木に登って、木の上から援護してくれない。俺と、ルミナは枝を飛びまわることが出来るから、ヒット・エンド・ランで一匹づつ始末するから。」
「それが一番かもな。」
ルミナも賛成してくれました。
それじゃあ、ってサンディ達が木にするするっと登っていきます。

枝が大きく張り出したところにサンディ達は辿り着いて、そこに立ち上がりました。背中を幹に押し付けているので体制が崩れる事もありません。
サンディは杖を握り締めて火炎球の詠唱を始めます。ライムはクロスボーにボルトをセットします。最初のボルトは2本とも炸裂弾です。
2人が枝に辿りついたことを確認したルミナとリューイは素早く枝渡り、猿飛びで枝に飛び移りました。

「ホォー・・結構連携が出来てるじゃないか。どれどれ私も準備するか・・」
お婆ちゃんも枝渡りをして更に遠くの枝に飛び移ります。

羅刹も夜叉も未だリューイ達に気が付いていないようです。
リューイはサンディ達に手を振ると、目標を腕で示します。
2人は頷くと、サンディは魔法を放ちます。そしてライムはクロスボーのトリガーを引きました。

【火炎球！】、「ばしゅ！、ばしゅ！」
羅刹の群れに火炎球が炸裂します。数体が衝撃で吹き飛ばされました。続けて「ドカン！、ドカン！」と炸裂弾が群れを引き裂きま

す。

「今だ！」

リューイは枝から飛び降りながら鋼の杖で夜叉を叩き潰します。その反動を利用して猿飛びで枝に緊急離脱、この繰り返しを続けていきます。

ルミナも同じようにオニギリを振るって羅刹を葬って行きます。

「へぇ～・・やりますねぇ。枝渡りはエルフだけかと思ったけど、出来る種族もあるんだねぇ。長生きはするものねぇ。」

遠くから、４人を見てるようです。

「さて、あっちが終わらない内にこっちも終わらせないとね。」

お婆ちゃんは枝から高く飛ぶと、灰色熊目掛けて銀の弓で矢を撃っていきます。全て当たりです。

たちまち１０本程の矢が灰色熊の背中に突き立ちますが、全く気にしてないようです。

「通常では、やはりダメね。貫通矢を使うしかないか。」

お婆ちゃんは銀の弓に魔法を込めると、銀の弓が変形していきます。・・それは、長弓に変ると周りに光の雫を散らしはじめました。

灰色熊の真上高く枝渡りを行います。その頂点近くで、銀の弓を引き絞ます。

【貫通矢・・２本！】

素早く呟くと矢を射掛けます。

「シュタ！、シュタ！」

灰色熊の体内深く矢が突き立ちます。矢羽がようやく体表面に出るくらい深く刺さってます。

「グワァッ！」って灰色熊が叫び上を見ます。

どうやらお婆ちゃんが原因だと認識したみたいです。

お婆ちゃんが降り立った木に体をぶつけて、お婆ちゃんを振り落

とそうとしますが、その前に次の枝に飛んでいきます。
【貫通矢・・2本！】
飛びながら次の攻撃です。

リューイ達は地道に一匹づつ片付けて行きます。
夜叉を粗方片付けて、今は羅刹を相手にしてるんですが・・素早すぎて中々攻撃が当たりません。
【アクセル！】
ルミナが枝に飛び移った一瞬の合間に、ライムは加速の呪文を放ちます。
「リューイお姉ちゃんには何故か効かないんだよね。」
「でも、リューイは自分で出来るから・・」
同士撃ちの危険性から攻撃を一時中断してるサンディ達です。
【ターボ1】
リューイも自分で何とかしたみたいです。みるみる2人の攻撃スピードが増し、羅刹の動きに追従していきます。
たちまち2匹の羅刹が倒されました。

（キュピーン！！）
リューイの頭に警報が鳴ります。
（なんだ！）
素早く生体レーダで周囲を確認します。
特に異常は無い様ですが、ふと、気が付きました。お婆ちゃんに動きがありません。さっきまで大きな生体反応の周りをヒョイヒョイと動いてたんですが・・・
（不味い！・・【ターボ2】）
ヒュンっとリューイの姿が消えました。

「此れまでかもね・・まだまだいけると思ってたんだけど・・・」
灰色熊の上を飛びまわって攻撃してたんですが、運悪く枯れ枝に

飛び移ってしまい、そのまま落下してしまいました。
落ちた衝撃で足を挫いたらしく立つ事も出来ません。
灰色熊には、十数本の貫通矢が体内深く突き立っているんですが、
此方に迫る動きを見るとあまり効いていないようです。
そのままの姿勢で銀の弓を引き絞ります。
シュタッ！っと熊の顔面に突き刺さりますがやはり効いてません。
お婆ちゃんは腰の片手剣を握ります。
（最後はこれでね。）

目の前に迫った灰色熊目掛けて片手剣を振り下ろします。
ドガ！って大きな音がしました。
お婆ちゃんの片手剣は地面にめり込んでます。
（？？）
何なの？っていう感じです。確かに目の前にいた灰色熊に片手剣を振り下ろしたはずです。
でも、剣は空を切って地面にめり込んでます。
（ドガ！って音がしたわよねぇ・・）
改めて周囲を眺めます。
するとそこには、鋼の杖を振り下ろしたリューイが立っていました。
（確か、あの娘はずっと向うにいたのよねぇ・・・でも此処に居る。しかも私が見えないくらいの速さで重い一撃を灰色熊に放ったと言うの・・）

「大丈夫？お婆ちゃん！」
「えぇ・・大丈夫よ。灰色熊はどうなったの？」
「今の一撃でやっつけたみたいだよ。」

（とんでもない娘だねぇ・・銀のドラゴン・ハンター伊達じゃないってことかねぇ）

「どれどれ・・・ほぉ～死んでるね。お見事！」
お婆ちゃんは銀の弓を杖代わりにして灰色熊を確認します。

「お婆ちゃん。リューイ。何処なのー！」
「此処だよー！」
サンディ達も羅刹を全て片付けたようです。大声で呼んでます。

お婆ちゃんの秘密

おおーい！ってサンディ達を呼びます。
ガサガサ・・っと音がして茂みからライムが顔を出します。葉っぱや小枝が金髪巻き毛に引っ掛かってるのは、まぁ・・お愛嬌って所かもしれません。
後からサンディ、ルミナが藪を避けてやってきます。

「お婆ちゃん！怪我したの？」
ライムは心配そうです。そんな孫娘に笑って答えるのもお婆ちゃんの仕事です。
「大丈夫だよ。ライムを見て元気になったから・・いちっ！」
でも、やはり痛いみたいです。
「待って！・・【ヒール！】」
ライムはお婆ちゃんに癒しの魔法を掛けました。
すーーーっと痛みが引いていきます。ちょっと杖無しで立ってみます。大丈夫みたいです。
「やはり、としかねぇ。枯れ枝に飛び移るなんて・・」

ルミナとサンディは灰色熊を杖でつんつんしながら調べてます。
「でかいな。銅竜と同じぐらいだぞ。」
「えぇ・・でも、この矢は？」
「あぁ、これか。魔法弓で強化された貫通矢だ。今ではあまり使える者がいないはずだが・・とんでもない婆さんだな。」
「でも、結局、リューイが殺ったのね。」
「間違いない。背骨を折られてる・・・と言うか、体の真ん中を鈍器で殴られたって感じだな。あの杖で強引にぶん殴ったに違いない。」

「皆おいでー！」
お婆ちゃんが呼んでいます。
サンディ達は急いで戻りました。
「灰色熊を倒したから、これで依頼は終了だよ。一旦家に戻りますか。ところで、お前達、夜叉と羅刹の換金部位は確保したかい？」
「うん。たっぷり手に入れたよ。」
ライムはバックを手でポンポンしました。
「では、ここにはもう用はないね。帰るとしますか。」

テクテクと5人は森の道？を戻って森の外に出ます。
森を迂回する小道を辿るとお婆ちゃんの小さな家に到着です。

早速、暖炉に火を起してポットを乗せるとお茶の準備をします。
お茶は何時ものようにライムが入れます。
とんでもない1日でしたが、暖かいお茶を飲むとそんな疲れも飛んでいきます。

「さて、そろそろ依頼の報酬を上げないとね。」
お婆ちゃんはそう言うと、服のポケットから銀貨を1枚取り出してサンディに渡しました。
「それでだね、今回の灰色熊なんだが・・倒したのは私でなくリューイだ。あの灰色熊の討伐報酬は銀貨２０枚。でも今持ち合わせがなくてねぇ・・だから、銀貨２０枚に相当するものを上げようと思うんだが・・」
「いいですよ。サンディが貰った杖だって、結構な値段でしょ。それでいいです。」
「そうかい・・・でもねぇ・・！そうだ、あれを上げよう。ちょっと待っててておくれ。」
お婆ちゃんはベッドの脇の木箱を開けると細い鎖を編みこんだ腕

輪を４つ取り出しました。
「これは、守りの腕輪だよ。付けると薄い魔法の防護幕が広がるんだ。そうだねぇ・・鎖帷子程度かねぇ。」
「それって、凄く高価なものだと思うのだが・・１個金貨１枚以上は確実だぞ！」
「でも、私には、此れが有るし・・」
お婆ちゃんは、着ている鎖帷子を指差します。その鎖帷子も魔法具ですから、確かに必要ないですけど・・
「それに、そんな魔道具は迷宮の深いところには結構あるんだよ。現に４つあるじゃろう。貰っとくれ。」
４人はありがたく受取りました。でも、リューイには必要ないんですよ。人間より遥かに頑丈・・いや柔軟ですからね。

「それじゃぁ、これでしばらくお別れじゃ。もし、王都のギルドに行く事があったら会う事もあるかも知れないね。あそこでは、「疾風エリア」と呼ばれてるから何かあれば呼んでおくれ。」
「またね。お婆ちゃん！」

４人はお婆ちゃんの家を出て村に帰って行きました。
「さて、帰ってみたいだね。どれ、私も帰るとするか。」
お婆ちゃんは家を出ると玄関に鍵を掛けます。すると・・・家は形を少しづつ変え始めました・・グニュグニュと形が変り、大きな岩に変化します。
「ｇｅ，ｓｌｆｏｐｎ！」
聞きなれない呪文を唱えると、お婆ちゃんの足元に魔方陣が発生し短く発光し始めます。
次の瞬間、お婆ちゃんの姿は消えてしまいました。

どこかの部屋
「どうであった？」

「確かに噂の通りの実力です。」
「我が国に組込むことは可能か？」
「無理でしょう。彼・・いえ彼女を御するものはこの世界には居らぬでしょう。」
「では、始末するのか？」
「それも、無理でしょう。」
「さすれば、どうする？」
「このままで良いかと。決して害には為らぬと思います。かえってこちらの助けになるかと。」
「害がないのであれば、対応は任せる。」
「はい。」

サンディ達は村に戻るとギルドに向います。
ギルドの換金カウンターのお爺さんに夜叉と羅刹の換金部位を渡します。
ライムのバックからボロボロと牙が転がり落ちるのを見たおじいさんは吃驚してます。
「これをどこで？」
「下の森の奥に一杯居たんだよ。」
「ちょっと、待っとれ。」
「？？」

しばらくすると、マスターがやって来ました。
「おぉ！おめえ達か。ところで、これなんだが・・この辺には居ない奴なんだ。」
マスターが夜叉と羅刹の牙を指で弾きながら言いました。
「お前達も気を付けた方がいい。この所、魔物の生息範囲が乱れている。今までの経験で判断したらとんでもないことになるぞ。」
「とりあえず、下の森には初心者注意の看板ぐらいは出すとするか。」

お爺さんから受取った換金額は銀貨5枚・・依頼額より大きいです。

家に帰り皆で楽しく夕食を食べ、暖かい暖炉の傍でリューイの昔話を聞かせて貰います。

次の日の朝。ナナイ村に今年初めての雪が降りました。

これから若草の季節まで、ナナイ村の村人は深い雪の中で暮らします。

ナナイ村の外へ

「行くぞ！」

「お姉ちゃん。がんばれ！」

雪国の楽しみといったら、スキーです・・いや、スノボーです。段々畑の道の雪を固めて畑の則面を曲線状に固めると丁度パイプを半分に切ったような形になります。畑をえっちらおっちら登ると、さあ、スノボーの始まりです。

リューイは少し心得もありましたし、姫のサポートもあります。たちまち村一番のスノボライダーになりました。

でも、なんでこの世界にスノボがあるのかって？

それは、とある冒険者が雪道を降りるのに、たまたま持っていた盾に乗ったという逸話があります。ですから、冒険者はスノボが出来る事が条件の一つになっているギルドもあるということです。

リューイの後をルミナが、その後をサンディが続きます。皆さん、まあまあの腕です。最後はライムですが、彼女はリュージュです。この方が凄いと思いますが、この村では評価の対象外です。

ひとしきり遊部と、皆さん雪だるまになってます。

家に帰り、お風呂に入るとお母さんの夕食が待ってます。

この前の大猪で猟師株を沢山貰ってますから、お肉がたっぷり入ったシチュウを美味しく頂きました。

お茶を飲んだ後は、暖炉の前に輪になってリューイの昔話が始まります。

「昔々、ある王国の王妃様に、赤ちゃんが生まれました。女の子です。そのお祝いに・・・・」

今夜は「眠りの森の美女」みたいですね。

聞いてる方は相変わらずみたいですけど・・・

「そうか！糸車の針を刺すと結婚出来るのだな・・・痛そうだな。」
「1人だと相手が早く見つかるのね・・でも、ライムが居るから・・」
「よかったねぇー」
お母さんも一緒に聞いています。そして、こんな話は聞いたことがない。この子は一体何処から来たの？って思ってたりしてます。
「そうだ！お母さん。私達ね、この間、お婆ちゃんと仕事をしたんだよ！」
「え！・・・お婆ちゃんが村に来たの？」
「うん。お婆ちゃんからの依頼がギルドにあったの。」
「何か言ってた？」
「何も！・・・でも仕事のお礼は貰ったよ。」
「そんなことあったんだ・・」
「そういえば、王都に来る事があればとか言ってたような気がする。」
サンディが話しに参加します。
「お婆ちゃんって冒険者だよね。強いの？」
お母さんはちょっと困ってしまいます。だって、とっても強いとは言えません。そんなこと言ったら、教えて貰うなんて言い出さないとも限りません。
お婆ちゃんは冒険者ですが、もう1つの顔を持ってます。それは、冒険者の監視です。
冒険者は強いのが普通です。でも、冒険者が悪事をしたら誰が止めるのでしょう。
普通では止められません。それを止めるのがお婆ちゃんの仕事なのです。

国内のギルドを巡回しながらマスターと情報を交換し必要な措置を行うのが本当の仕事なのです。
そう言う意味では、冒険者ＯＦ冒険者なのです。

「そうね・・・ルミナさんくらいかな？」
当たり障り無いところを告げます。
「いや、私よりは上だ！」
「でも、リューイに助けられてたわよ。」
え！って感じでリューイを見ます。この子はお婆ちゃんより強い？
信じられないって感じで見てます。実際強いです。多分この世界では最強でしょう。バックアップも居る事ですし・・

「ところで、お母さん。お願いがあるんですが・・・・」
おずおずとサンディが切り出しました。
「あら？なにかな？」
「若草の月になったら、私達・・・王都に行きたいんだけど・・」
「魔物の生態系が変化してるってマスターが言ってたわ。裏の山でも銅竜が出るくらいだし・・」
「お婆ちゃんも何かしてるようだけど、私達も自分達で調べたいのよ」

多分そんな事だろうとは思ってたけど・・・
でも、村を出るなら、町や都市に行くよりも王都の方が心配ないかもしれない。と思いました。
何てたって、この子達のお婆ちゃんがいますから。

「・・・良いわよ。このまま村に居る方がお母さんとしては、心配無いんだけど・・たまには外も見た方が良いのかも。でも、２つ約束して頂戴。」
「１つは、王都に行ったら、お婆ちゃんに最初にご挨拶する事。」

「もう1つは、毎年、銀色の月には村に帰る事。」
お母さんはサンディの前に指を1本づつ立てながら念を押します。

「判ったわ。約束する！」
「ヤッター！」
サンディ姉妹は大喜びです。
リューイもこの村しか知りませんので王都行きは嬉しい話です。
新しい情報が入ってくるかも知れません。
ルミナはその場では表情を変えませんでしたが、その夜、コンパクト型携帯通信機でロミナに王都へ行く事を得意げに報告してました。

次の日からは旅の支度です。王都まではずっと歩いていかなければなりません。馬車もあるんですが、４人分の馬車代はバカになりません。
急ぐ訳ではありませんし、とことこと歩いていく事にしました。
王都に続く街道は下の森に入る岐路を真直ぐに行けば出られます。
街道に出れば、旅人目当ての宿場町があります。ほぼ、1日程度歩けば次の宿場町に辿り着けるようになっているようです。
宿場町のギルドで依頼をこなしながら旅を続ければ旅費の心配も少なくなります。

どんよりとした雪を降らせる雲が少なくなり、お日様が顔を出す日が多くなった、ある日。
サンディ達は未だ雪が解けきれないでいる通りに出ました。
お母さんは家の扉の前で４人を見送ります。

「「「では、行ってきます！」」」
「銀色の月前には必ず帰るのよ。それと、お婆ちゃんに宜しくね。！」

村の十字路までは、振り返りながらお母さんに手を振ります。
十字路を右に曲がるとそこは、もう新たな冒険の入口です。

女の子の依頼　（1）

まだ雪が残る段々畑の道を４人はトコトコと降りていきます。
森への岐路に差し掛かった時、皆で振り返ると雪山の麓にナナイ村が小さく見えました。
これから半年以上、冒険の日々が待っています。
もう、後ろを振り向かずに、真直ぐ街道を目指して歩き出して行きます。

朝早く家を出て、ちょっと疲れたかな？って感じたころ、街道に出ました。
さすが街道と言うだけあって、石畳が敷き詰められています。でも、車のわだちがしっかりと石畳を刻んでいます。此処まで磨り減らすにはかなりの年月が使われたでしょう。そんな、由緒正しい街道です。

「この街道を右に進めば王都に行けるの。街道の出発点は王都だから、この道を辿っていけば間違うことなく王都に行けるのよ。」
サンディが物知り顔に話すのを3人は真剣に聞いています。
「後は、道伝いに歩いていけば、町にいけるはずよ。でも、その前に！」
ここでちょっと一休みです。
今回ライムは例のリュックを背負ってません。皆と一緒の布製のカバンを肩から下げてます。
カバンの中から、パンを取り出し軽いお食事です。最後に水筒のお茶を一口ゴクンと飲みました。

リューイは、鋼の杖の上部のワッカにはハンカチを縛り付け、石付きには木の栓を捻じ込んでいます。でないと、杖を付く度にカチ

ン、チャリンって音がするんです。
他の3人も武器意外に木の杖をつきながら歩きます。身長より少し短い位の杖ですが、3本を組み合わせて布を巻くと簡易テントが出来上がります。

山裾の小さな丘を登ると今日の目的地となる町が見えてきました。放牧場の脇を通り、小さな小川の石橋を渡ると辺りは一面の畑です。今年の耕作が始まったのか、畑の一部は耕された跡がありました。
畑の中を街道は真直ぐに続いています。
所々に休憩用の広場が設けられています。馬車が数台程度休めるような広場には、夏の日差しをさけるための数本の木立が立っていました。

そんな休憩所を2回程利用して最初の町に辿り着く事ができました。
まだ、夕方にも程遠い時間ですが今日は此処に一泊する予定です。

町の入口には、門番が数名待機しており、町へ入る旅人から税を徴収しているようです。
ルミナはそんなこと知らないよ。っていう風に通り抜けようとしました。

「ちょっと待て！・・困るなぁ、旅人の通行税は知ってるだろうに？」
「おいおい、何時から冒険者から通行税を取るようになったんだい。後ろの3人も冒険者なんだが・・」

そう言ってギルドカードを胸元から取り出します。
「・・・！そうならそうとカードを出してくれれば済むものを・・

後ろの3人も行っていいぞ！」
門番さんはブツブツ言いながらも通してくれました。
「所で、宿は何処だい。」
「宿屋なら、この道を真直ぐだ。」
ありがとうって門番さんに言いながら通りを真直ぐに歩いていきます。

「今のって・・」
「あぁ、通行税ね。旅人が町の入る時の税金だよ。それで、町の石塀や、街道の整備をしてるんだ。町に入れば、とりあえずは魔物や獣の心配をしないで済む。警護料みたいなものだと思ってる。」
「じゃぁ、冒険者から税金を取らないのは何故なの？」
「町が襲われた時に役立って貰いたいからさ。」
サンディとルミナの会話を、へ～そうなんだ。ってライムとリューイが聞いています。
旅はいろんな事が判るから勉強になるねーって 、後ろの2人が話してます。

門番さんの言った通り、宿は直ぐ見つかりました。酒瓶とベッドの絵の看板は結構目立ちます。
宿の1階は酒場です。まだ飲んでる人はいないみたいです。
カウンターの太ったおばさんのところへ行って宿の交渉です。

「こんにちは。4人いいですか？」
「あぁ、大丈夫だよ。1部屋ベッドが2つだから2部屋になるけどいいかね。」
「それでいいです。」
「じゃぁ、朝飯込みで、1人銅貨30枚だ。」
ライムが4人分の代金を払います。
「部屋は2階だ。これが鍵だよ。」

おばさんはライムに２つの鍵を渡します。
「その前にギルドに行って来ます。あと、夕飯を食べられる所はありませんか？」
「ここで良ければ、１人１０エンタで食べさせるけど・・」
「では、お願いします。」
ライムが布のカバンからお財布代わりの皮袋を開けて銅貨４０枚を支払いました。

ギルドは何処でも目立つ所にあります。流石、町のギルドだけあってナナイ村よりも大きな石造りです。
ギルドの扉を開いて中に入ると、中の構成はあまり変わりません。
中央に広間があって、テーブルと椅子が置いてあります。壁際には依頼板がありいろんな依頼書が張ってあるようです。広間の奥にはカウンターがありギルドのお姉さんがにこにこしながら４人を見てます。

「いらっしゃいませ。旅の冒険者ですね。カードを拝見しますので皆さん御提示願います。」
４人は胸元からそれぞれのギルドカードを取り出してお姉さんに渡しました。
お姉さんは４枚のカードを受取ると、何やら大きな日記帳みたいなものに書き込んでいます。
「・・・・！・！！・これ、君達のよね。」
４人は一斉に頷きました。
「その若さで・・このランクで・・・。今は緊急の依頼はありません。発生した時は真っ先に連絡したいんですが、宿は何処でしょうか？」
サンディが場所を教えます。あぁ・・あそこですねって納得してくれました。
「最後に、この町を出る時に一度立ち寄ってくださいね。」

そう言って４人のギルドカードを返してくれました。

４人は掲示板に行って、適当な依頼を探します。旅はまだ続くのですから、短期、高額、簡単の３拍子が揃ったものを見つける必要があります。

「これなんか、どうかな？」

リューイが見つけたものは、猪退治です。畑を荒らして困ってるみたいですね。

「これも、いいかも！」

サンディが見つけたのは、薬草採取です。でも薬草の周りに狼が沢山いるので取る事が出来ないようです。

「どれどれ、どちらの報酬が高いんだ・・・猪か。じゃぁ決まりだな。」

その時、小さな女の子がギルドに入って来ました。

カウンターまでとことこと歩いていくと、爪先立ちして、お姉さんにお話してます。

「まだ、取ってきてくれる人は見つかりませんか？」

「まだ、ちょっとね。狼が沢山いる割には報酬が安いのかもね。」

「そうですか・・でもそれ以上は・・」

女の子はしょんぼりしながら帰っていきました。

「何か，訳ありのようね。」

「お姉ちゃん。聞いてきてよ。」

サンディに残りの２人も頷きます。

サンディはカウンターのおねえさんの所に行って訳を聞きました。

「あの子のお母さんが病気なんです。でもその病気には特効薬があるんですけど、あいにく町には切らしてまして・・・それで、依頼を出したんですけど、薬草の周りが何時の間にか狼の縄張りにな

ってるらしく、誰も取りに行かないんです。」
「お姉ちゃん可哀相だよ。」
「健気な子供だ。」
反応はいろいろですが、此処はひとつ頑張ろうかって感じです。
「その依頼。赤い靴が受けます！」
「エッ！・・でもあなた達が・・・いえ！お願いします。」

早速お姉さんから場所を教えて貰い、明日早朝に出かけることにしました。

女の子の依頼　（2）

ギルドから宿に戻ると夕食です。
根菜と燻製肉のごった煮でしたが、今日一日歩いて来た４人には、とても美味しく感じられました。
でも、此処は酒場も一緒なんですよね。

「おい、ネエちゃん達こっちに来てお酌でもしねえか？」
そんな野次があっちこっちから聞こえてきますが、４人は完全に無視してます。

「おいおい、何時まで待たせるんでぃ。おれはな、ドラゴン・ハンターのガイル様だ。冒険者なら敬意を示めせってんだ！」
「そんな大そうなものなら、証拠を見せな！」
あまりにも煩いのでルミナがギロって見ながら言いました。
「あ～ん？俺の言葉じゃぁ信用できねえってか・・・此れが証拠だ！」
いきなりルミナ目掛けて鉄拳が飛んできましたが、リューイにあっさりと拳が掴まれてしまいました。
「へ～ぇ。大した事無いのね。」
ルミナがそういった途端に、仲間の男が剣を抜いてリューイに打ちかかります。
その剣もリューイがあっさりと指２本で摘んだりしてます。
そして、拳の方はギュッと軽く握りホイって手放します。剣の方は指で少し捻りました。もう鞘には戻らないでしょう。
２人は覚えてろって言葉を浴びせると何処かに走り去りました。

食事の続きをしてると、数人の男達が入ってきました。
「此処に、ドラゴン・ハンターを愚弄した奴がいると聞いてきた

んだが・・」
その言葉に、周囲で飲んでいた男達がサンディ達を指差します。
「お前らか？ドラゴン・ハンターがどういう位置にいるか判っているのか？」
「判ってないけど・・あいつ等本当にドラゴン・ハンターなの？」
「彼らがそう言っているし、ギルドも今日ドラゴン・ハンターの一行が来たと言っている。間違いないだろう。」
「じゃぁ、ドラゴン・ハンターのライセンスはどういうものか見たことあるの？」
「知ってるに決まってる。カードの下の宝石だ。カードは偽造できねえから、カードで直ぐに判るはずだ。」
「じゃぁ、これは？」
ルミナはリューイにおいでおいでをすると、近寄ったリューイの胸の中からギルドカードを取り出します。
そして、男達の目の前にひらひらと・・・

途端に男達の顔色が変わりました。
「これは、ドラゴン・ハンターの宝石。そしてドラゴンの討伐章・・・間違いない！」
「失礼した。・・おい、あの2人組みを牢に入れとけ、とんでもない偽証だ。唯では出せん。」

大盛りに盛られたごった煮をやっと食べ終えると今日はもうする事がありません。
早々と就寝です。疲れた体は直ぐに夢の世界に旅立たせてくれました。

次の日の朝早く、町から北の山に向いました。
宿屋のおばさんに簡単ながらもお弁当を作ってもらいご機嫌です。

「ねぇ、薬草って何時もの薬草？」
「え～とね。・・・ケアやジギタじゃないわね。・・クアル草って書いてある。」
「どんなの？」
「待ってね・・膝ぐらいの高さで、茎は2本、葉は4箇所突起がある。って書いてあるわ。」

それだけ特徴があるんでしたら直ぐに判りますよね。
山道に入ると、ルミナとリューイに周囲を監視してもらい、サンディ姉妹はクアル草探しです。
特徴がある割には見つけづらいのでしょうか・・・でも、きのこなんかも、最初の1個は中々見つからないんですが、1個見つけると次々に見つけることが出来るんです。きっと同じなんですね。

「有った！」
ライムが飛びつくようにクアル草へ走りこむと同時に、ガァウ！っと何かがライムに飛びかかりました。
ブン！ドコッ！・・バタ！
リューイの鋼の杖が一旋すると飛びついた何かが弾き飛ばされ近くの立ち木に叩きつけられました。
「狼だ。灰色じゃないが、群れがいるぞ！」
飛んでった物体Xをジッと見てたルミナは皆に注意します。

バウ・・ガウ・・ガウ・・
4人の周りに狼が段々と増えていきます。
「殺ル視かなさそうだぞ！」
ルミナはオニギリを構えます。
近くの大木を背にサンディ姉妹がバックアップ。前衛がリューイとルミナで防戦態勢です。

ガウ！・・シュパッ！
飛びかかる狼をオニギリが両断します。
バウ！・・ドン！
横殴りにリューイの杖が当たります。

フュン・・グアァ！
ライムのクロスボー改のボルトが狼の顔面を直撃しました。
狼は少しづつ後ろに下がると、キャンキャン・・鳴きながら茂みの奥に逃げていきます。

「確かに、狼の群れが居るって言ってたけど・・ほんとに居たのね。」
サンディがそう言って辺りを見ると・・有る、有るほんとに一杯ありました。
とりあえず、両手に一杯取ってカバンに詰め込みます。
ついでに狼の牙も集めます。大事な換金材料ですからね。
そして、サッサと帰りました。また、狼が来るかも知れませんからね。

山道を降りて麓に出てきました。
この辺は眺めが良いです。遠くに町が見えますが、大分小さく見えます。
ライムのお腹が、グーって可愛らしく鳴いたのを合図に昼食となりました。
葉っぱとハムを挟んだパンを食べ、水筒のお水を飲んでる時でした。

「・・・たすけて・・・」っと遠くで聞こえます。
ルミナは慌てて、コンパクト通信機をパタンと閉じてカバンに入

れました。妹に景色でも見せてのかも知れません。
リューイは生体レーダで周囲を探ります。
「追われてるみたいだ。」
杖で右側を指しました。
林の中から、誰かが飛び出しました。

「助けてくれー！」
叫びながら、転がるように斜面を降りてきます。
グオオォォー！
林の木々を押し倒しながら大きな猪が飛び出しました。
背中に矢が2本刺さってます。
どうやら返り討ちにあってるみたいですね。

「こっちだ！」
ルミナが男に叫びます。男は気付いたらしく、こちらに駆けて来ました。
大猪も一緒に追いかけてきました。

サンディとライムは攻撃したくても男が邪魔で出来ません。
ルミナはオニギリを上段に構えた時です。

リューイが男が躓いて前のめりになった僅かの隙を突いて、鋼の杖を投げつけました。
ビュ―ン・・・・ドス！！
ドオォォン！！
猪の頭を突き破り、杖の重量とスピードに負けた猪の巨体が一瞬浮き上がり転倒しました。
土煙が上がってます。

サンディ達の頭の後ろには大きな汗がタラリと落ちてます。

「あの杖を真直ぐ投げるか？・・・普通出来ないぞ！」
「あの時の猪よりは小さいね。」
「お姉ちゃん。凄い！」
お三方の反応にリューイはちょっと照れてます。

「おめえさんが、やったのか？・・ありがたや、ありがたや・・」
助かった男に拝まれてしまいました。
男は散々４人にお礼を言って町に帰って行きます。
でも、リューイ達は、４人で猪の解体です。内臓はリューイが掘った穴に埋めました。獣が来るかも知れませんからね。
リューイの杖に両足を結び着けて、ヨイショっと担ぎます。
そのまま、とことこと町に戻りました。

町の肉屋さんに行きました。
「あのう・・・これ、買ってくれませんか？」
サンディがカウンター越しに話かけます。
「どれ？」
肉屋さんは秤を取り出しました。
ドン！
カウンターの前にリューイが大猪を下ろしました。
「えぇー！！」
肉屋さんが吃驚してます。だって、可愛らしい４人組みで取れるものはウサギぐらいだと思ってたからです。
「買い取れませんか？」
「買い取れる！・・・銀貨１０枚でどうだ！」
「いいですよ。」
直ぐにお肉屋さんはお金を払います。だって、どう見ても銀貨１５枚以上はするのです。ちょっと低めに言ったのですが、それで相手は承諾したのです。気が変らぬうちに・・・です。

その足で、ギルドです。
ギルドのお姉さんに、クアル草を渡しました。
「量が判らなかったので、この位で・・・」
「そんなには、要らなかったのよ。でも助かったわ。ありがとう。・・はい。これが報酬よ。」

「これは、あの女の子へのプレゼントということで・・・」
「でも、依頼は依頼だわ。」
「では、依頼されなかったことで・・・」
「そしたら、あなた達は1日ただ働きになるでしょ。」
「別の報酬がありましたので・・これ、換金してください。」
サンディは狼の牙を大量にカウンターに乗せました。
「ほんとに狼の棲家だったのね。・・・はい。これが代金の銀貨3枚よ。」
「これでいいです。では女の子によろしく。」

4人がギルドを出て直ぐ、男がギルドに飛び込んできました。
「あの大猪を杖一振りで倒した奴がいるぞ。女4人で、その猪は肉屋に吊るされてる！」
「何だと！」
ギルドの冒険者がぞろぞろと飛び出して行きました。

「別の報酬ね・・・確かに。・・でも、あれも討伐依頼があったはず。後で届けましょう・・」

次の町へ

宿屋に帰ると、おばさんに宿泊代を払って、もう一晩厄介になります。

早々と夕食を取っていると、ギルドのお姉さんが女の子を連れて入ってきました。

「あ！いたいた。この子がね。どうしてもお礼を言いたいって言うもんだからつれて来たんだけど・・」

「どうも、ありがとうございます。早速、お母さんに飲ませることが出来ました。見る見る熱も下がって・・・本当にありがとうございました。」

「そんなにお礼を言われると困るかな。・・・よかったね。良くなって。」

皆うんうんと頷いてます。

「そうだ！貴方達が倒した猪なんだけど・・あれ、討伐依頼の対象なの。それで、これはその報酬よ。討伐の証拠が欲しかったけど、第3者の証言と肉屋のお肉で良しとします。」

ライムが受取った紙包みには銀貨6枚が入っていました。皆さんラッキー！って顔してます。

「ではこれで・・さっ帰るわよ。」

お姉さんは、小さな女の子を連れて帰えりました。

「お母さん元気になって良かったね。」

「うん。一石二鳥だね。」

「なにそれ？ライム判んないよ。」

「んーとね。鳥を取ろうと投げた石が、狙った鳥に当たった後で別の鳥にも当たったんだ。それで、一石二鳥って言うんだよ。」

「へー・・偶然って怖いね。」

そんな話をしながら夕食を終え、早々とお休みです。

「ここだ。ここにいるってギルドのねえちゃんが言ってたぞ！」

「おぉい、酒だ。・・それと此処にとんでもなく強い冒険者が居るって聞いて来たんだが？」

「冒険者なら４人組みが泊まってるよ。明日発つらしく早々とお休みだよ。」

「うりゃ～・・遅かったか。どうすりゃ強くなれるか聞きたかったんがなぁ・・」

「おめえの頭じゃ、聞くだけ無駄じゃろ。」

そうだそうだ、うるせいや・・・っと酒が入った冒険者が騒いでいます。

そんな喧騒など気にせずにサンディ達は眠っています。

もっとも、リューイだけは起きています。だって、睡眠不要に改造されてますからね。

（ねえ、姫さん。ここに俺がいる理由って何なんだ？・・その内、判るって言ってたけど、まるで判んないぞ！）

（う～～ん・・・説明するのが難しいので、もう少し待って！でも、凄く切実な問題なんだよ。こんな世界が幾つもそのせいで滅びているの。今回は貴方が居るんで直接介入してるんだけど・・）

（それと、姫さんの部下達はとりあえず大人しいの？）

（今んとこはね。・・でも、虎視眈々と出番を狙ってるわ。機関部の連中も何時の間にか小惑星に核パルスエンジン仕掛けたみたいだし・・主砲部隊もメガ粒子砲の出力を制御するために徹夜続きでシュミレーション繰り返してるし・・楽観できない状態ってとこね。）

（苦労してるね。将軍は大丈夫なの？）

（入院してる。頭痛に胃潰瘍に顎がはずれたみたいなの・・。）

（たいへんだねえ・・）

こんな話をしながら長い夜を過ごしてます。

次の日、朝早く宿を出ます。また、おばさんにお弁当を貰って満足そうな顔をしてます。

その足で、ギルドに行って、町を出る手続きをしました。

「そう。行っちゃうのね・・・残念ねぇ。」

そんな事をお姉さんは言ってましたが、それはそちらの事情ってことです。

町の門で門番さんにお別れを言って、次の町に向かいます。

まだ、若草の月が始まったばかりです。遠くの山はまだ雪が沢山残ってます。

朝日が昇るまでは大分時間が有ります。皆、マントの前を合わせて少しでも寒さを防ぎます。

街道を行く旅人はサンディ達だけです。

街道を歩き出して、最初の休憩所に着くころにようやくお日様が昇りました。

水筒のお水を飲んでいると、沢山の馬車が通ります。

その内の何台かは、休憩所で一息入れるみたいです。

サンディ達が座っているベンチみたいな岩の前にも1台の馬車が止まりました。

太ったおじさんが降りて来ました。

「やぁ、お嬢さん達は旅人かい。こんな朝早くからご苦労さんだね。」

「のんびり歩くんで早く町を出たんです。おじさん達は商人なの？」

「そうだよ。村や町を回る行商さ。昨夜は野宿さ、宿代もバカにならないからね。」

そんな事を言いながら、広場のはずれのほうにコンロを降ろしてこれから朝食のようです。
サンディ達は商人と別れて、街道を歩き出しました。

次の休憩所は小川の近くにありました。
ここで、お弁当です。休憩所は、歩きの旅人に丁度良い間隔で設えてあるようです。
すると、次の休憩所で休むと、その先に町が見えるはずですよね。
昼食を終えて街道を歩き出した途端、とんでもないものが眼に入りました。
橋が壊れえています。
川下に歩いて橋を探そうと思ったんですが、丁度良い物を見つけました。
川岸に大きな立ち木があるんです。川幅は約１０ｍ程度。これなら、猿飛びで向こう岸に渡れます。
まず、サンディをお姫様抱っこしてピョンと立ち木の枝に飛び上がると向こう岸にヒョイって猿飛びします。
次に体重を重力制御で軽くして走り幅跳びみたいに一気に川を跳び越します。
そしたら次はライムの番です。同じ様にピョン、ヒョイって対岸に渡ります。ルミナは枝渡りの要領で同じ様に川を飛び越えました。
・・でも、行商のおじさんはどうするのでしょうね。

街道を余所見しながら歩いていきます。
でも、一面畑であまり、珍しいものはありません。遠くでお百姓さんが牛で畑を鋤いてるぐらいです。
てくてく歩くとまた休憩所です。遠くに次の町が見えてきました。
ここで、しばらく休憩を取ると、また歩き出します。
今度は、町が見えるためなんとなく元気が出ます。

やっと町に着くと、前と同じように門番の人にギルドカードを見せて中に入ります。
とりあえずギルドに向いました。
ギルドで登録を済ませます。そして、街道の橋が壊れている事を報告します。
橋の修理はギルドの仕事です。依頼を出して誰かにやってもらうのです。
依頼板を見て、明日の仕事を探します。

「これなんか、どうだ。・・護衛求む。銀貨２０枚。サムズ市まで。食事は当方持ち。」
「いいわね。でも用心棒って？」
「金目の商品が多いと商人は護衛を雇うんだ。基本は馬車だから、歩かないで済むぞ。」
「ライムはそれにしたいな。１日歩くと、疲れちゃうんだもの・・」

という訳で、カウンターのお姉さんに詳細を確認します。
明日の朝、さっき入った門と反対の門の所に集合ということです。
商人は１人でなく、１０台の馬車が連れ立った商隊ということでした。もちろん、護衛の４人は馬車に乗る事が可能だそうです。
早速宿屋に行き、後はゆっくりお休みです。

馬車の旅

次の日の朝早く、町の西側の門に出かけます。
今日からサムズ市まで移動する商隊の護衛を行うためです。
門の近くには大勢の人達が集まっています。
何人かで歩き出すもの、馬車を走らせるもの、様々な人たちがいました。

「あれじゃない！」
サンディが沢山の馬車が集まった一角を指差しました。
ルミナがスタスタとそこに歩いていきました。

「私達は商隊の護衛をするために来たのだが、依頼元は貴方達でよいのか？」
「あぁ、ここでいいよ！」

恰幅のいいおばさんが馬車を降りてきました。
「お前さん、1人かい？」
「いいや、4人だ。」
ルミナはリューイ達に手を振って合図します。
3人はルミナの所に駆け寄ると、おばさんに挨拶をしました。

「へ～ぇ・・女の子ばかりの冒険者かい。戦士が2、魔法使いが1、補助が1・・・仲間としては問題無しだねぇ。」
「それでは、よろしくお願いするよ。ドルコイ、サイネスちょっとおいで！」
おばさんは大声で名前を呼びました。

「なんだ。サミーネ。」

太ったおじさんとやせたおじさんがやってきました。
「サムズまで護衛をしてくれるお嬢さん達だ。」

サミーネと呼ばれたおばさんは、リューイ達の紹介をしてくれました。
商隊は、３家族で編成されており、サミーネおばさんが取仕切ってるみたいです。
１０台の馬車に夫婦、息子や娘達が分乗し、馬車を動かしているようです。

「それじゃぁ、出発したいが・・・貴方達をどの馬車に乗せるかねぇ・・・」
サミーネおばさんが迷っているようなので、ルミナが経験から割り振ります。
リューイが先頭、ルミナが最後尾、サンディとライムは一緒に真ん中です。

先頭馬車はサミーネおばさんが手綱を取っています。御者台にリューイは一緒に座りました。
高いところなので周りが良く見えます。

「みんな！・・出発するよ！！」
御者台に立ち上がり大声で後ろの馬車におばさんが叫びます。
そして、石畳の街道をゴトゴトと馬車は走り出しました。

街道を歩いている時は気になりませんでしたが、街道の道幅が所々広くなっています。
不思議そうに見ているリューイに、あれは馬車がすれ違う場所だよって、おばさんが教えてくれました。
馬車は徒歩で歩く旅人の２倍程度の速度で進んでいるようです。

朝早く出発した徒歩の旅人を追い抜いて行きます。途中の休憩所も２つ素通りします。
そして、３つ目の休息所で昼食になりました。
「こんな食事で申し訳ありません・・」
ライムより少し年上の女の子がスープ鍋と硬いパンを持ってきてくれました。
「上等だよ。では、頂こうかな。」
ルミナはそう言って、バックの中からお椀を取り出すと、鍋からお玉でスープを掬います。
皆も同じようにスープを貰い、パンを頂きました。

「何も出ないといいね。」
「いや、その内なにかありそうだ。・・銀貨２０枚はこの種の依頼では破格なんだ。街道の情報を知って慌てて依頼したみたいだ。」
「何があるの？」
「そこまでは判らん・・でも商人達の情報は確かだ。」

そんなことを話しながら昼食を食べています。
リューイが休憩所の周りを見ると遠くに村が見えました。でも、この速度で進むと今日の宿泊場所は別の所になりそうです。

「さぁ、出かけるよ！」
サミーネおばさんの声でまた馬車は街道を走り出しました。
街道をひたすら西に向います。さっき見た村に入りましたが、村の中央を走り抜けます。
次の休憩所も素通りです。そして村を出て２つ目の休憩所で馬車は止まりました。
休憩所の近くには泉があり、少しはなれていますが林もあります。

「今日は、ここで野宿だよ。女の子は水を汲みな。男の子は焚き木を取って来な！」
サンディ達は食事のお手伝いです。リューイとルミナはリューイ達より年下の男の子達と林に焚き木を取りに行きました。
リューイ達が戻るころには野菜と干し肉のごった煮が出来上がってました。
取って来た焚き木を焚き火の脇にどかっと置いて、夕食です。

その夜は、リューイ達と3家族の旦那さん達が交代で見張りを行います。旦那さん達とリューイが最初の番をして夜遅くにルミナ達と交替します。
基本、リューイは眠らなくても問題ないので、ルミナ達と交替した後でも目を閉じて寝たふりをしてます。

「リューイお姉ちゃんのお話が無いとつまんない・・・」
「そうだな・・・今後の為になると何時も聞いていたんだが・・」
「でも、リューイの話って、一度も聞いたことが無いのよ。一度ぐらい聞いた話が出てくるかなって思ってるんだけど・・」
それはそうです。だって、リューイのお話はこの世界のお話では有りません。でも、理解出来てるってことは不思議ですね。
そんな時です。

カサ・・カサカサ・・
何かが動く音がします。
リューイは目を開けると素早く生体レーダで周囲を確認します。
目の前に展開された半透明のレーダ画面に黄色の点が近づいてくるのがわかります。
黄色は、まだこちらに敵意を持たない印です。
サンディ姉妹は臨戦態勢ですが、ルミナはまだオニギリを持ってもいません。

「どうした？」
ルミナが杖を持ってキョロキョロと辺りを見ているサンディに声をかけました。
「何かいる！・・でも何処なのかわかんない！！」
「大丈夫だ。敵意は感じられない・・・」
ルミナも判っているようです。攻撃を仕掛けられない限り、こちらから攻撃する必要は有りませんからね。

翌朝、野宿した周囲を確認すると、犬の足跡が見つかりました。
近くの村からでも夜になって逃げ出して来たのかも知れませんね。

朝食をテキパキと取ってから出発です。昨日取って来た焚き木の残りは馬車の下にある網に乗せてあります。焚き木が取れない場所で夜を明かすための準備みたいです。
昨日と同じ様に、休憩所を飛ばしながら進みます。

そして、お昼は、途中の村で取りました。
４人の昼食代はサミーネおばさんが払いました。食事込みの護衛報酬の１つですからね。
昼食休憩を利用してギルドに行って情報収集です。

ナナイ村と同じ様に小さいながらも石造りのギルドです。
カウンターのお姉さんに、街道の情報を聞くと、この村と次の町の間で盗賊騒ぎがあったとか、もっと先では魔物が積荷を奪ったとか、・・色々話を聞くことが出来ました。
いよいよ、護衛の本領を発揮せねばならないのかも知れません。
そんな話を聞かされたので、帰る途中の武器屋で炸裂ボルトを５本購入しました。しめて銀貨１枚です。

リューイ達が戻ったことを確認して、馬車は出発します。
「どうだったね？」
サミーネおばさんがリューイに尋ねます。どうやらギルドに行った事を知ってるみたいです。
「この先が怪しいみたいだ。出来るなら夜は町に泊まりたいが・・・」
「やっぱりね。商人仲間も同じ様なことを言ってたよ。でも、この先はしばらく村が無いんだよ・・今夜も野宿だよ。」
サミーネおばさんは馬車を早めます。少しでも条件の良い休憩所を見つけるために。

メギドの火

小さな村で昼食をとった後は、馬車をひたすら走らせます。
街道のこの辺りは、林が迫っているので野宿するには少し物騒だからです。
馬車を駆るサミーネおばさんは、もう少し行くと山裾を離れ、広い丘陵地帯になると教えてくれました。

ガラガラァ～
突然、後ろの方で大きな音がしました。
リューイは御者台から身を乗り出すように後ろを見ると、馬車の1台が転倒して積荷を街道にばら撒いています。
「馬車が！」
「ドォーオ！！」
リューイの声で、おばさんは馬車を急停止しました。
馬車の車輪を固定して、後ろの様子を2人で見に行きます。

「こりゃ、時間がかかるねぇ・・・荷も多いし、他の馬車に分配する事も出来きゃしない。予備の車輪を積んでる馬車は誰だい？急いで修理するよ。」
リューイは、周辺を急いで確認します。
今の所は、生体レーダに反応はありません。
ルミナとサンディ達も馬車を降りてきたので、3人に車列の前と後ろの見張りを頼みます。

馬車の修理はの2人のおじさんが後ろの方の馬車から車輪をころころと転がしながら持ってきました。
その間におばさんの指示で横転した馬車から荷物を奥さんと子供達が運び出します。

空荷になった馬車を、リューイとおじさん達が一緒になって、エィ！って元に戻します。
最後はリューイ1人で馬車を支えている隙に、おじさん達が車輪を取り付けました。

「あんたが、力持ちで助かったよ。」
おばさんから、お茶を受取ったリューイは苦笑いで誤魔化します。
「荷を積んだら出発するけど、どうやら車軸にヒビが入ってるようだ。あまり早くは進めないねぇ。」
がっかりした様子でおばさんが、子供達の荷上げの様子を見てます。
「随分頑丈な梱包ですね。」
「判るかい。あれは、東方から船で運ばれてきた食器だよ。土で出来てるらしいんだけど、ガラスの光沢があるのさ。貴族達に飛ぶように売れるんだけど、壊れやすくてね。運ぶのに苦労するよ。」
多分、陶器か磁器なんだろうとリューイは思いましたが、この世界にもあるんだ。って少し懐かしくなりました。

ルミナが後ろから走ってきました。

「だいぶ、馬車が連なったぞ。少し煩くなってきたが、まだ掛かりそうか？」
「いや、もう直ぐ終わりだよ。・・そうだね、この先の街道が広くなったところで先に行ってもらおうかね。悪いけど、後ろの奴らにそう言っとくれ。」
そんな事を言ってる内に荷上げは終わったようです。

「それじゃぁ、出発するよ！」
サミーネおばさんの合図で車列はのろのろと街道を進み出しました。

少し、進むと街道が広くなったところにさしかかりました。
おばさんは馬車を道の端に寄せます。車列が全て道に寄ると、後の馬車が次々と追い越していきます。
だいぶ、後ろに馬車が居たみたいです。
すれ違う馬車は、大丈夫かい？・・気をつけてな！なんて声を掛けてくれます。
商人同士の連帯感というか思いやりというか・・でも、知らない人達が心配してくれるのは嬉しく思ったりしてます。

後ろの馬車がいなくなったことを、最後尾の馬車からルミナが手を振って知らせてくれました。
おばさんは馬車を出発させます。

村を出る時は馬車の速度も結構速かったのですが、今は歩くより少し早い程度です。
山裾に続く、森や林を真近に見ながらのろのろと馬車は進んでいきます。
リューイは生体レーダをずっと展開していますが、今の所反応はありません。

山裾を少し離れた所に休憩所がありました。
今日はここで野宿です。
近くの森はありますが、今のところ反応はありません。
でも、心配なので、男の子達が薪を取りに行く時には一緒についていきました。

その夜、サンディ達と交替してルミナと焚き火の番をしていると、生体レーダに反応が有りました。
「・・来たよ！」

「あぁ・・凄い殺気だ。森からだな。」
「サンディ達を起してくれ。俺はおばさん達に連絡する。」
2人は手分けして皆を起します。
ドルコイとサイネスおじさんは小型の弓を持ってきました。おばさん達は鍋やフライパンです。
おばさん達は子供達を馬車から離れた藪の中に隠しました。

「相手は、森からやってくる。数は多い。盗賊か、魔物かはまだわからない。」
リューイが状況を皆に説明します。
「方向が森なら、馬車を背にして戦えるわけね。」
「リューイと私が街道で戦う。サンディ達は馬車の影から援護だ。サミーネさん達も援護してくれるとありがたい。」

テキパキとルミナが指示を出します。落ち着いて指示を出すところを見ると、安心出来るんですよね。でも、赤い靴の本当のリーダーはリューイなんですけど・・
焚き火に薪を沢山入れて少しでも周囲を明るくします。ドルコイさんが簡単な松明を何本か作ってました。
戦闘が始まったら、街道に投げて周りを照らし少しでもリューイ達の戦闘が楽になるように考えてたみたいです。

街道に出たリューイは鋼の杖を構えます。
「森の間際まで来てる！」
「あぁ、盗賊じゃないな。・・魔物だ！」
ルミナがオニギリを肩を回すようにしながら抜いて構えました。

ギャァー！！
手に棍棒や、小型の剣、斧等を持ったオークが、わらわらと森か

ら叫び声を上げて飛び出してきます。

「宝をねらってきたのか？厄介な奴らだ。・・リューイ皆殺しにしろ。こいつ等、人は食べるし、女は慰みものだ！」

最初のオークをシュパっとオニギリで切り裂きながらルミナが叫びます。

リューイも鋼の杖を回転させながら次々とオークに、その杖を叩きつけていきます。

馬車の後ろから、松明が街道に2本、3本と投げ込まれました。明るくなった街道に、オークが犇いています。

ズドォーンっと音がして何匹かのオークが吹き飛ばされています。ルミナの魔法とサンディの爆裂ボルトのようです。

馬車に近寄ったオークはドルコイさん達の弓矢によって倒されていきます。

「しかし、とんでもない数だな・・リューイ何とかできないか？」

（姫さん・・姫さん。緊急事態発生！）

（状況は、判ってるわ。・・・メガ粒子砲で森の際を攻撃します。後15秒後に攻撃可能！攻撃最終命令は貴方に任せます。）

（え！）

（艦首方向最終調整！・・・メガ粒子砲、最低出力で発射シーケンス開始！・・目標ＧＰＳで最終補正！）

（えぇ！！）

（メガ粒子砲発射後の環境測定用無人探査機射出！！）

（えええぇ！！！）

一生懸命、オークと戦いながら事態の進捗に着いていけないようです。

（メガ粒子砲発射オールクリアー。リューイ！合図よろしく！！）

はぁ～っと息を吐きます。一応、自分達の事を考えて準備してくれたみたいなんですけど・・どんなことになるやら考えただけでも気が重くなります。

「皆良く聞け！・・今までにない術を使う。森の間際を攻撃するから、とりあえず何かにしがみ付け！！」

リューイは大声で皆に注意します。

リューイは急いで回りのオークを片付けました。次のオークがやってくるまでに少し間が開きます。

「天、我の願いを聞き地上の悪を滅ぼしたまえ！・・【メギドの火！！】」

ドドォーン！！

その言葉と同時に、天空から眩い紅蓮の光が降り注ぎ、森の一角が爆発しました。

ドドォーン！！・・・ドドォーン！！・・・ドドォーン！！

さらに、光が何度も振り注ぎ周囲を爆発させます。

ルミナ達は咄嗟に馬車にしがみ付きましたが、激しく大地が蠢きます。

「何なのこれ・・・」

サンディが泣き声を上げてます。

おばさん達は地べたに尻餅をついて馬車の車輪にしがみついてます。くわばら、くわばらの状態です。

そんな中、リューイは1人で動けずにいるオーク達を葬っていきます。

地面の振動が収まった時には、動く事が出来るオークはいません

でした。

リューイは周りを見ながら生体レーダでも敵がいないことを確認します。

完全にオークの群れを葬ったようです。

（残存放射能反応無し・・メガ粒子砲攻撃に伴う環境変化は認められず・・リューイＯＫだよ！）

（ありがと・・・でも、次は穏便なやつでお願いしますね・・）

（考えとくわ。・・・さぁ、皆！宴会だよ。将軍は寝てるから飲み放題ね！！）

なんか、遠くからオォー！っていう声も聞こえてます。

「痛たた・・何時もながらとんでもない術を使うな・・味方で良かったよ。」

ルミナが馬車に肩でも打ちつけたのか痛そうに歩いてきます。

「お姉ちゃん・・こっちが死ぬかと思ったよ～・・」

焚き火の方に歩いていくと、ライムがヨロヨロと馬車の下から這い出してきました。

皆、体のあちこちを押さえながら、イテテテ・・って言ってます。どうやら、着弾と爆発の振動であちこちぶつけたみたいですね。

「イテテ・・いや～参ったよ。あんな魔法は始めて見るね。しかし、とんでもない威力だ。」

サミーネおばさんが腰を押さえながら言いました。

今は未だ見えてませんけど、明るくなったら森の惨状を見てまた吃驚するんでしょうが、今はそんなことは誰も知りませんからライムが入れてくれたお茶を飲んで、とりあえず一息入れています。

サムズ市到着

次の朝です。
皆さん、眠りから覚めて・・そういえば昨夜は・・・って周りを見た途端、吃驚してます。
だって、昨日の夕方には休憩所の近くまで迫っていた森が跡形もありません。
でっかい穴ぼこがあっちこっちに開いてます。穴の周りにはオークの骸があちこちに散らばってます。5体満足なものはありそうも無いです。そして少し煙が出てるとこもあります。

「あれって、夢じゃなかったのね・・」
サンディが無表情な顔で言ってます。
「とんでもねえな・・王宮魔道師でもここまではしないぞ。確か【メギドの火】って言ってたな。どんな火なんだ?」
ルミナもブツブツ言ってます。
「まぁ、とりあえずは良かったよ。あんたがいなけりゃ、今こうして吃驚してもいられないからね。」

反応は色々ですけど、とりあえずはOKみたいです。
みんなでオークの残骸を調べて換金材料を探しましたが、何も持ってなかったみたいです。ちょっと残念でしたね。
馬車の調子も悪いのでぐずぐずしてるわけには行きません。みんなで朝食を食べて、次の村に出発です。

ゴトゴトと荷馬車は走ります。歩くより少し早い程度ですが、今の所車軸の方は大丈夫みたいです。
昼過ぎには、次の村に到着しました。
早速、荷馬車の修理です。上手い具合に作り置きの車軸がそのま

ま使えるみたいで、修理に時間は掛からないとのことです。

とりあえず、リューイ達は村のギルドにオーク討伐の報告に行きました。

「えぇー！あのオークを全滅させたんですか？」

カウンターのお姉さんは信用してくれません。

「あぁ、やっつけたぞ。ついでに地形も変ったけどな。」

「あのオーク達には報奨金が掛かってまして・・・」

「それは、要らない。他の依頼のついでにやったまでだ。ちなみに使った魔法は【メギドの火】だ。それ以外ではあのような惨状は起きない。森の一部を消しちまったから、報奨金で相殺だ。」

呆気に取れれている内にギルドを後にしました。

馬車に着くとサミーネおばさんが馬車に弁当を配っています。

サンディ達も受けとって馬車に乗り込みます。

馬車に揺られながらお弁当を食べるのも気持ちがいいものです。

遠くの景色を眺めながらパクパク食べているとおばさんがお茶をポットから出してくれました。

「いやぁー女の子ばかりの冒険者だからどうなるか心配だったけど、やるもんだねぇ。後、1泊野宿をするとサムズ市に着くよ。そしたら、お別れだけど、チームの名は何ていうんだい。次も頼みたいからねぇ。」

「・・赤い靴って言うんです。」

「女の子らしい名前だねぇ。そういえば皆赤い靴を履いてるんだ。へ～ぇ・・」

おばさんは昨夜のオークを退治出来て機嫌がいいみたいです。

街道と都市について色々教えてくれました。

そして、リューイ達が王都に行くことを知ると、カレミーという宿を尋ねるように言いました。

「私の紹介だと言うんだよ。それで泊めてくれるから。」
きっと知り合いの宿だろうと思い、解りました。と答えます。

山裾を遠く離れた休憩所が今晩の野宿場所です。
明日はサムズ市に到着します。そんなことを皆さん考えているようで、ちょっとウキウキした雰囲気です。
でも、４人は昨晩のオーク襲来を思い出して、しっかり焚き火の番をして夜を過ごしました。

次の日、朝早く馬車を走らせると、昼過ぎになって、遥か彼方に大きな建物が見え出しました。
サムズ市にある教会の尖塔です。
夜は尖塔に明かりが灯り、遠くを通る旅人の目印になります。ちょっと灯台みたいですね。

サムズ市に近づくにつれ高い城壁が見えてきました。サムズ市は商業都市です。貴族は居りません。一番偉い人は市長でしかも商人なんだそうです。
貴族がいないので兵隊もおりません。しかし、高価な商品はある・・・ということで高い城壁に囲まれています。

夕方にはまだ早い時間にサムズ市の東門をくぐりました。
門をくぐったところで、門番による積荷の検査です。
やはり、違法な商品もあるらしく、馬車1台1台を入念に検査します。
検査が終わると、サミーネおばさんが通行税を払います。積荷はここが終点なので税がかかりません。リューイ達も冒険者の特権で税免除です。
サミーネおばさんは税を払い終えるとリューイ達の所に来ました。

「ご苦労だったね。オークの時はもうだめかと覚悟したんだが・・いい酒のさかなさ。はい。これが報酬だよ。そっちが空いてる時はまた利用させて貰うよ。」
おばさんはそう言ってリューイに銀貨２０枚を渡しました。

サミーネおばさん達と別れると、リューイ達はギルドに出かけます。
さすがに市だけあって、いろんなお店が通りに店を出しています。きっと明日はサンディ達に連れられてショッピングになりそうです。
十字路を２つほど過ぎると立派な石造りの２階建ての建物が見えてきました。ギルドの看板が扉の上にかかっています。
扉を開けて中に入ると、広いですがいつものギルドの風景です。
カウンターのお姉さんのところに行って登録を済ませると、依頼板のチェックです。

「西に行くような依頼は無いみたいね。」
「早々あるものじゃない。少しの間、このサムズで休息して、また旅に出よう。」
「ライムも歩けるよ。もう大丈夫だよ。」
３日程でしたが馬車の旅は結構楽でした。また歩くのかと嫌な気持ちもありましたが、目的地は王都です。まだ、半分も来てません。

「これなんか、面白そうだけど・・」
「どれどれ・・ジギタ草至急求む。２０本以上必要。報酬は銀貨１枚。」
「率は良いけど、今時分生えてるのかな？」
「２，３日はサムズに居るんだし、気晴らしに出かけるのもいいかも。」
「でも、時期はずれだから依頼を受けないで出かけよう。」

ギルドを出て適当な宿を探します。
宿はギルドの目の前にありました。酒場と兼用の宿です。
2泊分の宿代を払うと、酒場の隅で食事を出してくれました。

「それでよ。森のオークが全滅した。ってことだ。」
「そんじゃ、あの森のあたりはもうあぶなくねえってことだな。」

カウンターでお酒を飲みながら男達が噂話をしています。
「しかし、どんな技なんだ。森が無くなるような魔法は聞いたことが無いぞ。」
「若い娘っ子の4人組みらしいぞ。ギルドの噂ではな。」
「ほう・・しかし、それは無いな。王国の宮廷魔道師あたりが出張ってきたんじゃないかと俺は思うぞ。」
「いや、ギルドの話だと、いやに具体的だったな。剣を背負った娘に、鋼の杖を持った娘だそうだ・・・丁度あの4人組みみたいに・・・！」

リューイ達は食事を終えて、部屋にかえってお休みです。
とんとんと階段を上がっていきます。

「あいつ等か？」
「あいつらだ。しかし・・魔法使いには見えんな」

使ったのは魔法じゃないんですけど、この世界の人には魔法と映るんでしょうね。
今夜は、久しぶりのベッドとフトンで寝られます。野宿と違って安心して皆さんお休みです。

オバケ退治

トコトコと４人が森へ行く小道を歩いています。
ジギタ草は森の木の傍によく生えています。そんな訳で近くの森に行って探す事にしました。

途中で木こりのおじさんと会いました。

「おめえら、何処へ行くんじゃぁ？」
「森に行って薬草探すんだよ。」
ライムが元気に答えます。
「森にゃ、でっかいオバケが出るんじゃ。おめえら、気ィつけてなぁ。」
「「ハァ～イ！」」

木こりのおじさんと別れ、４人は森に入っていきました。
オバケって、あれだよな・・・この世界にもいるんだろうか？なんてリューイは考えてます。

「オバケって何？」
リューイは、ライムに聞いてみました。

「え～とね。いろんな種類がいるけど・・大ッきくて、口がこんなで・・目がドドーンとしてるんだよ。」
「？？？」
どうやら、リューイの考えてるオバケと根本的に違ってるようです。まるで怪物です・・・あってるかも！です。

「オバケって倒せるの？」

今度はルミナに聞いてみます。
「あぁ、倒せるぞ！いいか、上から下にぶった切るんだ。いいな。」
此処まで来ると、サンディにも聞いてみたくなりました。
「オバケってどこにいるの？」
「ん～とね。いろんなとこにいるけど、普段は木の上かな。」
絶対、お化けと違います。でも、今回はジギタ草を集めなければなりません。上手くいけばオバケに合えます。
森の木の根元付近をあっちこっち探し回ります。
でも、やはり季節が早いんでしょうか、なかなか見つかりません。
「もうちょっと、日当たりの良い方に行ってみる？」
サンディの提案に皆で少し東に移動しました。
まだ遠くの山は雪が残っていますが、この辺りはぽかぽかと暖かです。
「あった！・・・でも小さいよ。」
最初の１本はライムが見つけました。
確かに小さいですがギザギザの葉はジギタ草の特徴です。
辺りを探すと・・・あるわあるわ・・あっと言う間に２０本以上が集まりました。
「この辺は暖かいのね。ナナイ村だと、新緑の月にならないと取れないんだけど・・」
サンディは感心してます。
「さて、昼も過ぎたことだし、引き上げるぞ！」
ルミナが号令をかけます。
皆、は～い！って返事をしてますけど・・

ガサガサって森の中を歩いていきます。西に真直ぐ歩けばさっきの小道に出るはずですからね。
ガサガサ・・ガサって進んでる時です。

ビギャー!!ピギャー!!

「「オバケだ・・」」
ダダダァーって4人は逃げ出します。リューイもオバケってどんなの？って思ってますけど、付き合って逃げ出します。

ビギャー!!ピギャー!!
段々と声が大きくなってきました。

「逃げ切れんか・・・皆!殺るぞ!!」
ルミナはそう言うとオニギリを引き抜いて構えます。
サンディ達も覚悟を決めたようです。
リューイは良く判らないけど、取り合えず鋼の杖を構えます。

ガサガサっと木立がざわめいたかと思ったら、木立の上の方から首がニューっと降りてきました。
ピギャー!!
ニワトリのでっかい頭ですが首が異様に長いです。

「ヤバイ!オバケの目が攻撃色だ。来るぞ!」
ルミナはそう言うなりオニギリをニワトリの頭に振り下ろしましたが、首がヒョイって曲がって当たりません。
オバケが首を回しながらサンディに迫りましたが、サンディは魔法の杖で、えい!って火炎弾を頭にぶつけます。
ボカン!ッて軽い炸裂音がしましたがオバケは気にした様子もあ

りません。

「ルミナ！弱点はないのか？」

「こいつは、キメラなんだ。鳥と蛇とトカゲを合成した生き物だ。とにかくしぶとい。先ず、頭を落として、それから胴だ。胴は木立の上の方にいるはずだ。」

リューイは猿飛びで木立の上の方の枝まで飛び上がりました。

そこには、大きなトカゲが木々に足をかけています。首は蛇になって木立の下の方に伸びてます。

「ドーッリャ！」

鋼の杖をトカゲの背中に叩きつけましたがボヨ～ンと跳ね返ってしまいました。

とんでもない弾力です。

（姫さん！聞こえる？）

（感度良好！！）

（あれ・・使いたいんだけど・・高いところでも大丈夫かな？）

（フンフン・・確かに使い所だわね。大丈夫よ。いい訓練になるでしょう。）

（それで、下に仲間がいるんだけど・・・）

（大丈夫よ。２０ｍ上空から出現。落下しながら長剣の一撃。しかる後に地上２ｍで回収。これでいいでしょ。）

（ＯＫ！）

（では、最終命令はそっちでお願い。・・・てめえら、出番だぞ！準備はいいな！！　オオォォ！！！）

（だいじょうぶだよね・・・たぶん・・）

「皆、一時避難少し離れろ！！」

【レギオン！！】

ドッカーン！と言うおとが響き渡ると、（ウヲー！）というときの声が上空から響くとともに、抜刀したローマの戦士風の鎧を着た集団で飛び出します。
戦士達は落下しながら、オバケの胴を作っているトカゲに、すれ違いざまに剣を振り下ろします。
バシュ！バシュ！！と何かを切りつける音が立て続けに響きます。血飛沫で、あたりを霧のようです。
戦士達はそのままの速度で落下するかと思いましたが、地上２ｍぐらいに発生した空間の歪みに消えて行きました。最後の１人がこちらを振り向きピースサインを出してます。
ドダァーンっと木立の上からオバケが落下してきました。
リューイは走り寄ってまだギャピーって鳴いているニワトリ頭に鋼の杖をボガ！って叩きつけました。
オバケ殲滅です。

あっけに取られていた３人ですが、サンディ達は１度見てるんですよね。
「なんだ。あれは？」
「お姉ちゃんの魔法だよ。【レギオン】って言うらしいけど・・」
「リューイは戦士を、１個中隊何時でも出せるのか？」
「いや・・・どうしようもない時は、出すけど・・あまり出したくないけど・・」
「戦士だか、魔道師だか解らないが、王都ではあまり使用しないほうが良いぞ。王宮魔道師でさえ今の技は再現できん！」
なんだかんだ言いながら、オバケの換金部位を探します。ニワトリ頭のトサカがそれです。ルミナがオニギリで切り離しました。
オバケを退治して少し進むと森の小道に辿りつきました。
少し疲れましたが、森の小道をサムズ市に向って歩きます。

トコトコと小道を辿り、サムズ市のギルドに行きました。
ギルドのお姉さんに交渉です。

「あのう・・依頼があったんですが、いまの季節では無理だと思って依頼を受けなかったんですけど・・・どうやら手に入れたんで持ってきました。報酬は頂けますか？」
「あぁ・・ジギタ草ね。でも難しかったでしょ。いいですよ。・・・ちゃんとありますね。はい。報酬の銀貨です。」
サンディは銀貨を手に入れました。

次に左の換金所に行きます。
「あのう・・・これ、換金したいんですが・・」
「どれ・・！！こ、これはオバケ・・・」
「だめですか？」
「いや、だめじゃないが・・・お前達が倒したのか？・・・いや、倒さない限りこれは無理じゃな・・ちょっと待て！」
ドワーフのおじいさんは奥の事務所に下がりました。
やがて、エルフのおねえさんがやって来ました。サンディが換金を依頼したトサカを見てます
「確かに、オバケのトサカですね。・・これには討伐依頼も出ています。依頼報酬と換金で金貨2枚ですが、よろしいですね。」
はい！ってサンディは返事をしました。ピカピカの金貨を2枚受け取ります。

またね！ってギルドのお姉さんに手を振ってギルドを後にすると、サムズ市内のウインド・ショッピングです。
いろんなお店がありましたが、旅はまだまだ続きます。皆でお茶を飲んで、早めに宿に帰りました。

「それでよ。森のオバケが退治された。ってことだ。」
「そんじゃ、あの森のあたりはもうあぶなくねえってことだな。」

カウンターでお酒を飲みながら男達が噂話をしています。
「しかし、どんな技を使ったんだ。オバケを退治するってことは簡単じゃねえぞ！」
「若い娘っ子の４人組みらしいぞ。ギルドの噂ではな。」

リューイ達は食事を終えて、部屋にかえってお休みです。
とんとんと階段を上がっていきます。

「あいつ等か？」
「あいつ等だ。しかし・・そんな風には見えんがな。」

不思議なメイドさん

次の日の朝、リューイ達はギルドに向います。
護衛の依頼があれば馬車に乗れますし、無くても出発前にはギルドに連絡しなければなりません。
早速、受付のお姉さんに出発の手続きをしてもらいます。

「あのう・・出発前にカードの更新をした方が良いと思うんですが。」
「そうだな・・オバケも退治したし、ランクが上がってるかも知れんな。」
お姉さんの忠告にルミナは皆のカードを集めます。
お姉さんがドデンっとカウンターの下から出した水晶玉を順番に手に持ちます。
別の箱にそれぞれのカードを差し込むとカチャって音がしてカードの記載が変化します。

「ワ〜イ！黒の星４つだよ。」
「私も同じよ。強くなったものね。」
「銀の３つか・・・フム。悪くない。」
「・・・・・・・？」
「お姉ちゃん。どうしたの？」
ライムが硬直したリューイを見て、聞きました。ついでにカードを覗き込みます。
「え！・・・色が違う・・」
ライムの声に２人が駆け寄ってリューイのカードを手に取りジッと見つめました。
「金のカードとも違うのか・・・でも、カードに金の縁取りははじめて見るぞ。」

「この白い宝石は？」
「あのですね。私も始めて見るんですが・・どうやら実力は金だけど経験が銀って判定されてるみたいです。その白い宝石はオバケの討伐章ですね。」
「皆さんのカードにも着いてるはずなんですが・・・」
「あ！付いてる。でも、小さい・・」
「段々大きくなりますよ。もっとオバケを退治すると。」
そうなんだ。ってリューイにカードが戻ってきました。
基本的には銀の星４つになるんですね。

今度は、依頼板の所に行って、依頼書を皆で探します。
やっぱり、歩くより馬車がいいですからね。

「あった！」
「どれどれ・・護衛求む。王都まで。報酬銀貨１０枚。但し、女性に限る！」
「報酬は妥当な額だ。でも、女性限定が気になるな。」
「行ってみれば解るでしょ。皆強いし、変なことにもならないと思うわ。」

サンディは依頼書を手にとって、受付のお姉さんの所に行きました。
「これをお願いします。」
「やっぱり、選んでくれたわね。女性限定であればあなた達ぐらいしかいないから、そう書いたのよ。」
「では、これって・・・」
「あなた達への指名依頼ってこと。パーティの半分が黒では、はっきりと指名するわけにはいかなかったのよ。」
「しかし、指名依頼となれば報酬は破格のはずだ・・」
「破格よ。書いてあるでしょ。銀貨１０枚って。それは、１名に

付き１０枚ってことよ」

そんな訳で、リューイ達は依頼者の待つ西の門に向います。

途中の武器屋でライムの炸裂ボルトを補給します。今回は、手持ち金も多いので１０本買いました。

そして、小ぶりの長剣を２本買い込みました。ルミナがリューイに剣の使い方を教えるのだそうです。

門の手前のお菓子屋さんでおやつを買い込み、カバンに詰め込みます。

リューイは皆がお菓子を選んでる隙にパイプとタバコを買い込みました。素早く、腰のバックに収納します。ライムに見られたら、色々言われそうでしたから。

西門に着くと、小奇麗な馬車が３台並んでいます。その他に馬車はありませんし、旅人らしき人もおりません。

サンディが馬車の傍に立っているお母さん位のご婦人に声をかけました。

「あのう・・護衛を依頼されたのは、あなた方でしょうか？」

「あら、若い方々ですね。そうですよ。王都まで、お嬢様をお守りください。」

サンディは成り行きを見ている３人に手を振って、オイデオイデをします。

とことことやってきた３人をおばさんはみてます。やがて、４人が揃ったところで、カードの確認を要求しました。

４人のカードを見るや、吃驚してます。

「サミーネが、「若いがとんでもない連中だ！」って言った訳が解ったわ。これなら安心できます。そーですね・・前に２人。後ろに２人でお願いします。」

リューイがライムと前の馬車に乗り、ルミナとサンディは後ろの馬車に乗り込みました。
皆が乗ると馬車は出発です。
西門をくぐり、石畳の街道をガラガラと音を立てて馬車は王都に向いました。

サムズ市から王都までは馬車で5日程度の旅になります。歩くと2週間ぐらい掛かるかもしれません。
王都の前にルーディック市がありますが、ルーディック市までは小さな集落が点在してるだけになります。
そんな訳で、4日間は野宿することになってしまいます。

「ワ～ィ、凄くいいね。このクッション！」
ライムは感激してます。この前の馬車は荷馬車でしたが、この馬車は貴族が使うような乗用馬車です。車輪には貴重なバネが使われてますし、内装のソファーもふんわかです。
リューイはスポーツタイプの車を思い出したりしてます。道路の僅かなでこぼこをシートにゴツゴツ感じるのが似てるみたいです。

「あなた達は何処から来たの？」
リューイ達の乗る先頭の馬車には先に2人が乗ってました。紺のワンピースを着て白いエプロン・・メイドさんみたいです。
「ナナイ村からだよ。ずっと、東のほうにある山の村なんだ。」
ライムが答えました。メイドさん達はサンディより少し年上のようですがとても綺麗です。
「でも、あなた達は冒険者なんでしょ。強いんだよね。」
もう1人のメイドさんが話しかけます。
「ライムは・・ライムとサンディは普通だよ。リューイお姉ちゃんとルミナお姉さんが強すぎるんだ。」
「こんなことが・・・・」

ライムはメイドさん達に今までの武勇伝を話し始めました。
時々、メイドさん達がリューイをチラっと見るので、リューイは少し赤くなってたりします。
そんな話で時間が過ぎていきました。
「
ドオォ！！」
御者の声と共に馬車が止まりました。
外を見ると休憩所についたようです。太陽も真上にありますから、昼食を兼ねた休憩を取るみたいです。
リューイは外に飛び降りると、ヨイショ！ってライムを馬車から降ろしてあげます。
ライムはありがとって言ってサンディの方に走っていきました。
「その杖をちょっと見せてくださいませんか？」
メイドさんの1人がそう言ったので、リューイはどうぞ！って手渡しました。ライムの話で興味を持ったみたいですね。
「えぇー！！・・・重いぃぃー。」
メイドさんは片手で支えきれず両手でしっかり握ってます。
「結構、重いでしょ。でもお気に入りなんですよ。」
笑って受取るリューイをメイドさんはジト目でみてます。

リューイがサンディ達と合流するのを見て、もう1人のメイドさんが近寄ってきます。
「どうだった？」
「とんでもない重さだ。確かに鋼の杖だ。あれを振るえるなら大型の獣でも一撃だろう。」
「しかし、彼女の強さの根源は力ではない。」
「そうだ。【メギドの火】そして【レギオン】聴いたことも無い。しかし、その威力は、凄まじい限りだ。森を瓦礫に変える等、だれが信じる。私も見るまでは信じられなかった。」
なんか2人で密談してます。

リューイ達が待っているとメイドさんがお弁当とお茶を分けてくれました。
簡単にパンに野菜とハムをはさんだお弁当です。
ゆっくりと休憩を取って出発です。
馬車にリューイ達が乗り込むと、さっきのメイドさん達と違う人が乗り込んできました。でも一応メイドさんみたいです。

がたがたと馬車が走ります。途中の集落で一度止まると、民家から薪を買い込みました。夜の焚き火様ですね。
今度のメイドさん達もライムの話を興味深く聞いてます。
そんな中、ふとライムは話をやめてリューイを見ました。

「ねぇ、お姉ちゃん。【レギオン】と【メギドの火】って何なの？魔法の効果は判るけど・・言葉の意味がわかんない。」
2人のメイドさんはお互い頷きあいます。真相が聞けるかも知れませんからね。
「え～とね。まず、【レギオン】は、昔の軍隊の単位だよ。千人ぐらいかな。大勢をさす言葉でもあるんだ。」
「へ～ぇ・・だから一杯戦士が出てくるのね。」
「そして、【メギドの火】だけど・・・神様のお話で、神話って言うのがあるんだけど、その中にね、メギドっていう都市の話があるんだ。メギドはね。町中の人が悪い事しかしなかったんだ。それに怒った神様が天から光りを落として、その都市は滅んでしまったんだ。」
「なるほどね。だからお空の上から光りが降ってきてドカーンってなるんだね」

「聞いたか？軍隊の編成単位と都市の名だ。」
「はい。でもそんな名前は聞いた事もありません。」

メイドさんは2人でコソコソ話してます。

馬車の外は一面の畑です。
農家の人たちが馬や牛を使って畑を耕しています。
街道はそんな中をずっと西に向って続いています。遠くに、休憩所が見えてきました。
太陽がだいぶ傾いてきましたので、今日は此処で野宿になるでしょう。

王女様はお転婆娘

休憩所で野宿する者はリュウイ達だけです。
馬車を降りると、メイドさん達がおばさんの指示の元で、テキパキと夕食の準備です。
リューイ達も手伝おうとしましたが、焚き火の番を仰せつかって4人とも小さな焚き火を囲んでます。

「すみません。これお願いします。」
メイドさんが鍋を持ってやってきました。
はいよ。っとルミナは鍋を受取ると慣れた手つきで棒を3本組み合わせて、紐で鍵のようになった薪を吊ると、その鍵に鍋を掛けます。
「あまり、煙を出すなよ。美味いシチューはとろ火で長時間だ。」
リューイは盛大に燃やそうとして薪を加えようとしましたが、その一言で止めてしまいました。

後ろの方ではメイドさん達がおばさんの指示でテーブルセットを組み立てています。
どうやら馬車に折りたたんで収納しているみたいです。
そこに、別のメイドさんがやってきました。

「どうぞ、こちらにお座りください。」
さっきのテーブルに案内されました。テーブルには白いテーブルクロスが掛けられています。
4人はさっさと席に着きました。
「ここで、野宿だよね。」
「まさか、野宿でテーブルに着くとは思わなかった・・」

４人を見て、おばさんは馬車の扉を開けました。すると、そこから、軽そうな鎖帷子を着込んだ少女が降りてきました。
少女は４人の対面に座ります。
「お嬢様。この者達が今回の警護を行います。紅い靴という少女達です。」
おばさんが少女に説明します。
「大儀である。護衛は要らぬと申したが、乳母様にはかなわぬ。・・ギルドカードを見せて貰えぬか？」
何か、凄いお嬢様らしいですが、リューイは首にかけたギルドカードを外すと少女の前に置きました。
少女はカードを手にして観察してます。
「フム。銀４つで金の縁取りは始めて見る。討伐章は２つ・・」
少女はおばさんにカードを渡します。おばさんが丁寧にカードを返してくれました。
「私は王国の第２王女、エリーナだ。オバケ討伐を行うため王都からまいったのだが・・・貴方達に先を越されたようだ。」
「１人で十分と言ったのだが・・親衛隊を着けて、自分まで着いて来るとは・・・過保護で困る。」
４人はしばらく、ポケーっとしてます。だって、王女様ですよ。偉い人です。そんな人が目の前にしかも、オバケ退治をしようなんて・・・なんてお転婆な！
開いた口が塞がらない状態ですが、いち早く回復したリューイが質問します。
「あの・・王女様って言ったら、お城で舞踏会なんかで忙しいん

じゃないですか？」
「そんなことは無い。父も、お前の好きにしてよい。出来ればこれ以上城を壊すな。と言っておる」
（それって、じゃじゃ馬で、お転婆で始末におえないから、なるべく外にいろ。ってことだよな・・・多分。）
（世の中って広いね。私も似たような事言われた事があるわ。）
（やはり・・・）
「しかし、幾ら武芸に秀でても、王女様がオバケ退治とは・・・」
「国民を苦しめる魔物を討伐するのは、上に立つ者の使命と考える。」
「確かに、そうだけど・・・ちょっと、違うような・・」
「ところで、王女様のお年はお幾つですか？」
サンディが復活しました。
「今年で１６じゃ。そち達は？」
「ルミナが１８、リューイと私が１６、ライムは１２だよ。」
サンディは紹介しながら答えました。
「ほ～・・同い年か・・同い年の少女は皆私から逃げてゆく。話相手になって貰えぬか？」
「いいですよ。」
サンディは即答しました。
そんな話をしてる間にメイドさん達が料理を並べます。
シチューとサラダそれに柔らかなパンです。
食事が終わるとリューイ達は焚き火の番です。
そこにおばさんがやってきました。

「黙っていて申し訳ありません。姫様は優しく、正直な方なのですが・・小さい時から女の子らしい遊びに全く興味を持たず、貴族の男の子達とチャンバラごっこの毎日・・気がつけばギルドカードで銀を持つほどの武芸を身につけれれ・・・」

「俺達は気にしてませんよ。上に立つ方が、優しくて正直なら何も問題ないじゃないですか。」

「それは、そうなんですが・・・それを直ぐ実行なさるとなると問題です。」

「何時飛び出すか判らないものですから、メイドに扮した近衛兵が直ぐに姫様に同行できるようにしてますけど・・・」

「かく言う私も、銀２つです。」

４人は吃驚しました。だって、自分達がいなくても十分やっていける人達です。

でも、なんで自分達を雇ったんでしょうか？ちょっと判らなくなりました。

「姫様の同行者はだいたいいつもこの位の人数なんです。今回も何時もの通りオバケだ！って姫様が飛び出しそうになった所を、慌てて馬車に押込めて出発しました。でも、オバケは皆さんに退治されていました。そして、現場に行ってみると・・・姫様は大変興味を持って、帰り道を貴方達と同行したいと言い出したんです。・・それに、この所、街道に出没する盗賊団が気になりまして・・１００人を超す盗賊団では私達だけでは対処出来ません。ですから、護衛と言うのに偽りは無いんです。」

乳母様と王女が言っていましたが・・・苦労してるようです。育て方が少し不味かったみたいですね。

「大丈夫です、気にしてませんから。・・それに、同い年の女の子と同じように遊べないなんて・・お気の毒ですね。明日は、王女

様と一緒の馬車に乗せて頂けませんか。ライムのお話で少しは和むかと思うんですが・・」

「それは、是非お願いします。」

おばさんはそう言うと馬車の傍に行き、王女様と話をしているようです。

その後で、メイドさんを集合させました。何か指示しているようですがここでは良く聞こえません。

3人のメイドさんが焚き火の傍にやってきました。

「今夜は私達が番をしますから、寝てても大丈夫ですよ。」

メイドさんが不寝番をすると言ってますが、寝てもいられません。だって、依頼内容は護衛ですからね。

適当に交替しながら寝る事にしました。

でも、少しは楽が出来ると言う事で、ライムのお願いです。

「昔、昔、あるところに、1つの王国がありました。王様には1人の王女様がいましたが、王妃様はおりません。王女様が生まれた時死んでしまったのです・・・・・」

「ほう・・小人を7人集めると王子様が来るんだな・・・ドワーフで代用できるかな？」

「・・そんな王国があったかしら？」

「おとぎ話だよね、これ？・・でも、聞いたこと無いよ？」

「やっぱり、王子様が来るんだね。ライムもそう思ったもの！」

感想はまちまちでしたが、ライムには好評だったようです。

（姫さん！姫さん！）

（盗賊１００人ってどうするんだよ。ばらばらに攻めてきたらどうしようもないよ。）

（船を利用すると広域攻撃になるし、海兵隊だと後で回収するのが面倒だし・・・）
（大型怪物相手は準備万端なんだけど・・盗賊相手じゃね・・・！！）
（なにか、閃いたとか・・）
（良く聞きなさい。先ず、ターボで加速状態にして、杖を回しながら自分も回転しなさい。次に重力場を制御して地上数センチを高速で移動しながら敵に近づくと・・・触れる相手は全て杖に当たってポーンと飛んでいく・・いいアイデアでしょ。名付けて、【ダブルサイクロン】これで行きましょう。）
（なんか、目が回りそう・・）
（大丈夫！そんな柔な改造してないから。・・じゃぁ、頑張ってね。）

ちょっと不安でしたが、何とかなりそうだと自分に言い聞かせました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8986v/

ある晴れた日に

2011年10月9日11時23分発行